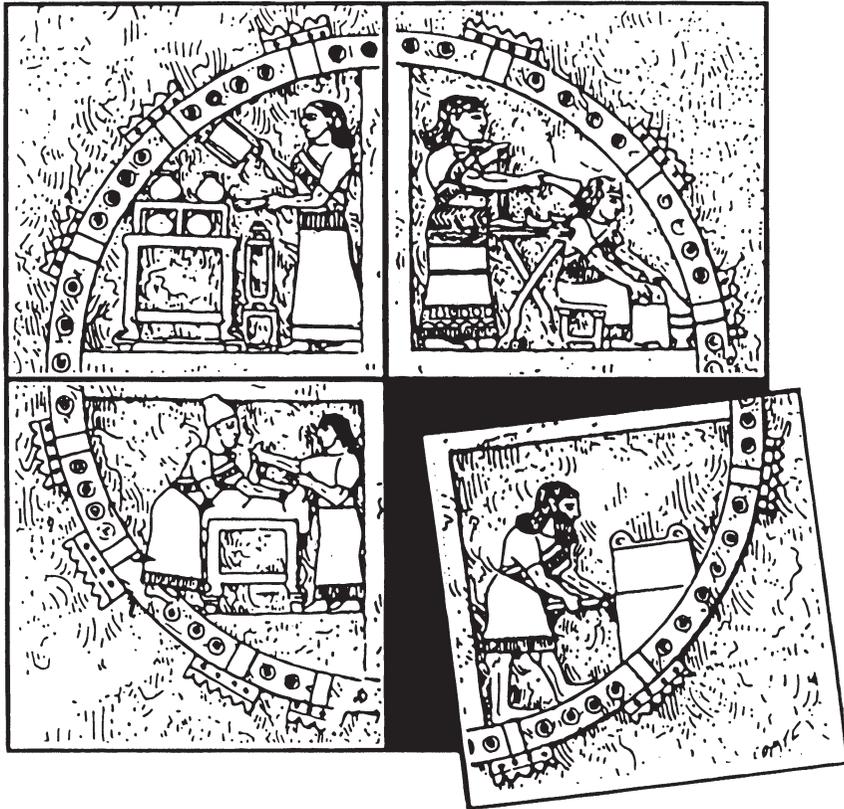


# 日本女子大学 総合研究所紀要

25



## 目 次

- 日本女子大学卒業生小林孝子の衣服標本研究  
—1930年代の日本女子大生とその家族の衣生活—  
Kobayashi Takako's Fabric Collection at Japan Women's University:  
The Sartorial Life of a Student and her Family members in the 1930s  
……………研究課題 (72) 研究代表者 森 理 恵 … 1
- ウィリアムズ症候群のための“支援プログラム”の開発  
—投影法心理検査を基盤として—  
Development of a Support Program for People with Williams Syndrome  
Using Projective Psychological Tests  
……………研究課題 (76) 研究代表者 吉 澤 一 弥 … 91



日本女子大学卒業生小林孝子の衣服標本研究  
—1930年代の日本女子大生と  
その家族の衣生活—

Kobayashi Takako's Fabric Collection at Japan Women's University:

The Sartorial Life of a Student and her Family members in the 1930s

安 藤 健 ANDO Takeshi  
(一般財団法人ニッセンケン品質評価センター専務理事)

内 村 理 奈 UCHIMURA Rina  
(日本女子大学家政学部被服学科教授)

奥 脇 菜那子 OKUWAKI Nanako  
(日本女子大学家政学部被服学科助教)

岸 本 美香子 KISHIMOTO Mikako  
(日本女子大学成瀬記念館学芸員)

沢 尾 絵 SAWAO Kai  
(東京家政大学家政学部服飾美術学科准教授)

田 邊 しずか TANABE Shizuka  
(鹿児島県立短期大学生生活科学科助教)

松 梨 久仁子 MATSUNASHI Kuniko  
(日本女子大学家政学部被服学科教授)

箕 輪 恵 枝 MINOWA Yoshie  
(日本女子大学学術研究員)

森 理 恵 MORI Rie  
(日本女子大学家政学部被服学科教授)

## 目 次

- I 日本女子大学成瀬記念館所蔵小林孝子衣服標本とその重要性 森 理恵
- II 日本女子大学成瀬記念館所蔵の小林孝子関係資料からみる  
小林孝子と日本女子大学 岸本美香子
- III 小林孝子衣服標本の貼付試料の組成と組織について 松梨久仁子  
安藤 健  
奥脇菜那子
- IV 小林家の浴衣を通してみる1920—1930年代の大衆浴衣 沢尾 絵
- V 色彩に対する女性の意識と流行色：  
『小林孝子の衣服標本』の郁の着物を対象として 箕輪 恵枝
- VI スポーティという語が表した女性の洋服  
—1930年代後半の雑誌『スタイル』を中心に— 田邊しずか
- VII 1930年代の婦人服における日米比較  
—小林孝子衣服標本とシアーズ・ローバック通信販売カタログの検討から—  
内村 理奈

# I 日本女子大学成瀬記念館所蔵小林孝子衣服標本とその重要性

森 理恵  
MORI Rie

## 1. 共同研究「日本女子大学卒業生小林孝子の衣服標本研究」

### (1) 本研究の背景と目的

共同研究「日本女子大学卒業生小林孝子の衣服標本研究—1930年代の日本女子大生とその家族の衣生活—」は日本女子大学総合研究所の研究課題72として2019～2021年度におこなわれたものであり、共同研究のメンバーは次のとおりである（あいうえお順）。安藤健（一般財団法人ニッセンケン品質評価センター専務理事）、内村理奈（日本女子大学家政学部被服学科）、奥脇菜那子（同）、岸本美香子（日本女子大学成瀬記念館）、沢尾絵（東京家政大学家政学部服飾美術学科）、田邊しずか（鹿児島県立短期大学生活科学科、2020～2021年度）、松梨久仁子（日本女子大学家政学部被服学科）、箕輪恵枝（日本女子大学学術研究員）、森理恵（日本女子大学家政学部被服学科・代表者）。本研究の背景と目的は以下のとおりである。

1936年3月に日本女子大学家政学部を卒業した小林孝子の卒業論文『考現学より見たる一家庭』（日本女子大学成瀬記念館所蔵）は、住まいの敷地や平面図立面図から家内にある大小すべての物品、そして家計や献立表といった行動面にいたるまで、「一家庭」のすべてを書き／描き出した非常に貴重な記録である。当時、日本女子大学校に「形態美論」を教えに来ていた考現学者今和次郎の指導を受けたものであり、今和次郎の遺品とともに伝来したことから、「今和次郎コレクション編集委員会」によって調査がおこなわれ、その意義が高く評価されている<sup>1)</sup>。また、同委員会により、卒業論文の全ページが複写、製本され、さらに、「はじめに」、「目次」、そして小林自身が卒業後も継続した卒業論文完成にいたる経緯を記した「後記片々」が活字化され併せて収録されている<sup>2)</sup>。このため、小林孝子の卒業論文については、劣化が心配される貴重な原資料を紐解かずとも、研究をおこなうことが可能になっている。

本研究の対象とする「小林孝子衣服標本」<sup>3)</sup>は、この卒業論文の完成後に製作され、卒業論文と共に保管されてきたものである。卒業論文と共に保管されてきた資料<sup>4)</sup>には、この「衣服標本」のほかに、後述する「被服しらべ」と題名がつけられ自家製本された冊子や、小林が家族の被服を調査するにあたり作成し活用したと思われる紙札<sup>5)</sup>などがある。

小林孝子衣服標本は卒業論文に比べ、注目される機会がこれまであまりなかったが、2018年5月8日～6月23日に成瀬記念館の展示で初めて公開された。また、展示に当たり簡単な調査をおこない、本研究代表者が簡略な資料紹介をおこなった<sup>6)</sup>。本研究は、この「小林孝子衣服標本」について初めての詳細な調査研究をおこなうとともに、資料の複写を掲載した資料集を作成し、劣化が心配される原資料に当たらずとも研究が可能となるように、活用の便宜をはかることを目的としておこなわれたものである。

(2) 「小林孝子衣服標本」の概要

小林孝子衣服標本の概要は次のとおりである。

製作者	小林孝子 日本女子大学家政学部1936年卒業
製作期間	1940年4月19日～10月25日
件数	214件
使用者	小林孝子本人と家族（祖母、母、父）、「女中」、その他
用途	和服、洋服、インテリア、その他
地域	横須賀、東京、その他
年代	19世紀半ば（推定）～1940年

※使用者、用途、地域、年代は標本に貼られた生地についての事項

以下、項目ごとに述べる。

【製作者】小林孝子は日本女子大学家政学部を1936年3月に卒業した。今和次郎の「形態美論」を熱心に受講しており、寮監の井上よし子の勧めもあって今に卒業論文について相談し、上述の卒業論文を書き上げるにいたった<sup>7)</sup>。しかし小林は一旦卒業論文を提出したものの未完成であると考え、大学から自身の卒業論文を借り受けて続きを執筆し、1938年4月に完成させた<sup>8)</sup>。衣服標本にとりかかるのはその2年後であるが、その頃の事情については、書き残されたものがないので明らかでない。

【製作期間】上記のように、この衣服標本製作にいたる小林の動機等は明らかでないものの、標本の一点一点に日付のスタンプが押されているため、製作期間が1940年4月19日～10月25日と判明する。4月～6月は毎日から2日おきぐらいのペースで熱心に進め、7月8月は休み、9月2日より再開するが、その後は9月5日、30日、10月13日、22日に作業をおこない、10月25日に「母の浴衣」を1枚製作したのが最後となっている。

この標本には卒業論文のような「はじめに」も「後記」もなく、それらが失われた可能性もあるが、この標本が製作途中であった可能性も考えられる。

【件数】214件に上るひとつひとつの標本は、はがき大の用紙に衣服等の端切れを貼りつけ、余白にコメントをペンで手書きし、製作年月日と製作者氏名（小林孝子）のスタンプを押している。

はがき大の用紙を裏返すと、横置き縦書きで「神奈川縣立横須賀高等女學校／制服用生地色見本／四ケ年間染色耐久力共ニ絶対ニ保証ス／修繕ハ無料／制服ノ御用命ハ東京 高村洋服店へ」（／は改行）と印刷されており、中ほど上端に糊で張り付けたウールの繊維が残っている。神奈川県立横須賀高等女学校は小林の出身校であり母の勤務先である。同校で配られていた制服生地見本のカードを大量に譲り受け、生地をはがし、裏を衣服標本作成に活用したと考えられる。また、ほぼ2倍の大きさの用紙を二つ折りにしたものが3件あり、これらは三越百貨店や横須賀の「さいかや呉服店」の休業日や売り出しの挨拶状であった。なお1枚の用紙に複数の端切れを貼ったものや、複数の用紙に同じ端切れを貼ったものもあるので、標本の件数と端切れの点数や種類の数は一致しない。

【使用者】これらの端切れの生地が使われていた衣服等の使用者は主に小林孝子の家族である<sup>9)</sup>。小林の家族は1855年生まれの祖母、1886年生まれの母、1880年生まれの父、1916年生まれの小林孝子本人である。祖母は母方の祖母で群馬県高崎地方の出身。卒業論文によると、婚家の隣が心理学者の松本亦太郎の養家で親しかったという。母は東京女子高等師範学校出身で1940年当時は神奈川

県立横須賀高等女学校教員であった。父は元海軍大佐で、当時は東京電燈株式会社（今の東京電力）の横浜支店経理課長であった。

また小林の一家は「女中」を置いており、卒業論文の中にある間取り図を見ると北西の角に、半間の押入れが2つ付いた2帖間が「女中室」となっていて台所が隣接している。卒業論文執筆時（1936年）の「女中」は小林より3つ年上のようなのであるが、衣服標本製作時の「女中」は16歳で洋服地の「お見立」などをまかされている。

標本にはこの他、幼くして亡くなった小林の姉や、日清戦争に出征した母方の祖父、日露戦争で亡くなった父の兄、「祖母の祖母」、「明治元年生まれの老女中」といった人物の所用品が含まれる。

【用途】小林は下着類と父の洋服を除く、家族の衣服の端切れをできるだけ収集し（「女中」についてはお仕着せのみ）、その衣服の入手や繰り回しの経緯、そして着用者や周りの人がその衣服を気に入っていたかどうか、といったことまでを子細に記録した。また繰り回しの結果も含まれるが、布団、座布団、カーテン、人形の衣服、お手玉、手提袋といった用途もみられる。

【地域】製作地や入手場所、使用場所は、この一家が横須賀に住んでおり、横須賀の百貨店「さいかや」等で頻繁に反物等を購入しているのが横須賀、たまには銀座・日本橋等へも買い物に出かけ、また小林は日本女子大学校在学時は目白の寮に住み近辺の衣料品店や洋裁店を利用しているので東京、そのほか、両親や祖母の出身地である高崎、祖母や母が一時滞在していた松本<sup>10)</sup>などである。

【年代】着用者の項で述べたように、「祖母の祖母」といった人物の所用品まで含まれるとすると、標本の生地や衣服の製作年は、おそらく19世紀半ばから、この標本が製作された1940年まで、ということになる。

なお、衣服標本とともに保管されてきた「被服しらべ」は、小林孝子、母、祖母、父の衣服（礼装や外出着から普段着、下着にいたるまで）のリストを41ページにわたってペン書きし、和綴じにした冊子である。

### （3）本共同研究活動報告

#### 1) 2019-2020年度

本研究では、年に数回、メンバーで研究会を持つほか、2019年度には、小林孝子卒業論文の調査に当たられた群馬大学名誉教授林知子先生をお招きして「小林孝子の論文とその時代背景」と題する公開講演会、2020年度には、学校制服史研究の第一人者であるお茶の水女子大学准教授難波知子先生をお招きして「母・娘の女学生時代と通学服—学校の視点からみる小林孝子の『衣服標本』—」と題する公開講演会を開催した。難波知子先生は講演をもとに「小林孝子の衣服標本に見る近代日本の女性の衣生活（一）—母郁の女学生時代と通学服—」と題する論文を発表されている<sup>11)</sup>。

共同研究者による学外での成果発表としては、Asian Conference of Design History and Theory 2021 Osaka（アジアデザイン史デザイン理論会議2021大阪大会、2021年8月29-30日オンライン開催）において、森理恵が“Designing and recording the clothing life: Kimono and dress fabrics in 1930's Yokosuka and Tokyo”と題し本資料の概要と意義を報告した<sup>12)</sup>。また、第29回国際服飾学術会議（2022年8月24-25日、昭和女子大学、会場参加とオンライン参加併用）において、箕輪恵枝・森理恵が“Colors in Women's Fashion in 1880s-1910s Japan: As seen in the Kobayashi Takako Collection at Japan Women's University”と題するポスター発表をおこない、小林孝子の母、郁の着用した着物の色と流行色の関係を明らかにした。

## 2) 2021年度①資料番号の決定

2021年度には、衣服標本を整理して番号を振り直し、資料番号の決定をおこなうとともに、本共同研究の最終成果として『小林孝子衣服標本資料集』を刊行した。

小林孝子衣服標本にはこれまで、仮の整理番号が振られていたが、次の方針に従って番号を振り直した。小林の書込みにもとづき、まず、端切れが使われていた衣服等の用途・使用者ごとに次の8つに分類。使用者が複数にわたっている場合は最初の使用者を基準とした。次に、それぞれの分類の中で、おおむね入手年代の古い順に番号を振って配列した。

使用者による分類

- 1 小林孝子の和服類
- 2 小林孝子の洋服類
- 3 小林孝子の母郁の衣服
- 4 小林孝子の祖母井田ロクの衣服
- 5 小林孝子の父信秋の衣服
- 6 小林家の女中の衣服
- 7 その他の着用者の衣服
- 8 寝具等衣服以外

その結果、たとえば、小林孝子の和服に使われた生地の中で一番古いと考えられる「孝子の一ツ身」の標本を資料番号1-1とした。また、資料番号7-1は「明治二十八年五月二十五日に七十二才で亡くなった祖母の祖母の着物」だったという絹の小紋である。明治28年は1895年。資料番号8-1は「明治二十三年頃ツマリ母が四、五才頃ドテラであった」木綿の緋。「ドテラ」は寝具とみなし8に分類した。

## 3) 2021年度②『小林孝子衣服標本資料集』の刊行

『小林孝子衣服標本資料集』には、「小林孝子衣服標本」の全点の写真と、生地の大写真、平織以外の生地の組織図を掲載し、標本に書き込まれた文字を活字に直したのも掲載した。併せて小林孝子の卒業論文のうち衣服の収納にかかわる部分と「被服しらべ」の文字起こしも掲載した。また、共同研究員による研究成果を掲載するとともに、標本のうち特に注目されるものについては解説を付した。目次は次のとおりである。

『小林孝子衣服標本資料集』目次

緒言

森 理恵

第一部 資料写真

小林孝子衣服標本

小林孝子卒業論文『考現学より見たる一家庭』（抜粋）

小林孝子「被服しらべ」

小林孝子衣服標本解説

第二部 研究論文

小林孝子の時代の日本女子大学校 1932-1936

岸本美香子

小林孝子衣服標本の貼付試料の組織と組成について

松梨久仁子、安藤 健、奥脇菜那子

『主婦之友浴衣』にみる1920-30年代の大衆の浴衣

沢尾 絵

衣服の色彩に対する意識と流行色 —明治期の郁の裂を対象として—

箕輪 恵枝

1930年代の日本女子大生の洋服 —孝子の洋服所持の実態と装いの具体像—

田邊しずか

1930年代の婦人服における日米比較

—小林孝子衣服標本とシアーズ・ローバック通信販売カタログの検討から—

内村 理奈

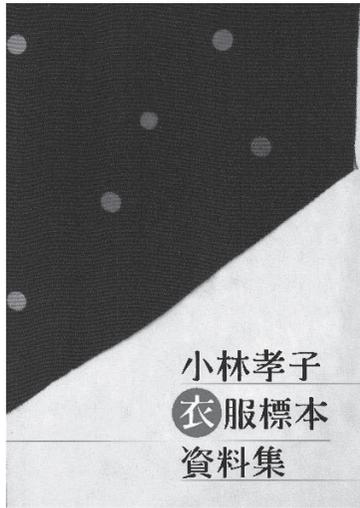


図1 『小林孝子衣服標本資料集』表紙

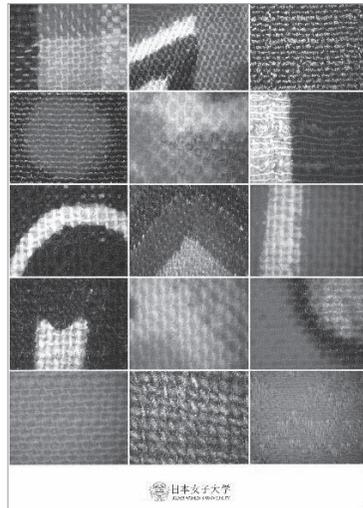


図2 『小林孝子衣服標本資料集』裏表紙

4) 2021年度③公開シンポジウム開催

さらに、本共同研究の成果報告として、2022年3月19日には西洋服飾史研究者のフェリス女学院大学教授朝倉三枝先生の講演とメンバーの研究発表を併せ、『『小林孝子衣服標本』資料集完成記念ファッションと衣生活の近代—1920~1930年代のパリと横須賀—』と題する公開研究会を開催し、会場参加とオンライン参加とをあわせて約40名の参加を得た。



図3 シンポジウムチラシ表面

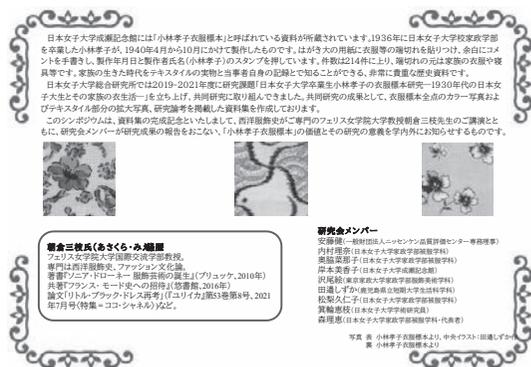


図4 シンポジウムチラシ裏面

## 2. 小林孝子衣服標本の重要性

### (1) 時代的特質

#### 1) 手織と繰り直し

衣服標本のなかには「曾祖母の手織」の生地がいくつみられる。

たとえば、資料番号4-4は祖母の袷であったという絹の縞織、4-6は祖母の斜子織の帯地であるが、いずれも祖母の母である「曾祖母」の手織とされている。資料番号3-4の生地は「曾祖母手織の紬、藤紫の矢がすり」とあるが、1896年、当時女子高等師範学校附属小学校5年だった小林の母（つまり小林の「曾祖母」の孫）が、昭憲皇太后が来校する時に紬以上のものを着てはいけないと言われて着たものだという。その2年後、小林の曾祖母は附属高女に入学した孫に袴の生地を織ってやっている<sup>13)</sup>。

衣服の繰り回しの記事が多いことにも気づかされる。たとえば、資料番号4-1は「祖母が細い紐に紘けたのが残っていた」という絹の格子縞だが、これは祖母が結婚後初めてのお盆に実家の墓参りに行く時に晴れ着を着た際の襦袢の生地だったという。高崎地方ではこうした風習を「イキミタマ」と呼んだと小林は書き留めているが、そのような生地を細い紐にして大切にしていた点に注目される。

また、資料番号3-27は、1909年に母が「松本市六区の井上呉服店」で求めた絹の経縞だが、夏の初めと終わりに25年ほど着た後、こたつの下掛け、小窓の遮光カーテンになり、それでも余った端切れは6mm×9mmの大きさに刻んで布壁の修繕材料にしたという。当初はなかなか水が染みないほど地厚だったそうだが、現在は擦り切れて穴が開いており、その活躍ぶりが偲ばれる。

資料番号7-6は白と鼠茶の細かい格子の毛織物で先述の日清戦争（1894-95）に出征した外祖父の「凱旋」にそなえて「日本橋白木屋で作っておいたもの」だというが、約10年後に裏返して祖母の着物となり、さらにその20年後には湯たんぽの包みになった。少なくとも45年間、家族の日常とともに過ごしたことになる。

この他にも、家族の間で繰り直し、それがまた寝具やカーテンになったりという記事が散見される。そこには、自分や近親者の衣服を家内で製作することを基本としていた、20世紀初めごろまでの中流の人々の衣生活が綴られている。

#### 2) 消費主義の隆盛

しかし一方で、近代日本にとって、小林孝子がこの衣服標本を製作した1940年は、1930年代の消費主義がピークに達した年でもあった。周知のとおり、1940年は1937年に始められた日中戦争のさなかであり、「紀元二千六百年祝典」が開催された年でもあった。メインの祝典そのものは11月に開催されたが、年間を通じて関連する行事や展覧会、書籍の発行等がおこなわれ、「聖地」を巡る観光業は隆盛し、「紀元二千六百年」と結び付けた販売戦略により百貨店は売上を大いに伸ばした。ケネス・ルオフは次のように述べる<sup>14)</sup>。

（前略）三〇年代の愛国主義的風潮によって、消費主義は多くの面で強化され、三七年七月に中国大陆で全面戦争が勃発してからも、重要な消費部門はほとんど悪影響を受けなかった。観光や出版、小売業（たとえば百貨店）の景気ももっとも良くなったのは、紀元二千六百年の年である。

またアンドルー・ゴードンは、日中戦争の戦争景気に刺激された、最新流行を掲載した雑誌の広まり、洋裁学校の隆盛や洋裁店の増加、家庭裁縫または誂えの婦人洋装の普及を挙げて、日本の1930年代を「戦争動員と近代の深まりが同時に起こった時期」としている<sup>15)</sup>。

1920～30年代、小林とその家族は、横須賀の「さいかや」をはじめとして東京の白木屋、松屋、三越、高島屋、横浜の野澤屋など多くの呉服店百貨店で反物を買ったり衣服を仕立てたりしている。「いさみや」、「草刈」、横浜「大津」など洋裁店の名前も散見される。小林孝子の衣服標本、卒業論文に記された筆筒の中身、そして「被服しらべ」を併せてみると、その質と量の幅広さに圧倒される。

一例として洋服関連の記述に着目すると、日本女子大学校を卒業した1936年に小林は「銀座いさみや」で、春にスワガーコートとスカート、夏にワンピース、秋にまたスワガーコートを作っている。さらに翌年の1937年にも同じく「銀座いさみや」で春にワンピース、夏にサスペンダースカートとブラウスとワンピース、冬には「横浜の大津」で防寒用のコートを作った。1939年の夏から秋には「横浜大津」でワンピース、スプリングコート、長袖ブラウスを作った。どの洋服にも、色柄ともに華やかで上質な生地が使われている。

小林孝子衣服標本のテキスタイルの種類と質の豊富さは、1930年代の関東の中流家庭の衣生活における、消費主義の隆盛を立証するものでもある。

### 3) 戦時下の衣生活

日中戦争に加え、小林が標本製作を終えた1年2か月後には太平洋戦争が開始される。戦争の影響を窺えるものとして標本のなかには、木綿の供給が途絶えるのではないかという不安、「スフ」の質の悪さを嘆くコメントや、灯火管制に用いたという古布も含まれているが、戦争のために衣生活が制限を受けたとか、生活が苦しくなった、というような記述は見られない。ただし、先述のように、もしかするとこの標本製作が中断したままになってしまったとすると、それは戦争と何か関係するのかもしれないが、今となっては確かめる術がない。

太平洋戦争の開始後に、古い習慣を受け継ぎながらも消費主義を謳歌していた、この家族の衣生活にどのような変化が見られたのか見られなかったのか。興味深い点であるが、この標本からは窺い知ることができないのが残念である。

#### (2) 近代日本の服飾・生活用品コレクションと小林孝子衣服標本の位置づけ

近代日本の服飾コレクションとして、庶民の衣生活に着目する観点から収集された「丹波生活衣」(京都府福知山市丹波生活衣館)、武庫川女子大学近代衣生活資料(武庫川女子大学総合ミュージアム)、教育史的観点から収集された東京家政大学裁縫雛形コレクション(東京家政大学博物館)、美的観点から収集された「池田重子コレクション」、「岡信孝コレクション」(須佐クラシック博物館)などを挙げるができる。また、収集ではなく旧家の収蔵品のコレクションとしては、旧三井家収蔵品(文化学園服飾博物館)や、田中本家博物館収蔵品(長野県須坂市)を挙げるができるだろうか。このほかにも多くの博物館に、近代日本の服飾品・染織品が収蔵されていると思われる。

また、これらに対し、衣類に限らない生活用品のコレクションとして、「昭和のくらし博物館」(東京都大田区)、大村しげコレクション(国立民族学博物館)などがあり、コレクションではないが、生活用品の大規模な調査としては1970～90年代にかけておこなわれた、CDIによる生活財生態学調査を挙げるができるだろう。

そのような中であって、小林孝子衣服標本はどのように位置づけられるだろうか。まず、衣服の形態が失われ、端切れであるという点では資料的価値は低いと言えよう。また、着用対象者がほぼ一家族に限られているという点でも限界がある。しかしながら、端切れに製作者・着用者本人やそれに近い人物による詳細な文字資料を伴っており、それが200点以上の規模に上り、また、製作者・着用者の個人的経歴がかなり詳しく判明しているという点では、資料的価値は極めて高いと言えるのではないだろうか。

同様のことは、小林孝子を指導したとされる今和次郎の研究と、小林孝子の卒業論文の比較にも言える。小林の卒業研究は、規模の大きさや方法の洗練といった点では今の調査に遠く及ばないが、一家族の心情面までも含めた詳しい記録という点では、今の研究とは異なる独自の価値がある。小林孝子衣服標本も、実際のテキスタイルを伴った、ある家族の衣服の克明な記録という点では他に例を見ない。今後、テキスタイルと文字情報をさらに詳細につき合わせていくことにより、新たな研究が生まれていくことを期待したい。

※本稿は『小林孝子衣服標本資料集』（2022年2月）の「緒言」の文章を大幅に加筆修正したものである。

#### 注

- 1) 林知子「今和次郎に師事した 昭和初期の住まいと暮らしの考現学 八〇年の時を経て日本女子大学に戻った小林孝子の卒業論文」『成瀬記念館』31号、2016年7月。なお同論文には、小林の卒業論文の重要性だけでなく、小林がこの卒業論文を書くに至った経緯や、その後の小林と今和次郎との関わり、小林が太平洋戦争中にこの卒業論文を大学校から借り出し、疎開先として今に託したため「今和次郎コレクション」に含まれて伝来したこと、またそれが「80年の時を経て」日本女子大学成瀬記念館に戻った経緯などが詳しく述べられている。
- 2) 小林孝子著、今和次郎コレクション編集委員会編『考現学より見たる一家庭 日本女子大学家政学科卒業論文』今和次郎コレクション編集委員会、2006年4月。なお小林孝子卒業論文の現物によると、論題は「考現学より見たる一家庭」であり、表紙には「卒業論文」とあるのみである。「日本女子大学家政学科」は今和次郎コレクション編集委員会によって加えられたものと考えられる（小林が在籍したのは日本女子大学校家政学部）。同書は日本女子大学図書館で閲覧することができる。
- 3) この名称は、本共同研究において便宜的に用いているものである。製作者である小林孝子本人はこの資料に名称をつけていない。
- 4) 詳しくは本書所収の論文、岸本美香子「Ⅱ 日本女子大学成瀬記念館所蔵の小林孝子関係資料からみる小林孝子と日本女子大学」参照。
- 5) おおよそ名刺を縦二つ割りにした大きさの厚紙にペン書きで「大島紬袴」「黒緞五ツ紋羽織」等と書かれたもので16枚がアルミニウム製の洗濯挟み？でとめられている。内容と数量からすると、製作途中であるか、または多くが失われたものと考えられる。
- 6) 森理恵「小林孝子の衣服標本——八七〇年代～一九三〇年代の中流家庭の衣生活——」『成瀬記念館』33号、2018年7月。
- 7) 小林孝子「後記片々」『卒業論文』、1938年4月。
- 8) 同前。
- 9) 以下に述べる小林の家族の詳細は、卒業論文に含まれる記述による。
- 10) 林知子先生からのご教示によると、母は東京女子高等師範学校卒業後、信州の高等女学校に赴任していたという（小林孝子本人からの聞き取り）。
- 11) 難波知子「小林孝子の衣服標本に見る近代日本の女性の衣生活（一）—母郁の女学生時代と通学服—」

『成瀬記念館』36号、2021年7月。

12) この発表内容は加筆修正の後、査読付論文として次に掲載された。

Rie Mori, "Recording the Clothing Life: Kimono and Dress Fabrics in 1930's Yokosuka and Tokyo,"  
*The Journal of the Asian Conference of Design History and Theory*, no. 4, 2022, pp. 74-79.

13) 難波、前掲論文、46-48頁参照。

14) ケネス・ルオフ 『紀元二千六百年 消費と観光のナショナリズム』朝日新聞出版、2010年、52頁。

15) アンドルー・ゴードン、大島かおり訳 『ミシンと日本の近代 消費者の創出』みすず書房、2013年、186-187頁。

## II 日本女子大学成瀬記念館所蔵の小林孝子関係資料からみる 小林孝子と日本女子大学

岸本 美香子  
KISHIMOTO Mikako

### はじめに

2015年5月21日、日本女子大学校家政学部第二類第33回卒業生、小林孝子の卒業論文が、工学院大学図書館から日本女子大学に返還された。この寄贈の仲介の労を執ったのは、日本女子大学家政学部生活芸術科（住居専攻）新制第5回卒業生で元日本女子大学家政学部住居学科専任講師、群馬大学名誉教授の林知子である。林は工学院大学の今和次郎コレクション委員会のメンバーだったが、今和次郎資料の調査にあたる中で今和次郎資料の中に紛れ込んでいた小林孝子の卒業論文を発見した。小林の卒業論文が今和次郎資料とともに工学院大学図書館に移管されたいきさつについては、林自身が生前の小林にインタビューして確認している<sup>1)</sup>。2015年3月、今和次郎コレクション委員会が解散するにあたり、林は小林孝子の卒業論文の日本女子大学への返還に奔走した。結果として小林論文は、一旦今和次郎資料の寄贈者である今の遺族に返還され、あらためて日本女子大学成瀬記念館に寄贈されることになった。

「考現学より見たる一家庭」と題された卒業論文は、日本女子大学校で「形態美学（形態美論）」を講じていた今和次郎の指導を受けたもので、小林の家にあるものを考現学的手法によりすべて描き出したものである。タイプライター用の薄い紙に舶来の丸ペン、黒インクで一枚一枚丹念に描いている。全部で159枚の調査用紙はラシャ紙に貼られ、最終的に折本に仕立てられた。

本研究課題の対象である「小林孝子衣服標本」は、この時、卒業論文と共に成瀬記念館に寄贈されたもので、寄贈直後に家政学部被服学科教授森理恵が簡単な調査を行い、2018年5月8日～6月23日に成瀬記念館で初公開、併せて資料紹介を行った<sup>2)</sup>。

本章では「小林孝子衣服標本」を含む成瀬記念館収蔵の小林孝子関係資料の概要を示し、それらから見えてくる小林孝子と彼女が在籍した時代の日本女子大学校／日本女子大学について概観する。

### 1. 小林孝子とその家族について

小林孝子（1916.4.1-2010.5.15、以下「孝子」）は海軍軍人小林信秋と女学校教諭郁夫妻の二女として生まれた（長女は夭折）。信秋は1880（明治13）年群馬県生まれ、孝子が誕生したころは横須賀を拠点としており、小林家は横須賀に居を構えていた。信秋は大佐を最後に予備役となり、孝子が日本女子大学校に入学した1932（昭和7）年当時は東京電燈株式会社（現東京電力の前身）横浜支店に勤務していた。90歳で亡くなったという<sup>3)</sup>。

郁は1886（明治19）年生まれ。郁の家は「群馬県の倉賀野の大きな大きな回船問屋で倒産した今でも土地の人は知って」いるという<sup>4)</sup>。女子高等師範学校（現お茶の水女子大学）附属小学校、同附属高等女学校を経て1907年に女子高



図1 信秋



図2 郁

等師範学校を卒業した。女高師の卒業生には教職に就く義務が課せられており、郁は松本高等女学校に赴任<sup>5)</sup>、信秋と結婚し横須賀に移住、1912年3月31日に横須賀高等女学校に着任した<sup>6)</sup>。

女子高等師範学校附属高等女学校では、平塚明(らいてう、日本女子大学校家政学部第3回卒業生)と同級で親友だった。形式主義で封建的な学校の空気やお洒落に走る上流階級の同級生に反抗心・対抗心を募らせていた明と郁ら3、4人がグループを作り、「海賊組」と称して海賊気分で身なりに構わず、氣勢を上げていた<sup>7)</sup>。郁は他家に養女に出されていたが、あるとき養家と実家のトラブルに嫌気がさし、学校を放り出して何か月か田舎に行っていたことがあった。その間、明は郁の授業料を支払い、裁縫の宿題を提出して繋いでいたという<sup>8)</sup>。「衣服標本」4-7には以下の書き込みがある。「母がお茶の水高女三年の時の半巾帯の裁縫材料で当時四十五才位だった祖母の帯ださうである お点は七点で平塚さん(らいてう)は桃色縺子で縫って九点で大変みごとな出来で谷田部順子先生が級全体へ廻してお見せになつたさうである」。



図3 海賊組(前列中央:郁、その後ろ:らいてう)  
新評論社『わたくしの歩いた道』より転載



図4 衣服標本4-7

らいてうによれば、郁は「学科の方は左程でもなかつたが絵はお得意で、女流画家を志してゐたやうだつたが四年か五年の時、突然家庭に不幸な出来事が起つて、境遇が一変し、気の毒なお母さんを背負つて起つ決心をするとともに、画家を断念し、女高師を選んだのであつた」<sup>9)</sup>。「不幸な出来事」とは先の孝子の書簡にあった回船問屋の倒産を指すと思われる。この時から郁は養母を背負い1937年12月26日に養母が亡くなるまで、「お母さんとは離れたことがなかつた」<sup>10)</sup>。

養母の介護を理由に26年間務めた教職を離れた郁は、1964年5月30日、風呂の火が着物に燃え移り、半身に大火傷を負い亡くなったという<sup>11)</sup>。

その養母ロクは1856（安政3）年12月22日生まれ。婚家の隣が日本女子大学校教授松本亦太郎の養家だったことから、松本のことを「亦さん、亦さん」と呼んでいた<sup>12)</sup>。「衣服標本」では祖母のものとするものが20点ある。

孝子は前述のとおり1916（大正5）年4月1日生まれ、横須賀市立豊島尋常高等小学校、神奈川県立横須賀高等女学校を経て1932（昭和7）年、日本女子大学校家政学部第二類に入学、1936年3月に卒業した。在学中は明桂寮に居住した。この明桂寮は1927年に現在の場所に新築された洋風寮で、従来の明桂寮に対し、当初「新明桂寮」と呼ばれていたが、孝子が入学した1932年から「明桂寮」となった。この当時、寮舎は現在の寮地区に22棟が存在、そのほとんどが小規模な2階建ての和風建築だったのに対し、明桂寮は関東大震災後に新築された鉄筋コンクリート造の洋風寮であった。設計は大隈講堂や日比谷公会堂で知られる早稲田大学教授の佐藤功一で、日本女子大学校でも兼任教授として「建築装飾」や「住居研究」を講じていた。傾斜地を利用した3階建てで、南に面した半地下の洗濯場には光が差し込むようになっている。寮監は国文学部第1回卒業生の藤原千代で、副寮監に井上ヨシコがいた。



図5 ロク



図6 明桂寮



図7 明桂寮の洗濯場



図8 明桂寮の居室

1936年3月に日本女子大学校を卒業後、孝子は横須賀の自宅に戻り、後述するように一旦仮提出した卒業論文を大学から借り出して完成させたほか、考現学の手法による調査をいくつか行っている。1941年10月に理化学研究所勤務の釜澤正夫と結婚、杉並に居を構えたが<sup>13)</sup>、夫とはほどなく死別し、再び横須賀に戻っている。戦火が激しくなり、目白の大学や軍港のある横須賀の家は危ないと考えた孝子は、大学から再び卒業論文を借り出し、東京郊外の保谷にあった今和次郎の家に疎開させてもらうことにした<sup>14)</sup>。

1946（昭和21）年5月、孝子は女子大に戻った。この春学科編成改正により新設された「生活芸術科」西組リーダー<sup>15)</sup>野見山不二の助手となり、併せて新泉寮寮監となった<sup>16)</sup>。その後孝子は通信教育部編集課に移り、1949年3月末で退職した。この年に再婚、二児を儲けたが1971年頃離婚している。この間、『桜楓新報』に「江原孝子」の名前でたびたび寄稿している。

「衣服標本」は、孝子が日本女子大学校卒業から4年後の1940（昭和15）年4月から10月に行われた調査であるが、卒業論文執筆中の1935年12月31日付の調査用紙に記載されている家族は、両親と孝子のほか1856（安政3）年生まれの郁の母（養母）ロクの4名である。このほか1935年10月1日付の「国勢調査申告書」には1913（大正2）年生まれの柳澤イネ（女）の記載がある。小林家の「女中」と思われる。

## 2. 成瀬記念館が収蔵する小林孝子資料—収集の経緯と内容

次に、成瀬記念館が収蔵する小林孝子関係資料について、その収集の経緯と内容をみていきたい。小林孝子関係資料は、主に（１）小林孝子自身により寄贈されたもの、（２）今和次郎の遺族より寄贈されたもの、（３）林知子より寄贈されたもの、（４）成瀬記念館収蔵の刊行物に分類される。

（１）小林孝子自身により寄贈されたものは、「母からきいたらいてうさんの話」（『桜楓新報』第46号（1955年5月1日発行）掲載）の原稿の写し、平塚らいてう宛小林信秋書簡（第三者による下書き）、江原（小林）孝子宛書簡などであるが、これらに同封された成瀬記念館宛の孝子の書簡には、らいてうはじめ本学関係者や日本女子大学に関する出来事がつづられ、それ自体が貴重な資料となっている。寄贈時期は1998年3月から1999年2月の約一年である。1991年、日本女子大学の卒業生により平塚らいてう研究会が発足、その翌年、塩原事件をきっかけに桜楓会から除名されていたらいてうの復権が実現した。1990年代はらいてうへの関心が高まり、らいてう研究が活発化した時期でもある。生き証人としての孝子の証言が望まれていたといえよう。

（２）今和次郎遺族より寄贈されたものは、本研究課題の対象である「衣服標本」をはじめ、次のとおりである。これらを孝子自身によって押されたスタンプの日付順にみると、①卒業論文折本（1935年7月16日から1936年1月8日および1937年2月8日から1938年4月13日）、②大福帳（1935年12月27日）、③卒業論文「考現学より見たる一家庭」（1936年1月8日）、④卒業論文専用箱（1936年1月）、⑤図書目録（1937年2月8日）、⑥折本排列おぼえがき（1938年4月13日）、⑦後記片々（1938年4月28日）、⑧被服しらべ（1938年4月28日）、⑨衣服標本（1940年4月19日から1940年10月25日）である。

①卒業論文折本は冒頭に述べたとおり、小林孝子の卒業研究の本体にあたる。縦約23cm、横約14.5cmのタイプライター用紙に黒インクで描かれ、画用紙に貼付したものをさらにラシャ紙に貼り、4葉一組の折本となっている。ボール紙に布を貼った表紙をつけ、全体の大きさは縦約32.5cm、横約23.5cm、厚さ約10cmである。

今和次郎の「形態美学（形態美論）」を2年間受講している孝子は、今から卒業論文の指導を受けたいという希望を持っていた。今について、孝子はすでに日本女子大学校入学前に横須賀高等女学校の国語教諭「武宮りえ子先生」から「女子大には今和次郎先生がいらっしゃって、今先生は考古学に対して考現学と云うのをはじめた方」という話を聞いている<sup>17)</sup>。4年生になると孝子は明桂寮の副寮監だった井上ヨシコに相談する。井上ヨシコの妹は今和次郎夫人のトシコである。井上は今に口添えしたようだが、論題はなかなか決まらなかった。やがてリーダーから論題の提出を求められ、夏休みも近づいたある日、今はようやく孝子に対し「あなたの家にあるものをすっかり描きあげてはどうか」と言った。「虚栄心をすてて」とも。孝子は「私の家、トタンにせまい家、荷物膨大な私の家を思った」。その日、寮に帰って井上に報告すると「あなたなら大丈夫できる」と孝子を励まし、「先づあなたのお家の火鉢の事をずっと考へてごらんさいな」と続け、「之にものをしらべる態度が出てます。参考にするやうに」と吉田謙吉の『舞台装置者の手帖』を手渡した。後日、調査の具体的な進め方について今の助言を受け、孝子は夏休みから調査にとりかかった<sup>18)</sup>。

この調査は1935年7月16日から翌年1月8日にわたり、主に夏休みと冬休みに行われた。未完成だったが3月に一旦提出、33回生の研究発表展覧会が開催され、孝子の論文も展示された。『家庭週報』には、3年生による感想が掲載されている。『「考現学より見た一家庭」よくまあこんなに克

明に調べ上げたものと見る人何れも驚異の声を洩らしてゐた。自分の家のあらゆるものを系統立て、写生し尚それに一つ一つ来歴を明かにした説明を附してある。恐く後世の人々にとって好個の考古学研究材料となる事であらう<sup>19)</sup>。卒業後に学校から借り出して1937年2月8日から翌年4月13日にかけて追加の調査を行い、折本に仕上げた上で改めて提出した<sup>20)</sup>。

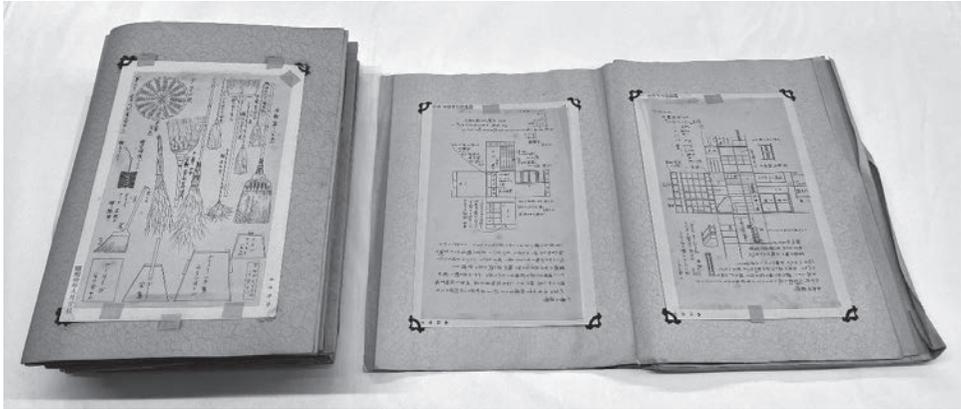


図9 卒業論文折本

②「大福帳」は、卒業論文折本と同じ大きさのタイプライター用紙に自分で罫線を引き、和綴じにしたものをさらに一回り大きな青色の厚紙に貼ったものである。この年の夏休み、すなわち7月13日から9月7日に至る日々の支出がすべて「ありのままに」記載されている。この期間の支払いで最も高額なのは「戸数割」（地方税）の38円47銭、次いで「電話料」20円、「保険料」14円と続く。「女中給料」は10円、「白米30キロ」7円5銭、注目すべきところでは「森永牛乳店払」が11円16銭と高額になっている<sup>21)</sup>。毎日のように食べていると学友にからかわれた「うどんかけ」は1杯7銭である<sup>22)</sup>。

③卒業論文「考現学より見たる一家庭」（1936年1月8日）は①の折本と共に提出されたもので、原稿用紙5枚（うち1枚はタイトル）に表紙を付けたものである。末尾には今和次郎により以下の評価が書きこまれている：「自分の住んでいる環境の物件をこれだけよくかき上げられたのは驚異です。型破りの論文ですが、こゝから物に対する評価力が湧き出るのでと思ひます。更につき進めたならばファブルの生物研究のやうな果実が期待出来さうです。今」

④卒業論文専用箱は書き溜めた調査用紙を収納するため、「横須賀で一番厚いと云ふボール紙を紙屋で買ひ、思い切り深く寸法をとって、両手を入れてゆっくり出せるボール箱を、不本意ながら紙屋にたのんでこしらえさせた」が、孝子はあまり気に入らなかった。そこに年賀用の郵便切手が発売された。孝子は「何ていゝ色だらうと思って<sup>23)</sup>」それをボール紙に隙間なく貼り込んだ。この切手は日本で最初の年賀切手で、元禄模様の輪郭に渡辺崋山の「富嶽図」と菊のご紋章が

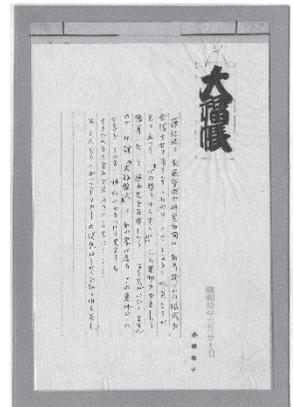


図10 大福帳

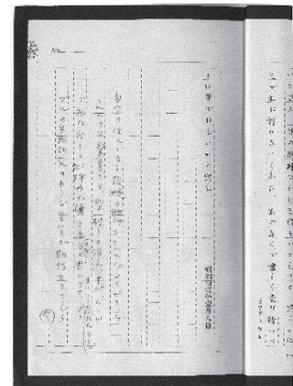


図11 今和次郎による批評

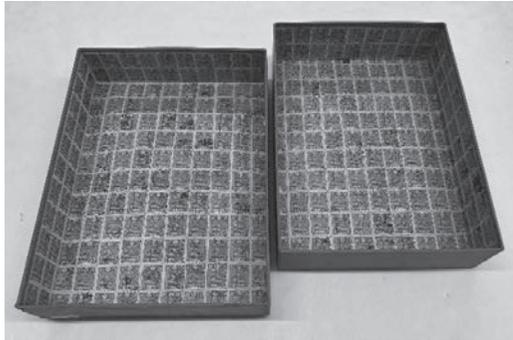


図12 卒業論文専用箱

描かれた紅色の切手である<sup>24)</sup>。

⑤「図書目録」は「大福帳」と同じ体裁で、卒業論文を提出後、大学から借り出して再び調査を開始した1937年2月8日の日付が付いている。約1年の空白期間を埋める手始めに取り掛かったものと考えられる。

⑥「折本排列おぼえがき」は、卒業論文の追加調査を終えた1938年4月13日の日付となっている。孝子は「しらべがたまるのは嬉しい。一枚出来るとどの辺に排列しようかと考へたりして、またはじめから読みなほしたり<sup>25)</sup>」するほ

ど排列にはこだわりを持っていた。いよいよ完成した卒業論文を折本にするにあたり、この「おぼえがき」を作成した。

⑦「後記片々」は「折本排列おぼえがき」からおおよそ2週間後の1938年4月28日の日付となっている。原稿用紙で17枚にわたり、論題が決まるまでのいきさつや完成までの道のり、その間の家庭内の様子などが詳細に綴られている。足掛け4年を費やして完成した小林孝子の卒業論文が再提出された日付は不明だが、「後記片々」が書かれた前後であるのは間違いないようだ。

⑧「被服しらべ」は「後記片々」と同じ、1938年4月28日の日付で「大福帳」、「図書目録」と同じ体裁をとっている。祖母、父、母、孝子の家族4人の被服が、肌着類まで詳細に記載されている。「図書目録」同様、「卒業論文」では詳しく触れられなかった部分である。なお、「被服しらべ」については、『小林孝子衣服標本資料集』（日本女子大学総合研究所小林孝子衣服標本研究會、2022年2月28日発行）に翻刻掲載しているが、欠落箇所があるため、以下に翻刻する。

### 孝子羽織

錦紗御所解蛤貝模様絵羽羽織

裏 皇太子殿下御誕生の各新聞号外刷込羽二重

紋錦紗（地紋葉玉）オレンジ色桜紅葉葉玉模様総匹田紋

紋錦紗（地紋七宝つなぎ）萌黄オレンジ刷毛縞に未来派風浅黄とピンクのぼら模様

紋錦紗（地紋宝模様）古代紫地白椿模様

紋錦紗（地紋宝模様）臙脂地四君子の丸

紹錦紗浅黄地御所解模様単衣羽織

みその錦紗黒地御所解模様

銘仙紫地ばら模様総匹田紋

銘仙花紺地椿模様

ミルクコーヒー色地チューリップ模様メリンス

黒地赤青ダンダラ匹田模様メリンス

鳩羽鼠地藤模様メリンス

人絹錦紗縮緬ローズ色地匹田竹模様

瓦斯銘仙紺地臙脂色紙ちらし（孝子裁縫成蹟品）

糸織紺地白茶色緋 元禄袖

メリンス茶勝更紗模様 元禄袖  
黒襦子衿掛 メリンス紅藤ばら模様広袖ネンネコ

⑨は今回の研究課題である「衣服標本」である。

(3) 林知子より寄贈されたものは、①『桜楓新報』、②裂地見本、③カセットテープ2本である。

①は小林孝子から工学院大学の今和次郎コレクション委員会に送られた『桜楓新報』で、いずれも「江原孝子」の名前で寄稿されている。第61号(1956年9月1日)は「私たちの声 上代学長に自動車を」のタイトルで、小田急線で通勤する上代学長の疲労を心配し、大学の近くに転居するか、乗用車を持つべきだと訴えている。また、自分の近況としてNHKの子供番組に投書するようになったことが紹介されている。第68号(1957年4月1日)では、「近すぎる近火」として、横須賀の自宅の隣地に突如として出現したミルクプラント(土地の古くからのボス一家の兄弟が経営している)による油煙、騒音、火の危険の恐怖と実際に起きたボヤ、さらに大火事について、そして署名を集めて警察署長、消防署長、市役所に申し入れをした一件が臨場感あふれる筆致で描かれている。第98号(1959年10月1日)には「私の秘密」として、声楽家戸山国彦に送ったファンレターとその後交流が綴られている。第131号(1962年7月1日)では「家相」のタイトルで横須賀の自宅や近所の狭い敷地一杯に最近建った家、今和次郎の弟子の建築家の家について雑感を記している。第137号(1963年1月1日)は「名付け親」で、「孝子」の名前を決める際、近所に住む郁の高等女学校時代の「海賊組」の仲間一人、「おきせさん<sup>26)</sup>」の生れたばかりの坊ちゃんにくじで決めてもらうことにしたが、くじを届けに行った小林家の「ねえや」が訪ねる家を間違え、見ず知らずの「坊ちゃん」が名付け親となり、以来50年近く交流が続いている、という心温まる笑い話である。第160号(1964年12月1日)の「何十年ぶり」のタイトルは、本文中に出てくる平塚らいてうの言葉、「本当に何十年ぶりで、女子大の新聞をみましたのよ」による。この年の5月、母郁が亡くなり、孝子は弔詞の御礼をかねて成城のらいてうの家を訪問したが、同じ年の2月18日にらいてうの夫奥村博史が亡くなった直後、孝子は『桜楓新報』に「ラピスラズリー」という題で追悼文を書いている。らいてうが何十年ぶりで読んだのは、この記事である。

②の裂地見本は今和次郎が業者から取り寄せたもので、孝子とは関係ない資料である。

③のカセットテープ2本は、工学院大学今和次郎コレクション委員会のメンバーが、横須賀の孝子の自宅で行ったインタビューを録音したもので、インタビューは2001年12月22日と2002年の2回に亘って行われた。1回目は今和次郎とその家族、女子大関係者のことなど、話題は途切れ途切れで多岐にわたっている。2回目は、その当時住んでいた今和次郎設計の家のこと、1938(昭和13)年に家が建ってから現在までの住人のことなどが語られている。

(4)の成瀬記念館収蔵の刊行物は、桜楓会機関紙『家庭週報』と『桜楓新報』である。『家庭週報』は第1回生が卒業した1904(明治37)年6月25日発行の第1号から1951(昭和26)年4月15日発行の1633号まで、一時的な休刊期間を除いて続いている。後継紙となる『桜楓新報』は1951年5月25日に創刊、現在も継続中である。いずれも桜楓会および学園に関する記事、会員の動向や社会問題などを扱っている<sup>27)</sup>。孝子の在学中に発行されていたのは『家庭週報』である。孝子の学年(33回生)の卒業論文の題目が掲載され、孝子の「考現学より見たる一家庭」は家政学部第二類の住居之部に掲載されている(第1303号、1936年3月20日)。また、自治活動が盛んだった33回生の活動

として校章や式服の制定が紹介されている（第1248号、1934年12月1日・第1251号、1935年1月1日）。

卒業後の1938年、孝子は柴谷邦の勧めで家政学研究会の研究発表会で発表することになった。その後、発表の内容を書くように言われ、『家庭週報』に4号に亘って「家政学研究者の身辺調査」を掲載している（第1395号・1396号・1398号・1399号、1938年6月3日・10日・7月1日・8日）。

「母からきいたらいてうさんの話」は、当時の『桜楓新報』発行責任者坂本春枝の依頼により寄稿したもので、坂本はらいてうの近著『わたくしの歩いた道』（新評論社、1955年）を読み、そこに「海賊組」の写真を見出して郁もしくは孝子にらいてうのことを書いてほしいと依頼したのである<sup>28)</sup>。

(3) ①で挙げた『桜楓新報』は、当時の編集長が同じ33回生の石川ムメであったことから、頼まれて寄稿したことが同封の書簡に記されている。このほか、『桜楓新報』では「投書三年の実り」（第80号、1958年4月1日）、「生活芸術とは—生活芸術科東組の皆さんへ—」（第150号、1964年2月1日）、前述の「ラピスラズリー」（第154号、1964年6月1日）が確認できる。

## おわりに

小林孝子が在学していた時期の日本女子大学校については、当研究課題により制作した『小林孝子衣服標本資料集』に「授業」「寮舎生活」「自治活動」の3つの視点から述べた。卒業から10年後、孝子は旧制日本女子大学校から新制日本女子大学に移行する時期に約3年間、寮監および助手・事務職として在籍している。さらに退職後は卒業生としての立場から、距離を保ちつつ、日本女子大学とのつながりを持ち続けてきた。孝子の交友範囲は母の友人である平塚らいてうとその家族以外にも寮監時代の学生や同僚など幅広い。小林孝子関係資料は、日本女子大学とそこにかかわる人々についての、60年余りにわたるいわば正史の隙間を埋める貴重な資料である。

## 注

- 1) 林知子「今和次郎に師事した 昭和初期の住まいと暮らしの考現学 八〇年の時を経て日本女子大学に戻った小林孝子の卒業論文」『成瀬記念館』No.31、2016年7月、18-33頁。
- 2) 森理恵「小林孝子の衣服標本—一八七〇年代—一九三〇年代の中流家庭の衣生活—」『成瀬記念館』No.33、2018年7月、60-67頁。
- 3) 成瀬記念館宛小林孝子書簡、1998年3月9日。
- 4) 成瀬記念館宛小林孝子書簡、1999年3月1日。
- 5) 成瀬記念館宛小林孝子書簡、1993年3月9日。
- 6) 難波知子の調査による。難波知子「小林孝子の『衣服標本』にみる近代日本の女性の衣生活—母・郁の女学生時代と通学服—」『成瀬記念館』No.36、2021年7月、42頁。
- 7) 平塚らいてう『わたくしの歩いた道』（新評論社、1955年）、27-28頁。
- 8) 江原孝子「母からきいたらいてうさんの話」『桜楓新報』第46号、1955年5月1日、4頁。
- 9) 平塚らいてう「正七位お郁さん」『友を語る』（東京日々新聞社、1938年）、237-238頁。
- 10) 前掲書、238頁。
- 11) 平塚らいてう宛小林信秋書簡（第三者による下書き）、6月16日付／江原孝子「何十年ぶり」『桜楓新報』第160号、1964年12月1日、3頁。
- 12) 小林孝子卒業論文『考現学より見たる一家庭』、19頁。
- 13) 『家庭週報』第1539号、1942年1月16日、8頁。
- 14) 前掲、林知子、20頁。

- 15) 「指導者」ともいう。日本女子大学創校初期から設けられた制度で、学生の教育や自治生活の助言者として各級に置かれ、校風の確立と学生の人間形成のうえに重要な役割を果たした。本校教員、寮監のほとんどが兼任し、級ごとに1～2名起用された（『日本女子大学学園事典』）。
- 16) 成瀬記念館宛小林孝子書簡、1999年7月3日。
- 17) 前掲小林孝子書簡、1993年3月9日。
- 18) 小林孝子「後記片々」1938年4月28日。
- 19) 『家庭週報』第1304号、1936年3月27日、6頁。
- 20) 小林孝子の卒業論文『考現学より見たる一家庭』は、『後記片々』と共に工学院大学今和次郎コレクション委員会により2006年4月に復刻されている。また、林知子による解説が前掲『成瀬記念館』No.36に掲載されている。
- 21) 小林家では朝食には欠かさず果物と牛乳を摂っている。前掲林知子、28頁。
- 22) 「ター坊、ずみ分毎日おうどん食べたね」と悪友にからかわれた。前掲『後記片々』。
- 23) 前掲。
- 24) 独立行政法人国立印刷局 お札と切手の博物館ホームページ (<https://www.npb.go.jp/ja/museum/tenji/gallery/nengakitte.html>)、2022年6月26日
- 25) 前掲「後記片々」。
- 26) 上原喜勢。小林登美枝『平塚らいてう一愛と反逆の青春』、大月書店、1977年、68頁。
- 27) 『家庭週報』については以下に詳しい：中寫邦監修『女性ジャーナルの先駆け』（社団法人日本女子大学教育文化振興桜楓会出版部、2006年）／中寫邦『成瀬仁蔵研究』（ドメス出版、2015年）、231-244頁。
- 28) 江原孝子宛坂本春枝書簡、1955年4月18日。

### Ⅲ 小林孝子衣服標本の貼付試料の組成と組織について

松梨 久仁子\*・安藤 健\*\*・奥脇 菜那子\*

MATSUNASHI Kuniko, ANDO Takeshi, OKUWAKI Nanako

\*被服学科、\*\*（一財）ニッセンケン品質評価センター

#### 1. はじめに

『小林孝子衣服標本』は、明治から昭和初期にかけての中流家庭の衣生活を知るとともに、近代日本の服飾史、染織史、生活史等を研究する上で、極めて貴重な資料であると考えられている<sup>1)</sup>。今回の大枠の研究の目的の一つに、標本の現物の劣化を防ぐため、標本を画像化することで、直接この衣服標本にあたらなくても調査研究の遂行を可能にすることがあげられている。また、当時、一般庶民が使用していた生地はどの様なものであったかを被服材科学的見地から把握することで、今後の調査・研究に寄与することができると考えられる。そこで本研究では、標本に貼付された生地を画像化し、さらに生地の組織と生地を構成している繊維を明らかにすることにした。なお、そのデータはすべて『小林孝子衣服標本資料集』に掲載してある。

#### 2. 方法

##### 2-1 標本貼付生地について

本研究において、図1～図3に示す小林孝子が作成したカード（標本）に貼付された生地を試料と称することにする。標本の多くは1枚の試料が貼付されているが、図2や図3のように複数枚の生地が貼付されているものが数点存在した。図2は異なる3点の試料が貼付されている。図3の3枚の標本には計6枚の試料が貼付されているが、これらは同じ布の柄の違う部分を貼ってあるため試料としては1点とカウントした。

##### 2-2 試料の組織について

試料の組織については、デジタルマイクロスコープ（株式会社キーエンス：VHX-900）を用いて20～50倍の倍率で拡大画像を撮影し、その画像データから試料内の糸の交錯状態を観察して組織を確定した。

##### 2-3 各試料の繊維鑑別

標本に貼付された布試料の繊維組成を明らかにするための鑑別実験は非破壊で行う必要がある。そのため、試料の組織調べと同様、デジタルマイクロスコープを用い、300～500倍の倍率で繊維側面形態を観察して繊維組成を特定した。

#### 3. 試料の組織と組成の鑑別結果

##### 3-1 標本中の試料について

2-1の方法で述べたように、標本の枚数と標本に貼付されている試料数は一致しない。各標本に貼付されている試料を確認しながらカウントした結果、衣服標本中には計232点の試料が存在し



図1 衣服標本の例  
(貼付試料1点)



図2 衣服標本の例  
(貼付試料3点)



図3 衣服標本の例 (貼付試料1点)

ていることが明らかとなった。

232点の試料について20~50倍で撮影した生地表面画像から、資料はすべて織物で、編物は1点も存在しないことがわかった。この時代、編物が存在していなかったわけではなく、セーター、カーディガンなどは当然着用していたと考えられる。これらは手編みあるいは家庭用編機で編まれたものが主流で、ほどいて編み直すことが一般的であったことから、切り出して標本に貼ることはしなかったのではないかと推察できる。また、父親はメリヤス肌着を着用していた可能性がある。女物に関しても、長襦袢は貼られているが肌襦袢やシミーズなどの肌着や、ショーツ、靴下等は存在していないことから、下着類は標本作成の対象外だったことが考えられる。

### 3-2 組織と組成について

組織確認用の画像の例を図4 (a) ~ (c) に示す。画像からたて糸とよこ糸がどのように交錯し

ているかを確認した結果、(a)は $\frac{2}{1}$ の斜文織、(b)は8枚3飛たて朱子織、(c)は平織とよこ畝織の組織が組み合わされた吉野織であることがわかる。標本中の試料は前述の通り、すべて織物であったため、調べた各組織について図5に示す一般的な織物組織の分類<sup>2), 3)</sup>に基づいて分類した。ただし、基本組織である三原組織についてはひとくくりにはせず、平織、斜文織、朱子織、それぞれ別の組織としてカウントすることにした。

次に、繊維鑑別用の拡大画像の例を図6(a)～(c)に示す。(a)は繊維に天然のよじれがみられることから綿繊維であることがわかる。(b)は繊維表面にうろこ状のスケールが存在するため羊毛と判断できる。(c)の写真から、1枚の試料の中に2種類の繊維が存在することがわかる。片方は繊維表面にたて方向の条線が見られ、繊維の太さが比較的均一である。もう一方の繊維は光沢があり、繊維の場所によって太さムラがある。これらのことから、この試料はレーヨン100%の糸とレーヨンと絹の混織糸で織られていた布だと鑑別できた。また、この(c)の写真からレーヨン繊維が占める割合が圧倒的に多いことわかる。しかし、本研究で用いている試料は破壊試験をすることはできないため、混用率を測定することは困難であった。

以上のような手法で確認した織組織と組成の鑑別結果について、各点数とその割合をクロス表にして表1に示す。組織については、三原組織の中でも平織が最も多く232点中189点で全体の81.4%を占めていた。次いで斜文織が15点、朱子織は2点であった。三原組織以外では吉野織などの混合

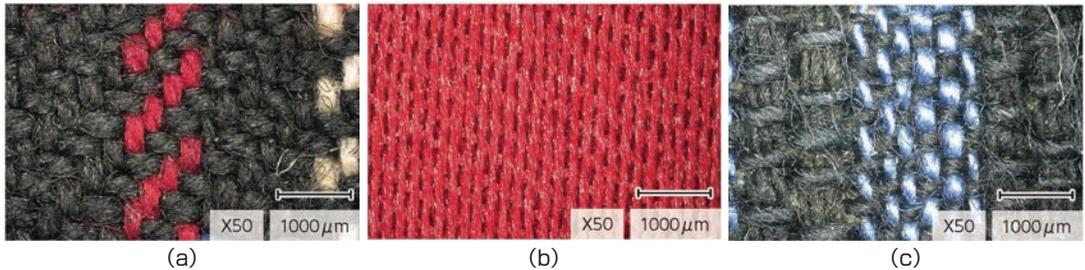


図4 試料の組織確認用画像の例

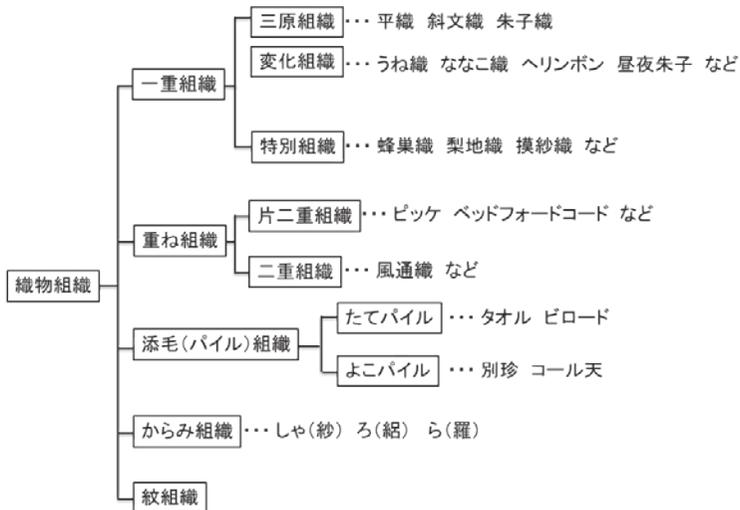


図5 織物の分類

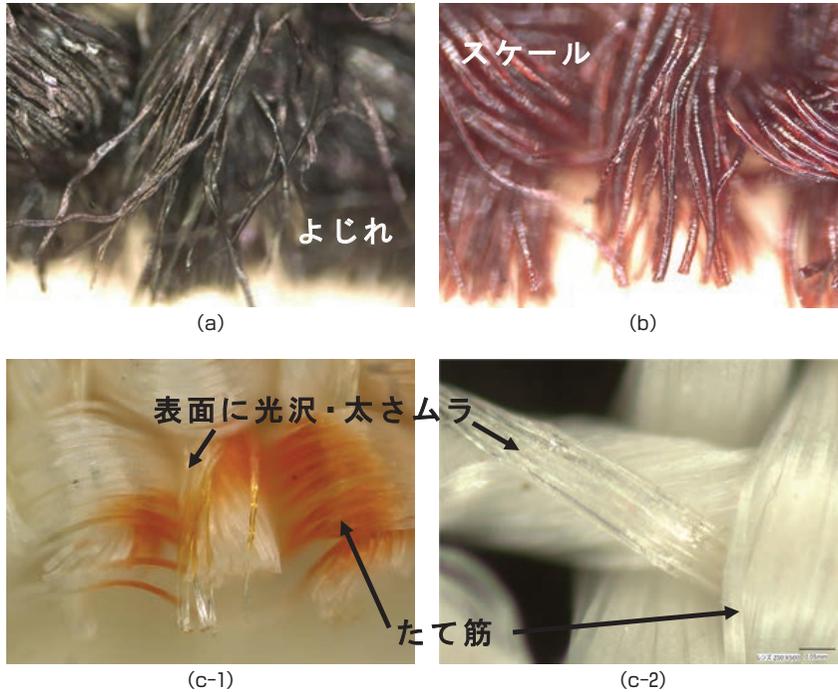


図6 繊維鑑別用画像の例

組織が7点、昼夜組織などの変化組織が5点、紋組織は綸子などの6点、からみ組織は絹などの4点であった。その他には、特別組織はハックアバック織とスポンジ織の2点、重ね組織は風通織とたてピッケの計2点であった。

表1 標本中試料の織物組織と組成

組織	綿		絹		羊毛		綿・絹		綿・毛		絹・毛		レーヨン		天然繊維・レーヨン		合計	
	(点数)	(%)	(点数)	(%)	(点数)	(%)	(点数)	(%)	(点数)	(%)	(点数)	(%)	(点数)	(%)	(点数)	(%)	(点数)	(%)
平織	85	36.6	57	24.6	32	13.8	4	1.7	1	0.4	2	0.9	2	0.9	6	2.6	189	81.5
斜文織	3	1.3	1	0.4	8	3.4	0	0.0	2	0.9	0	0.0	0	0.0	1	0.4	15	6.5
朱子織	0	0.0	2	0.9	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	2	0.9
変化組織	1	0.4	1	0.4	2	0.9	0	0.0	1	0.4	0	0.0	0	0.0	0	0.0	5	2.2
混合組織	2	0.9	4	1.7	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	0.4	0	0.0	7	3.0
特別組織	2	0.9	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	2	0.9
重ね組織	1	0.4	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	0.4	0	0.0	2	0.9
からみ組織	0	0.0	4	1.7	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	4	1.7
紋組織	1	0.4	4	1.7	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	0.4	6	2.6
合計	95	40.9	73	31.5	42	18.1	4	1.7	4	1.7	2	0.9	4	1.7	8	3.4	232	100.0

組成については綿が最も多く95点(40.9%)、次いで絹73点(31.9%)、ウール42点(18.1%)であった。単一素材の布では他にはレーヨンが4点存在した。標本作成時が1940年(昭和15年)であるため、合成繊維は存在しない。異なる繊維が混用されたものは天然繊維同士の混用生地が10点あった。天然繊維同士の混用は、絹や羊毛は高価であるため、綿と混用していたことが考えられるが、単独

の繊維だけでは得られない風合いを求めてのことなのかもしれない。前述のとおり、混用率の測定が困難であったため、天然繊維の混用生地は繊維名で記載した。レーヨン混生地については、もう一方の繊維を天然繊維でまとめて示したが、その内訳は絹が4点、綿が2点、羊毛が1点と、綿と毛の混用生地が1点であった。

標本中の記述に「スフ」と書いてあるものが数点あった。スフとは「ステープル・ファイバー」のことで、繊維長の短い繊維のことを示すが、慣用としてレーヨン短繊維を指すこともあり、第2次世界大戦中から戦後しばらくの間、スフといえばレーヨンステープルファイバーおよびその加工品のことであった<sup>4)</sup>。しかし、本標本中に「スフ」と記載のあった試料は、すべてフィラメント糸であった。

また、標本6-5には「スフはちゃんと混用されている」との記述があったため、念入りに繊維の側面形態と布端部分の拡大写真から断面形態も観察を行ったが、試料中には綿繊維しか見えず、スフ（レーヨン短繊維）の存在は確認できなかった。レーヨンスフが混用されているかについては、FT-IRを用いた鑑別法により非破壊で確認できる可能性がある<sup>5-7)</sup>。

### 3-3 時代による組織と繊維組成の比較

標本にはその衣服を入手した年の情報が記載されているものが200点ほどあった。一番古いものは明治28年（1870年）5月で、一番新しいものは昭和15年（1940年）夏に入手している。時代が下ると織物組織や使用している繊維が変化することが予想される。そこで、この200点の試料を入手時期から明治時代、大正時代、昭和時代に3つに区分し、それぞれの時代における組織と組成のクロス表を作成し、時代による違いを確認することにした。

表1では2種類の繊維が混用された試料は、交織、混紡、混織の区別はせず、綿と絹、綿と毛、絹と毛、天然繊維（綿、絹、羊毛）とレーヨンの組み合わせで分類した。時代ごとの比較においては、混用試料については単純な交織織物は繊維の種類に関係なく「交織」のグループに分類し、異なる繊維素材の糸を使って柄出しをしているものを「混用生地1」、混紡糸あるいは混織糸が使われているものを「混用生地2」に分類した。「混用生地1」の例を図7に、「混用生地2」の例を図8に示す。このような分類に従って作成したクロス表を表2に示す。

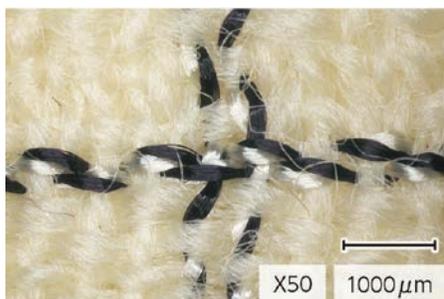


図7 混用生地1の一例



図8 混用生地2の一例

組成については、明治、大正時代は綿、絹、羊毛の100%がほとんどで、明治時代には綿と羊毛の交織織物、大正時代には綿と羊毛の混紡織物が1点ずつあった。明治時代は絹と綿がほぼ同じ数で、大正時代は綿が圧倒的に多くなり57%程度を占めていた。昭和時代になると1928年（昭和3

表2 標本中試料の織物組織と組成の時代ごとの比較

時代 (西暦)	組成 組織	綿100%		絹100%		羊毛100%		レーヨン100%		交織		混用生地1		混用生地2		合計	
		(点数)	(%)	(点数)	(%)	(点数)	(%)	(点数)	(%)	(点数)	(%)	(点数)	(%)	(点数)	(%)	(点数)	(%)
明治期 (1870~1911)	平織	21	32.3	21	32.3	15	23.1	0	0.0	1	1.5	0	0.0	0	0.0	58	89.2
	紋組織	1	1.5	1	1.5	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	2	3.1
	混合組織	1	1.5	1	1.5	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	2	3.1
	斜文織	1	1.5	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	1.5
	変化組織	0	0.0	1	1.5	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	1.5
	特別組織	1	1.5	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	1.5
	合計	25	38.5	24	36.9	15	23.1	0	0.0	1	1.5	0	0.0	0	0.0	65	100.0
大正期 (1912~1926)	平織	31	57.4	10	18.5	5	9.3	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	1.9	47	87.0
	斜文織	2	3.7	0	0.0	3	5.6	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	5	9.3
	朱子織	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	重ね組織	1	1.9	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	1.9
	紋組織	0	0.0	1	1.9	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	1.9
	合計	34	63.0	11	20.4	8	14.8	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	1.9	54	100.0
昭和 (1927~1940)	平織	26	32.1	17	21.0	6	7.4	1	1.2	4	4.9	3	3.7	2	2.5	59	72.8
	斜文織	0	0.0	1	1.2	4	4.9	0	0.0	1	1.2	2	2.5	0	0.0	8	9.9
	朱子織	0	0.0	1	1.2	1	1.2	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	2	2.5
	絡み織	0	0.0	2	2.5	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	2	2.5
	紋組織	0	0.0	1	1.2	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	2	2.5	3	3.7
	混合組織	1	1.2	0	0.0	0	0.0	1	1.2	0	0.0	0	0.0	0	0.0	2	2.5
	変化組織	0	0.0	1	1.2	1	1.2	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	2	2.5
	重ね組織	1	1.2	0	0.0	0	0.0	1	1.2	0	0.0	0	0.0	0	0.0	2	2.5
	特別組織	1	1.2	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	1.2
	合計	29	35.8	23	28.4	12	14.8	3	3.7	5	6.2	5	6.2	4	4.9	81	100.0

年)に再生繊維のレーヨン混の生地を初めて購入している。日本におけるレーヨンの生産は1918年(大正7年)から本格的に開始されており<sup>8)</sup>、購入は国内生産の10年後にあたる。レーヨンの輸入は明治時代の終わりごろから始まっており、レーヨンが世に出回ってからかなり時間が経過してからの購入であったといえる。

また、組織は平織や斜文織の単純な組織ではあるが、繊維の違う色糸を使って柄出した「混用生地1」、混紡糸や混織糸で交織にした「混用生地2」は、合わせて8種類であり、昭和時代の試料の中で1割を占めていることがわかる。

組織については、明治、大正時代は圧倒的に平織が多く、9割近くを占めていた。昭和に入ると平織の割合が7割程度に減り、斜文織や変化組織や混合組織、紋組織や重ね組織など複雑な組織が加わり、組織の種類が明治、大正時代の5、6種類に対し、9種類に増えバラエティーに富んでくることがわかった。

#### 4. まとめ

本研究では、標本内のすべての貼付試料についてその組織と組成を明らかにすることができた。組織については、大半が平織で全体の約8割を占めていた。組成については綿が最も多く、天然繊維が中心であったが、昭和時代になるとレーヨンフィラメントやレーヨンフィラメント混の試料が出てくることもわかった。明治時代、大正時代から昭和時代になると、組織や組成が多様化してくることも確認できた。

得られた各試料の生地情報は、今後、服飾文化の研究者らが本標本に基づいた研究を進展させていくにあたり、有用な情報になると考えている。

参考文献)

- 1) 森理恵「小林孝子の衣服標本—1870年代～1930年代の中流家庭の衣生活—」『成瀬記念館』33巻、2018年、60-67頁。
- 2) 平井郁子、松梨久仁子編著『衣服材料学』（朝倉書店、2020）、60頁。
- 3) 島崎恒藏編著『衣服材料の科学』（建帛社、2017）、62頁。
- 4) 繊維総合辞典編集委員会編『新・繊維総合辞典』（繊維新聞社、2012）、343頁。
- 5) 菅野麻奈美「繊維鑑別の新手法① 赤外分光法を用いたセルロース系繊維の鑑別法の開発」『繊維学会誌』74巻、2018年、69-70頁。
- 6) 舟橋みゆき「繊維鑑別の新手法③ テラヘルツ分光法を用いたセルロース繊維の鑑別と混用率の算」『繊維学会誌』74巻、2018、73-74頁。
- 7) 坂本幸祐、菅野麻奈美、吉村季織、高柳正夫「赤外分光法と新規判別分析によるセルロース繊維の判別」『Comput. Chem. Jpn』17巻、2018年、225-227頁。
- 8) 繊維学会編著『やさしい繊維の基礎知識』（日刊工業新聞社、2004）、13頁。

## IV 小林家の浴衣を通してみる1920-1930年代の大衆浴衣

沢尾 絵  
SAWAO Kai

### 1. はじめに

1936年3月に日本女子大学を卒業した小林孝子は今和次郎<sup>1)</sup>の考現学に学び、横須賀の実家にあるもの一切切を図と文字に書き起こすという卒業論文『考現学より見たる一家庭』（日本女子大学成瀬記念館所蔵）を未完成のまま提出した。その秀逸な内容は高い評価を得たのだが、同年夏、孝子はこの卒業論文を「拝借」という名目で持ち出し、諸々書き足して完成させ、1938年4月に再提出した<sup>2)</sup>。その際、当時の小林家の家族が所持していた衣服を全て書き出した「被服しらべ」（1938年4月28日）が追加されたとみられるが、さらに1940年4月20日～10月25日には、孝子本人と祖母・両親・女中が所持していた衣服の端切れ200点余りを糊付けした「衣服標本」を製作した。ここには、生地入手の経緯や家庭裁縫の状況、服飾に対する好みなども詳しく記されている<sup>3)</sup>。

本研究において端緒となったのは、この、「衣服標本」に貼られている3枚の『主婦之友浴衣』の端切れである。著名な雑誌名を冠した浴衣とはどのようなものだったのか。この興味は、当該期の浴衣全体へと広がった。そこで本稿では、「被服しらべ」をもとに小林家の浴衣の把握を行い、大正末から昭和初頭の浴衣がどのようなものであったか検証していく。さらに、「小林孝子衣服標本」中の『主婦之友浴衣』の端切れ3点を起点として『主婦之友浴衣』の全体像を明らかにするとともに、小林家における『主婦之友浴衣』の位置づけを行う。これらの検証を通して、特に1920年代から1930年代の大衆浴衣の実態に近づくことを目的とする<sup>4)</sup>。

### 2. 「被服しらべ」にみる家族の浴衣

#### 2-1 小林家の浴衣

「被服しらべ」（昭和13年4月28日印）には、小林家の各々（祖母・父・母・孝子）が所持した被服が項目ごとに全て書き出されている。例えば祖母の被服項目は、着物、単衣、ねまき、浴衣、羽織、単羽織、帯、コート、身の廻り品、襦袢、肌着、腰巻、足袋に分けられており、和装のみの衣生活であったことがわかる。一方、父・母・孝子においては、洋服や洋服附属品の項目が加わり、父の洋服には大礼服・通常礼服・軍服も含まれる。このように「被服しらべ」に記された衣服の一覧は、世代・性別・社会的立場により所持した衣服が異なったことを明らかに示す資料との見方ができる。

その中であって、浴衣は誰もが何枚も所持する衣服であった。孝子を書き出した浴衣の名称およびその表記から明らかな模様と染織技法を一覧にまとめた（表1）。以下、家族一人ひとりの浴衣についてその概要を示すとともに、「衣服標本」中の浴衣裂との同定を行う。

#### (1) 祖母の浴衣

孝子の祖母は1855（安政2）年に生まれた。前述の通り、家族の中でただ一人洋装の衣服や関連の服飾品を持っていない。「被服しらべ」の冒頭部分はこの、祖母の着物の一覧で始まる。着物22枚、

表1 「被服しらべ」記載の浴衣と模様／染織技法

(「被服しらべ」より筆者作成、\*印:「小林孝子衣服標本の裂と同一」)

祖母 (19枚)	模様／ 染織技法	父 (8枚)	模様／ 染織技法	母 (26枚)	模様／ 染織技法	孝子 (22枚)	模様／ 染織技法
ガス白横縞縮	横縞／縮	白麻蚊拵	拵	青海波*	手拭染	[孝子浴衣]	
紺横縞縮	横縞／縮	白麻井の字拵	拵	切紙ちらし*	手拭染	ウロコ	縞中形
有松絞	絞り	手織白拵	拵	藍格子*	格子	あさがほ	
横養老絞	絞り	白亀甲拵	拵	小梅ちらし*	手拭染	胡蝶	
堅養老絞	絞り	紺拵	拵	くつわつなぎ		松皮菱	
角通し		紺変り拵	拵	雪わり草		板しめ絞	板縮
みそこし		白子持大名	縞	重ね網		雲に柳桜	
小紋中形	中形	白遠州縞	格子	棒縞縮	縦縞／縮	すずらん	
立袴中形	中形			滝縞縮	縦縞／縮	蛍	
紺拵	拵			有松絞	絞り	蔦の市松	
紺サツマ拵	拵			柳絞	絞り	紅藤麻の葉	
ちぢみ みそこし	格子／縮			ウロコ入柳絞	絞り	染わけ麻の葉	
Yの字くづし				黒横縞縮		浪がしら	
ねづ格子縮	格子／縮			飛白入横縞縮		矢がすり (臙脂)	拵
紺縞縮	縦縞／縮			三すぢ格子	格子	御所解	錦紗縮
白地縮子持縞	縦縞／縮			ギンガムのべんけい	格子	[孝子浴衣元禄袖]	
べんけい	格子			中べんけい	格子	タンボボ*	
細地べんけい	格子			小べんけい	格子	裏梅*	
厚地べんけい	格子			二格子	格子	麻の葉絞*	有松絞
				白麻拵	拵	麻の葉くづし*	カサイ染
				サツマ紺拵	拵	浪に千鳥*	カサイ染
				久留米紺拵	拵	矢がすり (紺)	拵
				小田原屋呉服店手拭*	手拭染	記念手拭 (横須賀高女創立20周年)*	手拭
				安田銀行手拭*	手拭染	四つ身久留米がすり	拵
				第二銀行手拭	手拭染		
				綿セル (べんけい)	格子		

単衣10枚、浴衣19枚、羽織12枚それぞれの名称を書き出した一覧が続くが、浴衣の枚数は着物に迫る数であったことがわかる。祖母の浴衣の中で、染織技法が特定できない角通しとみそこしを除く<sup>5)</sup>と、縮地の縦または横の縞、格子が最も多く、絞り、拵、中形があとに続く。浴衣の模様については一様に素朴な伝統柄で特別目立つものは見られない。

## (2) 父の浴衣

「被服しらべ」からは、父は和装・洋装ともに豊富に所持していたことがわかる。かつて横須賀の海軍勤めをしていた父だが、孝子が日本女子大学校生の頃には東京電燈株式会社の社員であった。「被服しらべ」に記載された父の衣服からは、父の職業だけでなく、仕事では洋装、家庭では和装であった当時の日本の衣生活の様相が垣間見える。和装は着物20枚、羽織12枚に次ぎ浴衣が8枚で、その内訳は、拵6枚と縞1枚、格子(遠州縞)1枚である。また、拵のうち4枚と縞・格子の浴衣は白地で、拵模様は蚊拵や井の字といった単純な繰り返し模様の浴衣であったことがわかる。

### (3) 母の浴衣

小林家で最も多くの被服を所持しているのは孝子の母郁で、その数は実に200を超える。母も祖母と同様和装を中心とした生活だったが、襟巻や手袋といった洋装小物も記されており、一部に洋装小物を取り入れる程度の和洋折衷の衣生活を送っていたことがわかる。母の被服一覧は着物47枚<sup>6)</sup>に始まり、次が浴衣26枚である。浴衣で最も多いのは格子柄である。また、祖母と同様に緋、絞り、縮の浴衣も所持している。

格子の次に多い手拭6枚の裂は「衣服標本」に全て貼られている。小田原屋呉服店手拭と安田銀行手拭については孝子が「衣服標本」で「10本たまると元禄袖の寝巻にまとめておくならはらしい」と記しており、母が手拭を有効利用していたことがわかる。また、青海波・切紙ちらし・小梅ちらしは、「衣服標本」中の『主婦之友ゆかた』の(一)～(三)と名称が一致する。なお藍格子については、「衣服標本」中の「松屋の安売場で一円均一」で購入した浴衣地が藍地に白の格子で、これに該当するものとみられる。

### (4) 孝子の浴衣

孝子の被服数は母に次ぐ数に上り、和装・洋装をあわせるとその数は190に上る。孝子の和装一覧は着物44枚<sup>7)</sup>から始まり、続いて浴衣14枚と浴衣元禄袖8枚となっており、浴衣類は合計22枚である。浴衣にみられる染織技法は中形・板縮・緋・錦紗縮・手拭(染)と多様で、孝子の浴衣の場合、模様染がその半数以上を占める。

孝子の浴衣についても母と同様、その一部が「衣服標本」の浴衣裂と一致する。元禄袖のタンポポ柄は横須賀のデパートさいか屋で、裏梅柄は町の呉服屋でそれぞれ求めたことがわかる。そのほか、横須賀高女の記念手拭地、有松絞の麻の葉模様、カサイ染の麻の葉崩しと波に千鳥の計6種類である。この中で有松絞とカサイ染はもともと母の浴衣だったものを孝子用に縫い直したもので、約25年遡る大正時代末の染織品である。

以上「被服しらべ」に記載された浴衣を一望すると、浴衣の枚数の多さに気付く。小林家の衣服に関して、その質と量の幅広さについてはすでに指摘されており<sup>8)</sup>、父と娘の孝子の衣生活には洋装が浸透していたことも明らかだが、そのような中であって浴衣は着物に次ぐ枚数を占めていた。また、「衣服標本」に貼られた浴衣裂12点は全て「被服しらべ」に記載されていることが確認でき、『主婦之友浴衣』は孝子の母だけが所持していた。

加えて、父を除く女性3人の浴衣染織に着目すると、祖母は縮・中形・緋・絞りなどが多くを占める。一方、母や孝子の浴衣には同様の染織も見られるが、模様染が格段に多くなる点について祖母とは異なる。これを踏まえ、次に当時の流行の浴衣について検証し、改めて小林家の女性3世代の浴衣について考えていく。

#### 2-2 『三越』にみる1920年代前半の浴衣

「小林孝子衣服標本資料集」からは、小林家が横須賀の呉服店やデパートのほか、東京の主要百貨店で反物や衣服を購入していたことがわかる。この当時、白木屋や三越、松屋などの大手百貨店では機関雑誌を発行し、家庭生活にまつわる記事と共に新たな流行発信に努めていた。また後述の『主婦之友』の調査から、主婦之友社では1920年代に三越呉服店の店頭調査を行い、浴衣に関する特集記事を複数回掲載するほどに注目しており、三越呉服店と主婦之友社は決して無縁ではなかつ

たことがわかる。そこで本項では、「被服しらべ」に記載されている祖母や母郁の浴衣の背景を探るべく、三越呉服店の機関誌『三越』<sup>9)</sup>の1920年代前半の記事から当時の浴衣の状況を辿る<sup>10)</sup>。

1920年代前半発刊の『三越』に掲載された浴衣について、染織技法・地質・模様色・推奨年齢・価格の記載事項をまとめると表2の通りとなった<sup>11)</sup>。

『三越』に掲載された最新流行の浴衣を見る限り、1920年代前半の主流は中形で、大きく溝を開ける形で次に絞りである。地質には明石・真岡といった木綿地のほか、三本縮も多い。祖母や母が複数枚所持した縮地には、縮・麻縮・明石縮の種類が見られるが、麻縮の絞りの浴衣には「浴衣地として最も涼味に富む」とのコメントが添えられている。祖母や母の縮地の浴衣が麻縮かどうかは確認できないが、仮に高価な麻縮であれば、『三越』では絞り染が12～15円台である。次に地色だが、圧倒的に紺地が多く、次いで納戸地が目立つ。このような濃い地色に対しては一律に「意気」と評している。これに対して白地には「上品」との認識が確認できる。『三越』で紹介している浴衣の推奨年齢は10代から20代が多い中、30代後半から40代を意識したものもある。年配向けの浴衣に共通するのは、地色が濃いことに加え、雨・霰・大小匹田、小紋、鯨吹雪といった、細かく派手さの見られない模様であり、この傾向は祖母の浴衣と共通する部分である。手拭中形は1920年、1921年、1925年にわずかに1点ずつしか見られず、いずれも価格は格段に廉価な設定で、湯上りなどのごく私的な場面で着用する浴衣として紹介されている。

### 3. 『主婦之友浴衣』

#### 3-1 小林家と雑誌『主婦之友』

##### (1) 「衣服標本」に貼られた『主婦之友浴衣』裂

「衣服標本」に貼られた浴衣裂は12点あり、いずれも「被服しらべ」に記載されていることは述べたが、この中に郁の『主婦之友浴衣』3点が含まれる。それぞれ、(一)『切り紙』(図1)、(二)『小梅』(図2)、(三)『青海波』(図3)である。『切り紙』に添えられた記録には、「昭和6年主婦之友社でゆかたを売り出したのを買った」とあり、購入年がわかる。さらに孝子は、「祖母が『母はお納戸浴衣が似合わない』と言ったのにその反対を押し切って3反も一緒に買った。案の定どこ

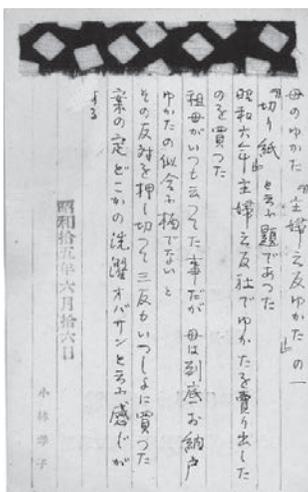


図1 『主婦之友ゆかた』(一)  
「切り紙」



図2 『主婦之友ゆかた』(二)  
小梅



図3 『主婦之友ゆかた』(三)  
青海波

表2 『三越』1920～1925に掲載された浴衣

西暦	年号	巻	號	ページ	番号	技法	地	模様	色	推奨年齢(歳)	価格	特記事項(解説)					
1920	T9	10	6	14	1	中形	真岡地	竜胆	白地に紺・薄藍	17.8～24.5	4円50銭						
					2	手拭中形	手形浴衣地	花、菊	白地に藍の濃淡	17.8～24.5	2円25銭						
					3	中形	三本縞	撫子、モミジ	濃納戸地に薄藍	17.8～24.5	9円80銭	上品					
					4	中形	三本縞	雲取り、葉玉、桜、紅葉	濃納戸地に白匹田、薄藍、	15.6～22.3	9円30銭	上品					
					5	中形	縞明石	藤の花、葉	濃納戸地、白、薄藍濃淡の友禪風	14.5～20前後	9円80銭	令嬢向き					
					6	中形	綿明石	棒縞、薩摩縞	濃納戸地、白の格子、薩摩の大格子破れ	14.5～20前後	8円80銭	極めて意気					
				15	1	中形	綿明石	釣鐘草	紺地、藍(葉)、白(花)	17.8～27.8	9円	目新しく柄					
					2	中形	綿明石	横段風の波、鷗	紺地、薄藍(波)、白(鷗)	17.8～25.6	9円	意気					
					3	中形	綿明石	波頭	濃納戸、白と薄藍(波頭)	17.8～25	8円80銭	意気					
					4	中形	綿明石	クロバー	濃納戸、藍と白(クロバー)	15.6～30前後	8円50銭						
					5	中形	綿明石	西洋草花	紺地に薄藍、輪郭線白	20前後～24.5	8円80銭						
					8	16	1	絞り	堅縞錦紗縮緬	渦巻、水玉	紺地、白匹田(渦巻)、薄藍(水玉)	20前後	31円50銭				
				2			絞り	堅縞錦紗縮緬	水玉、図案風草花	紺地、白、薄藍	23.4歳	31円50銭					
				3			絞り	堅縞錦紗縮緬	水玉、疋田	紺地、白、薄藍	30前後	31円80銭					
				17		1	絞り	麻縮	市松どり、章魚絞り	薄藍と白の絞り出し	20前後	15円50銭	浴衣地として最も涼味に富む				
						2	絞り	麻縮	鳴海式、堅絞り	白、藍	30前後	13円	浴衣地として最も涼味に富む				
						3	絞り	麻縮	鳴海風、花と蝶	藍、白	20前後	12円	浴衣地として最も涼味に富む				
				1921		T10	11	5	12	1	中形	三本縞	水玉(格子目)	紺地、藍と白(水玉)	22.3	9円	初夏用の上物は明石または縮、その上物に三本縞、明石縞
										2	中形	真岡	片喰草(小紋型風)	潮染 ※色の言及なし	20前後	4円55銭	
										3	中形	真岡	籬と菊(有職風)	白地、藍、納戸	20前後	4円	
					4					中形	三本縞	鯨吹雪小紋	濃納戸、白上がり	35.6	8円		
					5					中形	真岡	檜垣、菊	白地、紺(檜垣)、藍濃淡(菊)	20前後	4円		
					6					中形	三本縞	蜻蛉	濃い納戸、小紋	22.3歳	8円		
					13					7	中形	三本縞	紫陽花	紺地、白	30前後	7円30銭	
8	中形	真岡	蘭、葉(縦縞)							白地、紺(花)、薄納戸	25.6	4円	上品				
9	中形	三本縞	乱れ格子、草花							濃い納戸、白	20前後	8円					
10	中形	真岡	横縞							濃い納戸、白と藍	25.6前後	3円50銭					
11	中形	三本縞	大原女							紺地、薄藍、白	25.6前後	8円80銭	意気				
12	中形	縮	秋草							白地、紺と藍濃淡	20前後	8円					
6	10	1	中形		明石			百合(レース柄)	紺地、白(百合)、藍(坡)	20前後	6円70銭						
		2	中形		明石			三崩し、角つなぎ(疋田)	紺地、	20前後	8円						
		3	中形		三本縞			丸形陶器風	紺地、白(四崩し)	22.3	8円						
		4	中形		明石			雁来紅(更紗式)	紺地、白上がり	20前後	6円70銭						
		5	中形		格子紗			三折	紺地、白抜き	20前後	8円30銭	頗る奇抜					
		6	中形		明石			瓢箪、散らし紋	花色、藍	20前後～25.6	8円80銭						
	11	1	中形		縮			萩(小紋風)、花の丸	白地、黒(萩)	17.8～20前後	6円						
		2	中形		明石			大小匹田小紋風	花色、白、薄藍	40前後	6円80銭						
		3	中形		明石			蘆	白地、藍の濃淡	22.3	8円	意気					
		4	中形		明石			紺の市松に菊・撫子、角匹田	白と紺(市松)	20前後	7円						
		5	中形		三本縞			横縦棒	紺地、白上がり	35.6前後	8円30銭						
		6	中形		真岡			よろけ縞、秋草	白地、薄藍(堅よろけ縞)、紺(秋草)	20前後～25.6	3円80銭						
7	中形	明石	紗綾形(萩)、菊菱	紺地、	25.6	7円											
8	手拭中形	手拭中形	太蘭、蜻蛉	藍、紺		1円50銭	お手軽な湯上り用										

西暦	年号	巻	號	ページ	番号	技法	地	模様	色	推奨年齢(歳)	価格	特記事項(解説)				
1922	T11	12	5	10	1	中形	綿明石	楓、実	白地、草鉄色、薄鼠	32.3	7円	上品				
					2	中形	綿明石	図案風花鳥模様	鉄納戸地、白	27.8~30前後	8円35銭	ハイカラ				
					3	中形	綿明石	雲取り、夕顔、白匹田	鉄納戸地、白匹田	17.8	8円30銭	意気向き				
					4	中形	綿明石	変り麻の葉、香の丸形		16.7前後	7円50銭					
					5	中形	綿明石	萩、水玉、雨緋	縹色地、藍濃淡の砂子詰	22.3	7円					
					6	中形	綿明石	西洋草花の図案化	白地、草鉄色、藤鼠	18.9	7円30銭	ハイカラ				
					11	7	中形	綿明石	草花切嵌	納戸地、白上がり	17.8	7円80銭	意気、奇抜			
						8	中形	眞岡	縞、鳥の足跡	紺地、藍、白(縞)	20前後	3円80銭				
						9	中形	眞岡	色々の裂尽し	紺地、紺、納戸	27.8~30前後	3円80銭	凝った方に適当			
						10	中形	綿明石	不規則な縞、棕櫚の葉	白地、藍(縞)	22.3	6円30銭	ことのほか涼味に溢れている			
				12	6	12	1	中形	明石縮	枝垂柳、流れ、紅葉	紺地に、白、薄藍	20前後	5円80銭	意気、上品		
							2	中形	明石縮	流れ(雛小紋風)、水玉、籠目、草花の葉	納戸地、白、薄藍		8円	若奥様向き		
							3	中形	明石縮	土佐絵風垣、萩	紺地、白	18.9	5円80銭	目新しい		
							4	中形	明石縮	水、菊(小紋)	紺地、白、浅黄(小紋)	15.6	5円80銭	お嬢様に至極奇抜		
							5	中形	三本縞	葡萄の写生模様	納戸地、白、薄藍	17.8	8円	上品		
							6	中形	明石縮	横霞風縞目、松葉	紺地、薄藍、白	24.5	5円80銭	さっぱり		
				1923	T12	13	5	10	1	中形	明石	井筒、水玉	納戸地、白	37.8	5円80銭	
									2	中形	三本縞	雨、霰	紺地、白	37.8	8円80銭	意気
									3	中形	眞岡	横縞(御簾)、高山植物	納戸地、白、	20前後	3円30銭	上品
									4	中形	三本縞	網代、萩	納戸地、白上がり(網代)、納戸濃淡(萩)	22.3	5円80銭	若奥様向き
5	中形	明石	算盤玉の格子						紺地、白、	25.6	8円30銭	意気好み				
11	6	中形	三本縞						百合の陽・陰	藤色地、縹、白	17.8	7円50銭	ハイカラ又高尚			
	7	中形	眞岡/三本縞						垣根のやたら縞風、小菊	紺地、白	18.9	3円15銭/5円80銭	意気			
	8	中形	眞岡/明石						蛇籠、菊と流水(友禅風)	白地、縹色	20前後	3円50銭/5円80銭	上品			
9	中形	三本縞	薄						潮納戸地、白(薄)	20前後	7円	至極上品				
6	16	1	中形					三本縞	小波、睡蓮、水玉	白地、潮納戸地の薄め、白(水玉)	17.8~26.7	6円80銭				
		2	中形					明石縮	竹の網代、薄	納戸地、白(網代)	16.7~24.5	6円				
		3	中形					眞岡	露芝、蜻蛉	白地、紺(疋田)	15.6~20前後	3円				
		4	中形					明石縮	横縞風小波、若芦	納戸地、白	22.3~25.6	5円50銭				
		5	中形					眞岡	破れ格子、鈴蘭	納戸地、白	15.6~22.3	3円30銭				
		6	中形					眞岡	椰子の葉、水玉	白地、濃い納戸	12.3~17.8	2円80銭				
1925	T14	15	6					7	中形	ポイル	寄形小紋松波	濃い納戸地、藍鼠上がり、白抜き	30~45	8円50銭		
									中形	ポイル	刷毛緋、かたばみ草	縹色地、白	25.6	6円90銭	意気向き	
									中形	三本縞	疋田、四季花模様	納戸地	25.6	5円50銭		
				8	中形	明石	雲取りに菊花	縹色地、白		6円50銭	若奥様上品向き					
					中形	三本縞浪越	図案式の鳥、若草	白地、薄鼠色	30前後	3円50銭						
					手拭中形	細眞岡	芦、蜻蛉	白地、藍(芦)、納戸(蜻蛉)	17.8~20	2円30銭						

かの洗濯オバサンという感じがする」等の厳しい評を下しており、孝子の浴衣地に対する好みも垣間見られて興味深い。

## (2) 雑誌『主婦之友』

『主婦之友』は、1917年3月に創刊された婦人向け月刊誌で、2008年に休刊するまで約1世紀の歴史を持つ<sup>12)</sup>。創業者石川武美の「読者のために奉仕する」考え方のもと、職業・人生・社会問題など多岐にわたるテーマをとりあげ、衣食住における実用的な情報を提供する雑誌であった。同時期の『婦人画報』・『婦人倶楽部』・『婦人公論』等と比べて最も廉価<sup>13)</sup>であったことも、多くの読者に選ばれた理由の一つであった。

ところで、孝子が記した「図書目録」(1937年2月)から、小林家に『主婦之友』があったことがわかる。その巻号も冊数も不明だが、郁は『主婦之友』創刊時32歳、『主婦之友浴衣』を購入した1931年には46歳で、一家の主婦として子育てをしながら過ごした年月と、『主婦之友』創刊から約20年はほぼ重なる。また、長じた孝子も『主婦之友』を参考にしてワンピースなどを縫い愛用していたことが「衣服標本」に記されていることから<sup>14)</sup>、当時の小林家において『主婦之友』が貴重な情報源として活用されていたとみられる。

そこで次に、この『主婦之友』において浴衣がどのように扱われていたのか、その詳細を経年的に捉え、1920-1930年代の一般大衆向の浴衣について概観し、郁購入の『主婦之友浴衣』について検証していくこととする。

### 3-2 『主婦之友』浴衣記事に関する調査<sup>15)</sup>

雑誌『主婦之友』の調査の対象期間は、郁の子育て期間および孝子の卒業論文再提出年が1938年であったことに留意し、1920年より1938年3月までとした<sup>16)</sup>。その中で浴衣に関する記事を抜き出し、記載事項を網羅的に調査した結果、『主婦之友浴衣』は雑誌『主婦之友』創刊8年を記念して1925年に行われた浴衣図案懸賞募集の企画で、その後11年続いたことがわかった。そこで以下に『主婦之友浴衣』を含む1920~1930年代の浴衣について、雑誌『主婦之友』に掲載された内容を中心に時系列で論じていく。

#### (1) 『主婦之友浴衣』開始以前(1920-1924年)

1920年、浴衣に関する記事は百貨店の広告に始まる。第4巻5月号「三越の5月」、同6月号の「浴衣地新柄陳列会」(松屋呉服店)は、いずれも中形浴衣地の陳列会を行い、流行の浴衣地を取り揃える旨を伝えるものである。

他方この6月号で目を引くのは、三越呉服店の調査をもとに流行衣裳を解説する特集「初夏を飾る流行衣裳のいろいろ(三越調べ)」(第4巻6月号 pp.63-64)の「今年の中形浴衣」の記事である。表題の通り、『主婦之友』の記者が三越呉服店に赴き、流行の浴衣について調査した結果を読者に伝える趣向である。記事によれば、浴衣の地質には縮類が一般向きで、地色は藍が最も多く白はほとんど見られず、模様は流行の小花模様を地色が見えないほどに表したり図案式の模様<sup>17)</sup>を上手く表現しているとのことである。価格は上質の縮地が11円前後、普通の品が8、9円前後、真岡地は4、5円前後である。また、新奇性が見られるものとして手拭地を強く推奨している。理由として、手拭染は濃い藍色地に高級な縮と同様の模様を染めているため手拭地には見えず廉価で、3円前後で上等なものが入手でき、更に白地ならば1円50銭程度であることを挙げている。

これらの内容は、上述2-2にて検証した『三越』（1920～1925年）の内容（表2）と重なり、主婦之友記者による三越調べは信頼性が高いといえる。併せて「被服しらべ」（表1）と照らすと、小林家の祖母と母が所持する縮類は当時一般的な浴衣地であった。また、新たに推奨された手拭地は表2（1925年以前）においてわずか4点しか見られないが、「被服しらべ」から、手拭染の浴衣を郁と孝子だけが所持していたことが明らかである。つまり、1920年代前半における新進の手拭染浴衣は、より若い世代に受け入れられた浴衣と位置付けることができる。

この手拭染の価格設定だが、当時の女性労働者の賃金は三越呉服店和服裁縫部の婦人従業員（17-30歳以下）の見習い生が日給40-50銭、技巧生が日給70銭以上で、東京中央電話局料金課の従業員は日給70銭（15歳以上、高等女学校卒業以上）であった<sup>18)</sup>。こうした日給から鑑みると、上述の手拭浴衣地が一般大衆には求めやすい廉価であったことは確かである。このように日本で最初の百貨店として知られる三越呉服店<sup>19)</sup>を取材し、流行や価格の詳細を読者に発信することは、『主婦之友』への信頼性と浴衣地への関心を高める上で効果的であったと考えられる。

1921年（第5巻）7月号の三越調査では「流行の中形浴衣と夏の帯」として浴衣に特化した記事が見られる。中形浴衣は東京で染める独特の藍色を有し、流行の地色は藍系統、紺地は手拭浴衣以外にあまり見られず、模様は写生風の草花・図案風・小紋が主流の傾向であること、歌舞伎模様の応用は三越の新しい試みであることを好意的に紹介している。また、平常着として安価で堅牢度の高い手拭地の需要がさらに高まりを見せていた様子が見られる。

1922年（第6巻）7月号では浴衣の特集記事は見られず、三越の広告で例年通りの中形浴衣の扱いはあることを知らせるのみである。1923年（第7巻）6月号の三越の広告においては、中形浴衣の6図案を地質・模様・推奨年齢・価格と共に掲載する新しい形を見せる。また、三越の浴衣を申し込む際は、『主婦之友』の愛読者であることを申し添えるよう推奨しており、『主婦之友』読者層の浴衣への関心を十分に意識していたことが伝わる。続いて8月号（pp.100-106）では「私の好きな夏の衣裳と持物」の特集で、著名人の子女や夫人の夏の服飾に対する嗜好を扱い、日頃地味で渋い色合いの緋や縞の着物を好む女性が、夏の浴衣だけは手拭地で派手なものを選び、子どもたちも洋服以外は手拭地の浴衣で過ごしていることを紹介している。孝子の祖母や母の浴衣は様に地味で渋い印象を受けるものが多い。しかし手拭地の浴衣ならば、日頃とは異なる派手さで冒険できるとの捉え方がされていた。

このように、『主婦之友浴衣』企画が始まる以前の数年間、『主婦之友』では三越呉服店に注目しながら、浴衣に関する最新の傾向を読者に伝える努力を惜しまなかった。浴衣の模様は従来の伝統柄を中心とし、廉価でありながら質の向上が見られる手拭染がより注目されるようになっていた。これは祖母、母、孝子の3世代が所持する浴衣染織の特徴と重なるのである。

## （2）『主婦之友浴衣』図案懸賞募集開催期間（1925-31年）

1925年、『主婦之友』は創刊8周年を迎え、第9巻3月号で3件の記念計画を発表した。そのうちのひとつが浴衣地の図案と意匠の募集であった。図案懸賞募集企画は既に大手百貨店の機関誌などでも行われており<sup>20)</sup>、主婦之友社による図案懸賞募集は決して新しい企画ではなかった。しかし『主婦之友浴衣』が、その企画開始と同時に大きな盛り上がりを見せた事実は応募図案数の急増（初回：2717枚、1927年：7600枚、1928年14252枚）からも明らかである。では実際どのように進められ、読者すなわち一般大衆の心を掴むに至ったのだろうか。その経緯を記事の内容から辿っていく。

最初の図案懸賞募集「素人の方の考案した浴衣地の図案と意匠の募集」の冒頭では、「夏の大部

分を平常着として身につける浴衣地の図案と意匠を左の方法によって懸賞募集いたします」<sup>21)</sup>としている。既に三越調査により浴衣の流行を発信してきた『主婦之友』にとって、大衆の興味を引くために夏の必需品である浴衣の選択は必然であった。募集の誌面では、投稿規定・審査員・入選作品の展覧会開催予定等も伝え、懸賞金は当選3名に各100円、優秀10名には各20円、計500円を充てた。この金額は前述の女性労働者の日給や、同年11月号の家計の特集にみられる職業別給料（海軍軍人の月収43円75銭、小学校教師の俸給75円、鉄道役員の給料77円）<sup>22)</sup>を見ても十分に魅力的だったと推察される。

3か月後の6月号では当選図案の発表が行われた。同号の巻頭では、審査会の様子として4名の審査員（小林古径、与謝野晶子、松坂屋呉服店の営業課長、石川武美社長）が応募図案と共に写真に収まり審査会の様子を伝えている（図4）。また、松坂屋の上野・銀座・名古屋・大阪4店舗で当選図案と反物を対照する展覧会開催を予告している。当選者の発表頁では、特選図案3点、特選3名・優秀10名について出身地と氏名を紹介し、展覧会が6月1日から始まることを再度知らせている（図5）。



図4 浴衣図案の審査会  
『主婦之友』第9巻6月号（1925年）巻頭写真

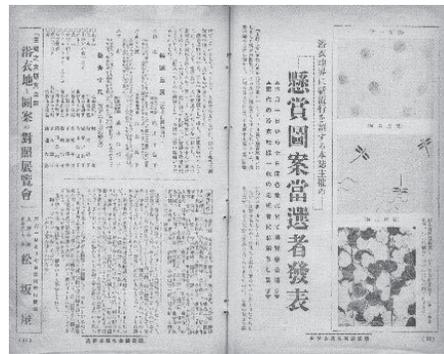


図5 当選図案の発表  
『主婦之友』第9巻6月号 pp. 12-13（1925年）

翌7月号の巻頭写真では、前号で発表した特選3作の浴衣をモデルに着せて紹介しており（図6）、松坂屋で開催した展覧会が盛況であったと報告している。また、専門家の言葉を借りて模様の奇抜さ・構図の巧妙さに新境地を開いた『主婦之友浴衣』の存在感を強調するなど、その宣伝に余念がない。同誌では「今年流行のもっとも斬新な主婦之友浴衣地誌上展覧会」と題し、特選・佳作・選外の20図案を掲載し、推奨年齢・地質・価格の解説を添えている。ここで地質と価格に注目すると、最も高価なのは一等賞の作品にのみ適用された変り絹に中形で6円80銭、二等賞以下の地質は、三本絹（本玉藍染6円20銭、手拭染3円50銭）、真岡（手拭染1円50銭）などで、手拭染が主流で一気に廉価であった。この理由について誌面では、『主婦之友浴衣』では手拭染<sup>23)</sup>の技法を採用しており、反物に型を置いては糊を置く中形よりも大量生産が可能であることを挙げている。さらに、浮いたコストはより良い染料に充て、堅牢度の高い浴衣地制作を可能にしたことも伝



図6 巻頭写真『主婦之友』  
第9巻7月号（1925年）

えている。

1928年、図案の応募数は一気に1万4千件を超えた。多数の図案応募に対応するためか、この年『主婦之友浴衣』は募集締切を2月に早め、5月号で当選者発表を行った。浴衣図案懸賞募集が成功していたことは明らかである。

飛躍的な応募図案増加の後押しとなったとみられる要因の一つに、『主婦之友浴衣』の販路拡大があげられる。初回、販売窓口は主婦之友本社と松坂屋4店舗のみだったが、第2回には主婦之友本社での通信販売のほか、遠隔地（鹿児島、北海道、大連）でも展示即売会を行った。第3回以降は特約店を一気に増やし、1927年には日本全国86店舗、1928年には内地全域と「台湾・朝鮮・満州・志那」を加えて181店舗、1931年には計543店舗に拡大した。さらに販売の際には大景品付き浴衣地として、全ての反物に景品券を付け、注目を集めた。参考までに1928年の景品は1等賞から順に、嫁入り用夜具、桐箆笥、金側スイス製夫人用腕時計、鏡台など豪華な品揃えで、12等賞以上が2778本用意されるという『主婦之友』あげての大々的な企画であった。

『主婦之友浴衣』関連の記事も年々充実を見せた。当選図案の浴衣姿を掲載した巻頭写真は「主婦之友浴衣地くらべ」「主婦之友浴衣のお母様とお嬢様」等の工夫をこらし、頁数を増やしていった。『主婦之友』が浴衣地利用の洋服裁縫<sup>24)</sup>について先導的な立場との自負を見せた紹介記事は、1925年の第1回図案懸賞募集の年から見られる。初年は婦人向けハウスドレスの仕立て方、1926年では女兒服・婦人用ハウスドレス・男女児兼用のロンパースを巻頭写真に載せ、誌面で作り方を解説した。1927年でも同様である（図7）。提案する洋服は、「1反の浴衣地で2枚できる婦人向ハウスドレスの作り方」（1926年第10巻7号 pp.270-273）、「浴衣地1反で5枚できた男女児用の可愛い遊び着」（1927年第11巻7号 pp.296-299）のように、費用対効果を重視したものが目立ち、読者に寄り添う姿勢が見られる。

1928年第12巻7月号では、それまでにも洋裁教育の企画を担当してきた並木伊三郎<sup>25)</sup>が、浴衣地による婦人ドレスの作り方を解説している。郁が浴衣地を購入した1931年6月号では、浴衣は昼間のお洒落な外出着として着られるものへと移行し（図8）、浴衣地を利用した最新型の洋服も12種類が紹介された。



図7 夏の新型実用服三種  
『主婦之友』第11巻7月号（1927年）巻頭写真



図8 「昼間に浴衣の流行時代」『主婦之友』第15巻  
6月号（1931年）巻頭カラー部分

このように『主婦之友』では、浴衣の図案懸賞募集企画から当選発表後の様々な情報提供まで、読者を飽きさせることなく購買意欲をかき立てていった。その一方で、購入しやすい環境も整え、

その活況を作る道を開いていった。他の雑誌社でも追従するように浴衣を作る動きが始まり、百貨店や雑誌社はこぞって流行の浴衣地を発売していった<sup>26)</sup>が、『主婦之友浴衣』はその中で先駆的かつ主導的立場にあったといえる。

### (3) 『主婦之友浴衣』 図案懸賞募集終了後 (1932年-1935年)

1932年、『主婦之友浴衣』の図案懸賞募集は何の前触れもなく終了したが、『主婦之友浴衣』そのものは存続した。「一流作家によって図案された主婦之友浴衣地昭和7年の素晴らしい新柄80種」(第16巻第6号)と題した通り、一流画家<sup>27)</sup>に依頼して制作した浴衣地を予め準備し発表する形式をとった。新柄発表に際し、作家の紹介と共に今年の流行柄を解説し、『主婦之友浴衣』が一層芸術的になったと強調している。注文時には細真岡の最上生地(1円95銭)または外出着にもなるボイル地(3円30銭)を指定でき、全国特約店で6月1日から一斉販売した。景品企画は続けられたものの規模は縮小され、特約店の数は1933年には209店舗に縮小された。

『主婦之友浴衣』最終年の1935年、第19巻7月号で発表された柄は全部で20種であった。この年、特約店は一切設けず、注文は全て東京・神田・駿河台の主婦之友社代理部で対応した。地質は細真岡(1円90銭)とこの年初めて採用した人絹紅梅(3円90銭)から選ぶことができた。誌面では、特約店を設けないことで抑えた価格での提供が可能になったことを強調している。しかし、20種の図案を紹介するほかに特集記事なども設けず、景品の企画は7反以上をまとめて購入した場合に1円相当の香水を記念贈呈するというものであった。このように『主婦之友浴衣』の規模は意図的に縮小され、この年を最後に『主婦之友浴衣』は11年の幕を閉じた。

### (4) 『主婦之友浴衣』 終了後 (1936年-1938年)

1936年以降、浴衣を題材とした記事はほぼ見られない。わずかに取り上げられた記事は、若い人でも1年の修行をすれば2時間で浴衣を仕立てられるという内容で、新しい浴衣を紹介するものではない。その後、誌面には戦時色が色濃く表れ、孝子が卒業論文を提出する1938年3月まで、浴衣関連の記事が再び誌面を賑わすことはなかった。

## 4. 結論

「被服しらべ」と「衣服標本」、機関誌『三越』、雑誌『主婦之友』の検証を通し、大きな変化として見てきたのは1920-1930年代の大衆における手拭浴衣の登場と広がりである。孝子の祖母は手拭染の浴衣を所持していなかったが、母郁は手拭そのものを浴衣に仕立て、手拭染(注染)で脚光を浴びた『主婦之友浴衣』を所持していた。孝子の高校の記念手拭で浴衣を作ったのも母であった。1920~1925年の『三越』からは、当時の浴衣としては中形が依然として主流で、数点見られた手拭染は湯上りに纏う程度の私的な位置づけであった。しかし同じ頃、手拭染が堅牢度の改善を重ね、デザイン性に富み、なおかつ大衆が求めやすい廉価を実現した新しい浴衣として存在感を示し始めていたことが『主婦之友』の三越調査の特集記事により裏付けられた。

浴衣に限らず衣服というものは同時に全て買い揃えるわけではなく、年齢による選択肢の幅や好みも人それぞれである。また、小林家にみられる浴衣の状況はあくまでも当時の一家庭における衣服事情に過ぎない。しかし本研究を通して、祖母・母・孝子へと所持する浴衣の染織技法が、緩やかではあるが確実に変化していく様子が確実に見られた。そして孝子による衣生活の克明な記録と資料を雑誌記事などで裏付けることで、近代日本の染織史を大衆浴衣という視点から捉えるに至っ

た。

ところで『主婦之友浴衣』の調査を通して、郁が1931年に購入した『主婦之友浴衣』は図案懸賞募集企画第7回の反物であることが分かった。この年は図案募集を行った最後の年で、一般読者からの7600枚余りの応募図案より選ばれた70枚超の作品に審査員の図案を加えて85柄が商品化された。しかしこの年の当選図案は、第15巻7月号の誌面において評判柄として20作品が紹介されるにとどまり、郁購入の3点は評判柄には含まれていない。全ての柄を見たい場合には、主婦之友社のカタログ郵送を希望する(図9)か、主婦之友社売店(神田駿河台)で全柄陳列されるのを見る(図10)という方法があった。しかし管見の限り同年のカタログは現存しておらず、未だ郁購入の3点について照合には至っていない。郁が購入した年の浴衣地購入の景品には総桐箆筥100本と置時計1000個が準備されており、豪華な企画はまだ続いていた。誌面の浴衣関連記事も依然として充実しており、『主婦之友浴衣』が大衆浴衣の最前線として最も盛り上がりを見せた時期であることがわかった。



図9 景品の内容とカタログ送呈を知らせる広告 『主婦之友』第15巻7月号 (1931年) p.493

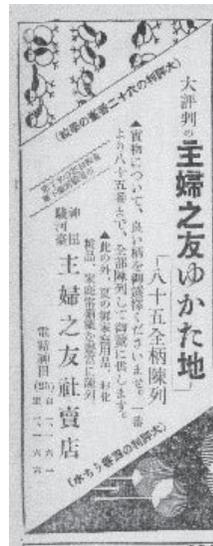


図10 神田駿河台主婦之友社売店にて85全柄を陳列する広告 『主婦之友』第15巻7月号 (1931年) p.505

1920年代前半、郁は30代半ばから後半で正に子育ての真っ只中であったわけだが、「被服しらべ」に挙げられた郁の被服数は衣生活への関心の高さを裏付けるものである。その関心が新たに登場した手拭染浴衣の中で、とりわけ大衆の注目を集めた『主婦之友浴衣』に向けられたのは、ごく自然なことであった。家事・育児の傍ら『主婦之友』を講読していた郁が大々的に練り広げられていた浴衣商戦を目にしたとき、一消費者として大いに魅力を感じ、1931年のこの年、とうとう『主婦之友浴衣』3反を購入するに至ったのではないだろうか。

以上、孝子の「被服しらべ」と衣服標本の『主婦之友浴衣』を巡り、雑誌記事と併せて検証を進めてきた。模様の具体的な検討など課題は残るが、貴重な資料との出会いに感謝しつつ、更に探求を深めていきたい。

注

- 1) 早稲田大学の教授をしていた今は、1927年から日本女子大で非常勤講師をしていた。
- 2) 森理恵「小林孝子の衣服標本——八七〇年代～一九三〇年代の中流家庭の衣生活——『成瀬記念館』33号、2018年。
- 3) 共同研究「日本女子大学卒業生小林孝子の衣服標本研究—1930年代の日本女子大生とその家族の衣生活—」は日本女子大学総合研究所の研究課題72として2019～2021年度に行われた。衣服標本の枚数は216枚、布の種類は214点が確認されている。
- 4) 本稿第3章は、上記脚注3における共同研究の成果として発行された『小林孝子衣服標本資料集』（2022年2月28日）収載の拙稿「『主婦之友浴衣』にみる1920-1930年代の大衆の浴衣」を加筆修正したものである。
- 5) 角通しは板締で染めることが可能な模様、みそこしは格子の一種を示す模様である。しかし、角通しは型染などの別の技法による可能性もあり、「被服しらべ」の表記の範囲では染と織のいずれによる模様のなのか判断はできない。
- 6) 母の着物一覧では、着物に組み合わせる下着や羽織類も併記されているため、本稿では着物のみの枚数を示している。
- 7) 孝子の和装一覧「着物」では、振袖や単衣も含めて数えている。
- 8) 「小林孝子衣服標本資料集」（2022年2月28日、日本女子大学総合研究所）緒言において、共同研究代表者の森は小林孝子が衣服標本を製作した1940年代が百貨店の売り上げが最高額を記録する等、1930年代の消費主義がピークに達した年であったことに触れ、「『被服しらべ』や衣服標本は1930年代の関東の中流家庭の衣生活における消費主義の隆盛を立証するものである」と指摘している。
- 9) 株式会社三越呉服店は1904（明治37）年12月に三井呉服店の営業一切を譲り受け開業した。1905年、学者・文芸家を集めて「流行会」を組織すると、服飾その他の改良をはかり、機関雑誌「時好」を発刊し、その後1908年に「三越タイムス」に改題した。さらに1911（明治14）年に発刊された「三越」は地方版の発刊、関東大震災による中断から復活、月刊の廃止などを経て1943（昭和18）年まで続き、消費者に最新の呉服情報を知らせる役割を担った。
- 10) 調査は国立国会図書館所蔵の『三越』1920～1925年による。浴衣に関する記事は5、6月号に集中しているが、1924年の三越は1、4月分しかない。
- 11) 国立国会図書館所蔵『三越』による。国会図書館所蔵分では、1924年の『三越』は1月・4月号のみのため浴衣記事は確認できず、実質1920～1923年、1925年の浴衣記事を表にまとめた。
- 12) 東京家政研究会は石川武美により1916年9月18日に創業され、雑誌『主婦之友』は翌年3月に創刊。社名を主婦の友社に改名したのは1921年、雑誌名を『主婦の友』に改名したのは1953年である。
- 13) 創刊時の価格は15銭、発行部数は1万部であった。
- 14) 『小林孝子衣服標本資料集』資料番号2-13、40、41において、孝子が購入した記事をもとに「主婦之友を見て縫った」「主婦之友のワンピースを縫った」ことを記している。
- 15) 本章は拙稿「『主婦之友浴衣』にみる1920-1930年代の大衆の浴衣」『小林孝子衣服標本資料集』2022年2月28日発行 pp.110-113に掲載の内容に一部加筆修正を加えている。
- 16) 資料については国立国会図書館所蔵のデジタル資料を中心とし、欠号・落丁があったものについては石川武美記念図書館所蔵のデジタル資料と原本で補い調査した。尚、本論中の挿図は全て国立国会図書館所蔵『主婦之友』データベースを出典としている。
- 17) 図案式の模様について、同号では図や解説は確認できないが、翌1921年第5巻7月号では図案風として幾何学的な文様を提示し、草花文や小紋と区別している。一方『三越』（表2）では、図案風草花（1920）、西洋草花の図案化（1922）、図案式の鳥（1925）の表現が確認できる。こちらは写実性から離れ、イラスト化した様相を呈している。
- 18) 1923年第7巻7月号「職業に就く婦人」参照。
- 19) 1904年12月に、三井呉服店から株式会社三越呉服店としてデパートメントストア宣言を行い、日本初の百貨店となった。他の呉服店も後に続いた。

- 20) 三越呉服店の機関誌『三越』における図案懸賞募集の初出は第1巻第1号(1911年)における着物裾模様である。
- 21) 1925年9巻3月号、p.8
- 22) 「不景気に直面して70円前後の家計切廻しの実験」1925年第9巻11月号、pp.100-105。
- 23) 『婦人倶楽部』昭和4年6月1日号では、「浴衣についての座談会」が行われ、伊藤深水、石井小浪ほか著名人が対談を行っている。この中で、手拭地の浴衣について、30年ほど前の大阪で手拭を染める方法を利用したのが最初であること、その当時は手拭を着物にしてきたが現在(当該年)は手拭染めの技法で浴衣が染められていることに言及している。
- 24) 「日本特有の浴衣地を洋服に試みたのは本誌が最初のやうでしたが、今では外人間にも盛んに迎へられてをります。…(後略)…」(1928年第15巻6月号口絵「最新型浴衣地洋服12種」より)
- 25) 衣服標本(資料番号2-1)には、郁が当時6歳(1922年)の孝子のために、並木伊三郎の講習会に参加して子供服作りを学んだことが記されている。
- 26) 「…浴衣と云ふものは、是はデパートでも、色々な雑誌社でも、競争でこれを作っているのが現状であります。…」『婦人公論』(昭和7年7月1日)「浴衣とアッパッパ座談会」より。
- 27) 伊藤深水、藤井達吉、杉浦翡翠、高島華宵ほか12名の画家や図案家などが図案作成を担当した。

## V 色彩に対する女性の意識と流行色： 『小林孝子の衣服標本』の郁の着物を対象として

箕輪 恵枝  
MINOWA Yoshie

### 序 論

#### 第1節 研究の背景

『小林孝子衣服標本』は、日本女子大学校家政学部を卒業した小林孝子が、1940（昭和15）年4月20日～10月25日に製作したものである。この衣服標本は、全216枚からなり（森、2018、61）、1枚の葉書大のカードに、着用者のテキスタイルが貼り付けられ、解説文が添えられている。着用者は、孝子本人と祖母・両親・女中・その他の着用者・寝具等の衣服以外で構成され、孝子の場合、和服と洋服に分けられている。また、着用者が複数に亘ったものや、使用目的が変化したものもある。

着用者別に裂の年代を見てみると、孝子の和服の裂は、1903（明治36）年頃に神田の「露西亞ザラサ」で母が購入した一つ身（後にキモノスリーブに改良した子供服）のみが明治期であり、大正初期から昭和初期の年代に集中している。また、孝子の洋服の裂は、大正中期から昭和初期の通学着が中心である。祖母の裂は、1874（明治7）年の19歳の時に購入した裂から始まり、明治後期に集中している。また、父の裂は、1907（明治40）年の単衣から始まり、大正期を中心とし、1939（昭和14）年迄と期間は長い、計17裂と僅かであった。また、女中の裂は、お仕着せが中心であり、1914（大正3年）頃以外は、昭和10年代で僅か5点である。

一方、孝子の母の郁（以下郁とする）の衣服標本は、1886（明治19）年頃の一つ身の唐縮緬から1939（昭和14）年の54歳の時に三越通信販売で購入した袷まで計69点あり、幅広い年齢毎の裂が貼り付けられ、唯一、年代毎の衣服の変遷が分かる。したがって、本研究は、調査対象者を郁に絞った。

孝子の母である郁（図1）は、明治19年10月1日生まれで、高等女子師範学校を卒業後、横須賀高等女学校の教諭であったことが、孝子の『考現学より見たる一家庭 日本女子大学校家政学部卒業論文』（以下孝子の卒業論文とする）から明らかとなっている（小林、1938、157）。郁の『衣服標本』の解説文の中にも略称の「女高師」時代の裂が登場している。

現代よりも日本の女性は、天性穏に慎ましやかな風を尊重する傾向や、容姿や年齢によって派手やかさを加減する傾向にあり（關、1937、序1）、郁も色・柄には、気を配っていただろう。小林孝子の卒業論文の「半襟箱（樟木、蔦模様 金高時絵）（箱根みやげ）」の章（図2）では、「母は柄にも無く色にやかましい」「自分が気に入らないものを、単に一本の襟とて又人に贈る事はどうしても良心が許さない」と母の性格が述べられ、友人の平塚らいてう氏から結



図1 孝子の母：郁  
（孝子、1938、19）

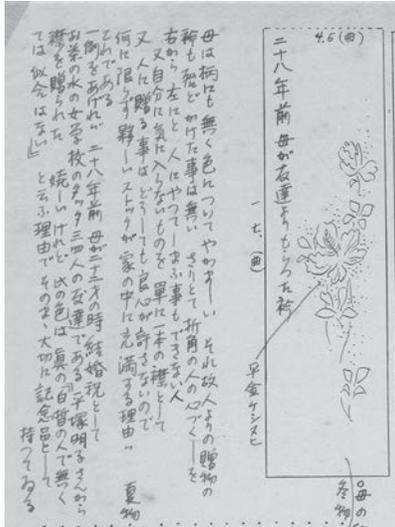


図2 小林孝子卒業論文「半襟箱」より  
(小林、1938、157)

婚祝いとして貰った襟も「この色は似合わない」とし、色について拘りが強く、気に入らぬものは身に着けず、夥しいストックが家の中に充満していることが書かれている(小林、1938、157)。したがって、郁は、婦人常識に即した色や、当時の流行色も意識して着物を購入した可能性もあり、裂を通し、時代毎の色の変遷や年齢毎の嗜好も分かるのではないかと考えられる。

## 第2節 研究目的

衣服の流行色の参考文献として多くの著者があげているのが、文部編集官であった平出鏗二郎氏が1902(明治35)年に書いた『東京風俗志』である。この中で、地色の流行について述べた日清戦争の戦前戦後の好尚の変遷がある。平出は、戦後の色地は清淡よりは濃厚なるものを尚び、黒地最も行われ、紺色これに次ぐと述べている(平出、1902、30)。また、飯島氏の『風俗画報』による地色の流行調査に

よると、1895(明治28)年頃から令嬢向き・妻女向きと年齢毎に色の区別をするようになり、明治初頭から30年間は、明治維新により洋服の導入があったものの、幕末の江戸独自の洒落で粋を好む美意識がそのまま引き継がれ(流行の色合いは)、鼠色が主流であったと結論付けている(飯島、2013、154)。

しかしながら、明治時代は、モスリン・セージ・カシミアといった毛織物や化学染料の輸入により、江戸時代独自の色合いも変化し、江戸の美意識がそのまま踏襲されていないのではないかと考えられる。

本稿では、色の拘りがあった郁の衣服の色彩に注目し、実際に庶民の着物の地色は、どのような色を選択していたのか、当時の新聞・雑誌から時代毎の色の流行や年齢毎の色彩の傾向を調査し、郁の着物地は、それらの影響が果たしてあったのかどうか『衣服標本』の色の実態と合わせながら、共通点と違いを検証する。

## 第3節 研究方法

裂の色に関する研究方法は、①文献調査、②裂の実物調査の2つの方法で行う。

### (1) 文献調査

文献調査は、「1. 年齢毎の色彩の傾向」と「2. 時代毎の流行色」の2方向からそれぞれ行う。時代毎の流行色のみならず、年齢毎の色彩の傾向を調査する理由は、『小林孝子衣服標本』の製作以前の日本の女性は、容姿や年齢によって派手やかさを加減する傾向にあり(關、1937、序1)、郁も色・柄には、気を配っていたと思われる。したがって、郁の裂の調査は、時代の流行のみならず、世間体に即した色や年齢の好みも把握しておくべきであると考えた。

「1. 年齢毎の色彩の傾向」は、小林孝子の『衣服標本』が出来上がった1年前の1937(昭和12)年5月に発刊された關美枝子著の『現代女性服飾讀本』と、1947(昭和22)年に書かれた、東京女子高等師範学校文部教官の天井陸三と東京配色研究室主宰の佐藤亘宏共著による『配色の美—服色

美装色彩一』を中心に、年齢別の色彩傾向を調査する。

「2. 時代毎の流行色」は、大学共同利用機関法人・人間文化研究機構・国立民族学博物館のデータベース「近代日本の身装電子年表 改訂版」を用い、新聞・雑誌記事から地色の拾い出しを行う。

## (2) 裂の実物調査

対象調査物は、『小林孝子衣服標本』の郁の裂のうち、乳児用の着物～少女時代～結婚前の令嬢期～若婦人時代～中年以降のもの計69点（16点は年代不明）のうち、年代が分かる下着・裏地・帯25点を除く38点が調査対象となる（表1）。

色の分析方法に関しては、日本流行色協会の40色体（有彩色35色＋ニュートラル系5色）に整理されたJCC40カラーパレット（図3）を裂（繊維調査の画面）に照らし合わせ調査を行う。JCC40は、服飾、家電、自動車業界などで多用される基本色をヒュー&トーンシステム準拠の体系にまとめ、時代毎の服の流行色調査で利用されているものである（jafca.org/publication）。



図3 JCC40カラーパレット

## 第4節 論文の構成

本論文の構成は次の通りとする。

まず、第1章では、裂の実物調査を行い、結果を述べる。第2章では、郁の衣服の着用基準の背景となるであろう「年齢毎の色彩の傾向」について『現代女性服飾讀本』と『配色の美—服色美装色彩一』と他の文献調査の結果を述べ、考察する。第3章では、衣服標本に書き込まれた解説文と当時の流行が一致するか「近代日本の身装電子年表 改訂版」の新聞・雑誌記事から流行色を調査し、「時代毎の流行色について」について結果を述べ、考察する。最後に第1・2・3章の結果をふまえながら、比較結果を述べ、郁の裂の特質を明らかにする。

## 第1章 裂の実物調査

裂の実物調査は、日本流行色協会の40色体（有彩色35色＋ニュートラル系5色）に整理されたJCC40カラーパレット（図3）を裂（繊維調査の結果画面）に照らし合わせ調査を行う。

### 第1節 JCC40の色とは

JCC40とは、JAFCA（一般社団法人 日本流行色協会）COLOR CODE 40色の略称であり、JAFCAは、1953年（昭和28）に創立し、カラー設計の指針としてその信頼性と的確性が広く認められている団体である（jafca.org/about/）。この40色は、この協会で作られた有彩色35色と無彩色系5色で構成され、展示会や市場調査での色の記録・伝達等に用いられる為、携帯に便利な名刺サイズの一覧表となっている。JCC40の各色（表2）は、婦人服、紳士服、和装、その他生活関連用

表1 郁の裂の概要

裂番号	年齢区分	裂の年代	分類（※は下着や裏地）	対象
3-1	少女	1886（明治19）年頃	母のワンピース	○
3-2		1886（明治19）年	母のワンピース	○
3-3		1892（明治25）年	母四ツ身	○
3-4		1896（明治29）年	母の袖	○
3-5		1898（明治31）年	母の袴	○
3-6		1900,1901（明治33,34）年	母の袴	○
3-7	結婚前	1901（明治34）年	母のボタ織風のネズ編單衣	○
3-8		1901（明治34）年	母の袴	○
3-9		1901（明治34）年	母の袖	○
3-10		1902（明治35）年	母の羽織（小5.通学用）	○
3-11		1902（明治35）年	母のフダン羽織の裏 ※	×
3-12		1902（明治35）年	景品母のドテラーボロ	○
3-13		1903,1907（明治36,40）年	母の雨合羽	○
3-14		1905（明治38）年	母の單衣	○
3-15		1905（明治38）年	母の黒纏子と腹合せにした帯 ※	×
3-16		1905（明治38）年	母の袴	○
3-17		1905（明治38）年	母仕事着（擦染前）	○
3-17		1905（明治38）年	母仕事着（擦染後）	○
3-18		1905（明治38）年	曾祖母手織の緋編→母の袴	○
3-19		1906（明治39）年	母の救生羽織→祖母の着物の胴着	○
3-20	著夫人	1907（明治40）年	母の羽織	○
3-21		1907（明治40）年	母の單衣（阿波シボ）→カーテン	○
3-22		1907（明治40）年	母の綿入長胴着→孝子の人形着物 ※	×
3-23		1907（明治40）年	母（新婚旅行着）→祖母の長襦袢	○
3-24		1907（明治40）年	母の袴（裾尾綿入）→祖母の下着	○
3-25		1908（明治41）年	母の單衣（新お召）	○
3-26		1908（明治41）年	母の緋紋江戸襦	○
3-27		1909（明治42）年	母の着物20年→炬燵下掛け等々	○
3-28		1910年頃（30年前）	母の袴	○
3-29		1912（明治45）年	母の單衣	○
3-30		1912（明治45）年	母の袴（学校着）	○
3-31		1912（明治45）年夏	母の單衣（サツマちぢみ）	○
3-32		1914（大正3）年	母の半コート <small>の裏</small> ※	×
3-33		1914（大正3）年	母に浴衣→孝子のネマキ ※	×
3-34	前期中年	1916（大正5）年	母に浴衣→孝子のネマキ ※	×
3-35		1916（大正5）年頃	母に浴衣→孝子のネマキ ※	×
3-36		1918（大正3）年	紙布帯側 ※	×
3-37		1920年頃（母35歳）	母の羽織→ツギキレ	○
3-38		1920年頃（母35歳）	母の單衣	○
3-39		1920（大正9）年	母の單衣	○
3-40		1923（大正12）年大震災後	母の浴衣 ※	×
3-41	後期中年	1928（昭和3）年初夏	母のセルの單衣	○
3-42		1930（昭和5）年夏	母の喪服の帯 ※	×
3-43		1931（昭和6）年	母のゆかた ※	×
3-44		1931（昭和6）年？	母のゆかた ※	×
3-45		1931（昭和6）年？	母のゆかた ※	×
3-46		1933（昭和8）年	母の單衣（結城ちぢみ）	○
3-47		1940（昭和15）数年前	母の夏羽織（染抜の紋付）	○
3-48		1937（昭和12）年秋	コート生地 表	○
			コート生地 裏 ※	×
3-49		1937（昭和12）年	母の紋付 袴羽織 表	○
	母の紋付 袴羽織 裏 ※		×	
3-50	1939（昭和14）年	母の袴	○	



図4 JCC40マトリックス

表2 JCC40リスト記号と色名

PK	1	ローズピンク	GN	2	ライト グリーン
	2	ピンク		3	スモーキー グリーン
	3	グレイッシュ ピンク		4	パイン グリーン
RE	1	赤	BG	5	ダーク グリーン
	4	オールド ローズ		1	ピーコック グリーン
	5	ワイン		4	ターコイズ
OR	1	オレンジ	BL	1	青
	2	ライト オレンジ		2	スカイ ブルー
BR	1	茶色		3	サックス
	3	ページュ	4	ダル ブルー	
	4	黄土色	5	ネービー ブルー	
YE	5	こげ茶	PU	1	パープル
	1	黄		2	ライラック
	2	クリーム		3	ふじ色
YG	3	こしょう色	CG	4	モーブ
	1	黄緑		1	アイボリー
	3	モスグリーン		2	白
GN	4	カーキ	NE	3	グレー
	5	オリーブ		4	ダーク グレイ
	1	緑		5	黒

品に共通して多く活用されている基本色で、JCC40の記号は、色み（色相）の記号と色調番号で成り立っている（前掲）。横の列に色相、縦の行に色調をとって配置しているJCC40マトリックス（図4）は、各色相、色調ごとに、もっとも多く用いられる色だけを表している。

## 第2節 調査方法と結果

### （1）調査方法

調査方法は、各裂の地色（繊維調査の結果画面）とJCC40カラーパレット（図3）の色を比較し、地色に該当する色相の記号（表2）と色調番号（1 = さえた、2 = 明るい、3 = 灰みの、4 = にぶい、5 = 暗い）を確認し、近似色を記録する。

### （2）調査結果

JCC40カラーパレットを用いた色の調査結果は、表3の色相・色調別の集計と表4の裂別の地色に纏めた通りである。色数が多いのは、無彩色であり、順にNE5の黒が11裂、次いでNE4の灰色系が4裂、NE3が2裂の計6裂である。白系のCGは2裂、NE2は1裂の計3裂であった。この結果から、無彩色は、全体の38裂に対し、約半数を占めていた。また、ピンク系のPKやオレンジ系のORの地色は0であったのに対し、赤系のREは5裂あった。同じく紫系のPUが5裂、茶色系のBRが3裂、次に青系のBLが2裂であった。また、緑系のGNと黄系のYG、YEは1裂で青緑系のBGは0と少ない結果であった。

色調は、「5 = 暗い」が最も多い19裂、次いで「4 = にぶい」が10裂であった。「3 = 灰みの」は5裂で、「1 = さえた」が3裂であった。また、「2 = 明るい」は1裂だけで、色調の「1 = さえた」は、郁の裂の明治期の前半（少女期）のみであった。また、色調の「3 = 灰みの」色調は、4裂中3裂が明治30・40年代の結婚前と若夫人時代に含まれていた。また、「4 = にぶい」、「5 = 暗い」の色調はどの時代も含まれており、各年代に占める割合は多い。

各年齢区分に関する色の結果については、第2章の年齢毎の色彩の傾向でより詳しく比較するこ

表3 JCC40カラーパレットを用いた色の調査結果（色相色調別の集計）

		色相											
色調	No.	PK	RE	OR	BR	YE	YG	GN	BG	BL	PU	CG/WE	色調合計
	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	3
	2	0	/	0	/	0	/	0	/	0	0	1	1
	3	0	/	/	0	1	0	0	/	0	2	2	5
	4	/	0	/	0	/	1	1	0	1	3	4	10
	5	/	4	/	3	/	0	0	/	1	/	11	19
色相合計		0	5	0	3	1	1	1	0	2	5	20	38

ととする。

## 第2章 年齢毎の色彩の傾向

### 第1節 『現代女性服飾讀本』より

#### (1) 『現代女性服飾讀本』とは

關美枝子著の『現代女性服飾讀本』は、小林孝子の『衣服標本』が出来上がった3年前の1937（昭和12）年5月に発刊された。關は、数年後のオリンピック競技大会に向け、外来客が身近な日本人の服飾を見ることによって、日本人の情操や美的才能を推測し、情的生活が如何に豊富かを無言に、単的に世界に印象付ける契機として、服装の正しい展開を図った（關、1937、序5）。關は、年齢の割に若く見える人や落ち着いて見える人と様々である為、色に対して神経質になり過ぎず、見た目の年齢を標準にし、和服の色調をいかにして選ぶべきか第1節の「年齢と柄」で述べている（前掲、2）。本稿では、この第1節を中心に年齢区分別を少女時代、16・17～20歳前後の結婚前の女性、凡そ30歳未満の既婚である若夫人時代、30歳以後40歳前後の前期中年、後期中年以後とし、分類をすることとした。

#### (2) 年齢別の色の特徴

表5は、年齢別の色の特徴を『現代女性服飾讀本』より一部抜粋し、5つの区分に分けたものである。

關によると、少女時代の特徴は、友禪系統の模様、はっきりした緋、紺模様類、粗い格子縞等の大柄が適すが、柄よりも色の若々しさが求められる（關、1937、2）。織物の色調がくすんでいる場合は、帯、三尺、裾廻し、羽織紐を派手に可憐にして、調子を取り、半襟は明色系統の鮮色に大体定め、品格を保つため、あまりいじらないようにする（前掲）。

一方、20歳前後迄の特徴は、子供っぽさと浅薄さと地味な沈鬱さえ避ければ、自由であり、平常着用の色地としては、浮かない程度の派手さが許され、柄の白っぽい時、派手に明るい時、大きい時は、地色を黒系統が落ち着いた濃色にするとよい（前掲、3）。また、盛装用の色地は、美・品格の点から外れなければ殆ど自由となっている。

表4 JCC40カラーパレットを用いた色の調査結果(裂別の地色)

裂番号	裂の年代	年齢区分	分類	地色
3-1	1886(明治19)年頃	少女	母のワンピース	RE1
3-2	1886(明治19)年		母のワンピース	RE5
3-3	1892(明治25)年		母四ツ身	CG1
3-4	1896(明治29)年		母の袖	PU4
3-5	1898(明治31)年		母の袴	BR5
3-6	1900,1901(明治33,34)年		母の袴	RE5
3-7	1901(明治34)年	結婚前	母のボタ織風のネズ縞単衣	NE5
3-8	1901(明治34)年		母の袴	NE4
3-9	1901(明治34)年		母の袖	NE4
3-10	1902(明治35)年		母の羽織(小5.通学用)	NE5
3-12	1902(明治35)年		景品母のドテラ→ボロ	CG1
3-13	1903,1907(明治36,40)年		母の雨合羽	RE5
3-14	1905(明治38)年		母の単衣	PU3
3-16	1905(明治38)年		母の袴	PU4
3-17	1905(明治38)年		母仕事着(捺染)	NE3
3-17	1905(明治38)年		母仕事着(捺染)	YG4
3-18	1905(明治38)年		曾祖母手織の絹縞 母の袴	BR5
3-19	1906(明治39)年		母の教生羽織	BR5
3-20	1907(明治40)年		若夫人	母の羽織
3-21	1907(明治40)年	母の単衣 阿波シボ → カーテン		BL5
3-23	1907(明治40)年	母(新婚旅行着)→祖母の長襦袢		NE3
3-24	1907(明治40)年	母の袴 梅尾袖綿入 →祖母の下着		RE5
3-25	1908(明治41)年	母の単衣(新お召)		NE4
3-26	1908(明治41)年	母の縞紋 江戸襦		NE5
3-27	1909(明治42)年	母の着物20年 →炬燵下掛け		BL4
3-28	1910年頃(30年前)	母の袴		NE5
3-29	1912(明治45)年	母の単衣		YE3
3-30	1912(明治45)年	母の袴(学校着)		NE4
3-31	1912(明治45)年夏	母の単衣(サツマちぢみ)		NE5
3-37	1920年頃(母35歳)	前期中年	母の羽織→ツギキレ	NE5
3-38	1920年頃(母35歳)		母の単衣	NE5
3-39	1920(大正9)年		母の単衣	NE2
3-41	1928(昭和3)年初夏	後期中年	母のセルの単衣	NE5
3-46	1933(昭和8)年		母の単衣 結城ちぢみ	GN4
3-47	1940(昭和15)年の数年前		母の夏羽織(染抜の紋付)	NE5
3-48	1937(昭和12)年秋		コート生地 表	PU4
3-49	1937(昭和12)年		母の紋付 袴羽織 表	NE5
3-50	1939(昭和14)年		母の袴	PU3

表5 年齢別の色の特徴（箕輪、2022、115）

少女時代	結婚前 16・7～20歳前後	若夫人 30歳未満の既婚	前期中年 30歳以後40歳前後	後期中年以後
色の若々しさ	派手向きのもの	上品さ落ち着きの中にある若々しさ	渋みを存分に生かす	服飾に対する関心が張りを失う
大柄が適す。  単純な縞は彩色、縞の大きさが地味ではいけない  柄より色の若々しさが必須事項。	浮付かない程度の派手向きのもの  明快、派手の気分をかき消さない  調和美、対照美、欠かない範囲なら相当派手でよい。	赤系統を避ける  派手を表す場合、茶、紺、鼠に明るい華さを加味。  同系統に於いて濃淡を対照。	柄の新規よりも色調に表現する渋み  生地を持つ光沢やさびを更に生かす生地の感触、織方  古代模様、伝統の縞、線／曲線	生地の感触に託す  沈鬱にならない渋好みの色を巧み

若夫人になると、結婚前の若々しさと華やかさより、上品さと落ち着きの中にある若々しさが求められ、生の赤系統を避け、派手を現す場合は、茶、紺、鼠に明るい華やかさを加味したもの、同系統に於いては濃淡で表現する（前掲、4）。

30歳以後40歳前後の前期中年の特徴は、あえて渋みを表現し、關は「よく地味向けの中柄の平常着用によい柄がないと不平を耳にするが、本来中柄は紺、縞、其他小さい總模様のなもの（訪問用のもの、又は趣味の絞りやペインティックス、刺繍物は例外とする）に限られる為、柄や色調に拘束されるから、單に反物として見て、色から構図から配色から、一見するなり面白くてたまらないと言う柄は極く稀なのである。」と述べている（前掲、4-5）。この頃の服装の着眼点は、柄の新規よりも色調の渋みに面白さがあり、素材や質感による工夫が求められる。

後期中年以後の特徴は、「人によって服飾に対する関心を失い、身じまいが無精になりがちであるが、生地の感触に託し、憂鬱にならない渋好みの色を合わせることで、品格と重みに富んだ高雅な姿を完成して欲しい」と關は述べている（前掲、5）。

### （3）調査結果との比較

年齢別の特徴と実物調査との比較結果は表6の通りである。

表6より年齢別順に見てみると、少女時代は、赤系統 RE が3裂と半数を占めている。結婚前では、無彩色の黒・灰 NE 3～5 が5裂と半数を占め、RE は1裂である。また、配色数は結婚前が6種類と一番多く、派手向きであれば何をしても自由である年頃の影響であろうか。若夫人時代でも、無彩色の黒・灰 NE 3～5 が7裂と、結婚前の時代よりも割合が多い。また、青系統の BL は、若夫人時代に2裂ある。一方、「服飾に対する関心が張りを失う」後期中年以後では、無彩色の黒 NE 5 は、2裂と少なく、意外と緑系 GN 4 や青系 BL 5、紫系の PU 3・PU 4 の有彩色の方が多い結果となった。

資料と比べてみると、郁の一つ身であった資料 No.3-1（図5）と No.3-2（図6）の裂の地色は、それぞれ RE 1（赤）と RE 5（濃い紫みの赤）である。資料 No.3-2の裂は、表5で示した通り、桃・赤色を中心とした大柄の花模様となっている。また、資料 No.3-3（図7）は、CG 1のアイボリー地のもので、1892（明治25）年、郁が7歳の時に購入した四つ身の裂である。

表6 年齢別の特徴と裂との比較結果

年齢別	少女時代	結婚前	若夫人	前期中年	後期中年以後
		16・7～20歳前後	30歳未満の既婚	30歳以後40歳前後	
実物調査	RE 1、RE 5 × 2	RE 5	RE 5	NE 2	GN 4
	BR 5	BR 5 × 2	YE 3	NE 5 × 2	BL 5
	PU 4	YG 4	BL 5、BL 4		PU 3、PU 4
	CG 1	PU 3、PU 4	NE 4 × 2、NE 3		NE 5 × 2
		CG 1	NE 5 × 4		
		NE 3 × 1、 NE 4 × 2			
		NE 5 × 2			
	計 6 裂	計12裂	計11裂	計 3 裂	計 6 裂

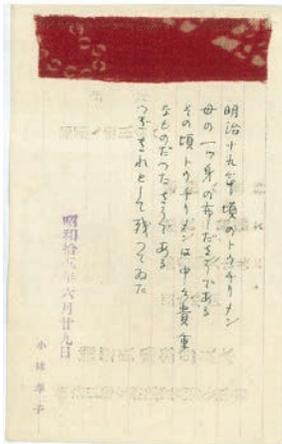


図5 No. 3-1 一つ身



図6 No. 3-2 一つ身

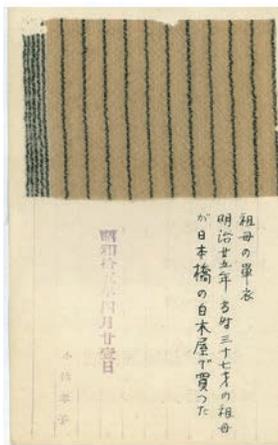


図7. 8. 9 No. 3-3 日本橋白木屋で購入した郁(左)と家族(中央・右)の裂

この裂は、郁が百日咳の後、大磯に転地する時に着る為、日本橋の白木屋で家族分購入したセルの裂である（図7、8、9）。地色については第3章の「時代毎の流行色について」で述べるが、地色は家族揃いの色である。一方、この裂の縞模様用いられる経糸は、郁の両親が無彩色の黒であるのに対し、郁の裂は、「単純な縞は彩色、縞の大きさが地味ではいけない、柄より色の若々しさが必須事項」と少女時代の特徴である赤や青を用いた色の若々しさが表現されていることが分かる。

結婚前の二十歳前後迄の年齢の特徴は、表5の通り「浮付かない程度の派手向きのもの」が求められる。衣服標本の資料No.3-8（図10）は、1901（明治34）年頃、郁16歳位の時に曾祖母が織り上げた袷である。一見すると落ち着いた濃い灰色地の縞柄に見える。経糸には、赤・白・黄色、緯糸には濃い灰色が使われ、赤色と濃い灰色の経縞のようにも見えるが、縞割りの赤と赤の間の色には、白と黄色を1本ずつ配列した、細かい作業を行っている（図11）。また、茶や黄を経糸に用い、「浮付かない程度の派手向きな」縞柄のデザインである。縞割りにおいて一本ずつ色を変えることは手間のかかることであるが、手元にある糸を無駄にせず、年頃の女性に合せたデザインであったに違いない。

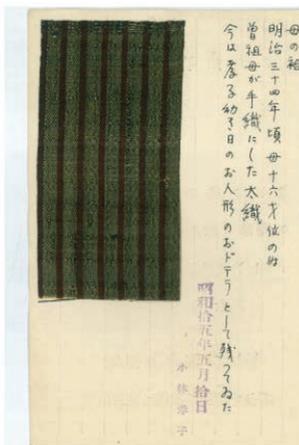


図10 No.3-8 曾祖母の手織袷



図11 No.3-8 20倍拡大図

また、資料No.3-18の地色は、茶系統BR5であるが、色糸を4色（RE4、YE2、YG3、PU1）も使い、紫（PU1）を中心とした「明快、派手の気分をかき消さない」縞柄となっている（図12）。資料No.3-14は、20才の郁が仲良しの友達とお揃いで作った1905（明治38）年頃の郁の単衣で、地色がPU3の青がかった紫の裂である（図13）。資料No.3-16も同様の20才の袷で、元は紫地であったもので同じく矢筈である。こちらは、縞模様は目立つものの、地色は後に“ネズの目引”をした為、派手向きではなく、どちらかと言えば、上品さ落着きの中にある若々しさに該当すると思われる。

一方、30歳未満の既婚者の若夫人の年齢の特徴は、「赤系統を避け、派手を表す場合、茶、紺、鼠に明るい華さを加味したもの」が求められていたが、郁の裂の場合は、茶、紺、鼠、黒、胡椒色があり、結婚前の裂よりも更に落ち着いた色調となっていることが分かる。一例をあげると、資料No.3-23（図14）は、1907（明治40）年に松本の樽武という店で購入し、新婚旅行にて着用したものである。これは、NE3の鼠の地色にPU1の紫・NE2の白の縞で、同系統で濃淡を対照に表現したものとなっている。資料No.3-24（図15）は、RE5の赤紫の地色に経・緯糸共にYE1の黄

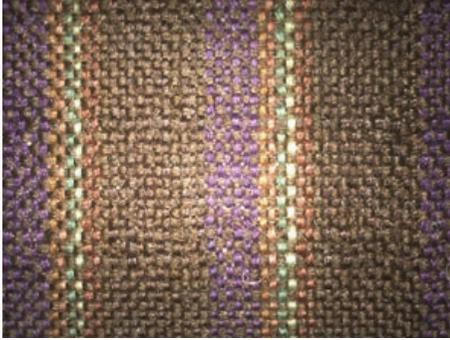


図12 No.3-18 曾祖母手織の絹縞 (20倍拡大)



図13 No.3-14の単衣



図14 No.3-23 新婚旅行着用 20倍拡大図



図15 No.3-24 桐尾紬 20倍拡大図

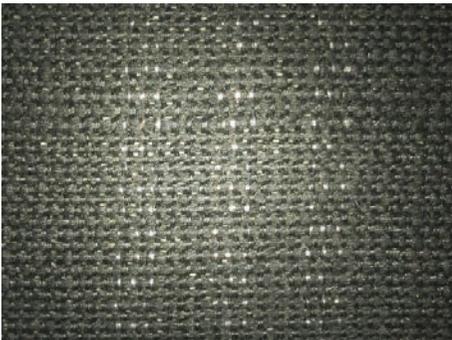


図16 No.3-37 羽織 (縞)

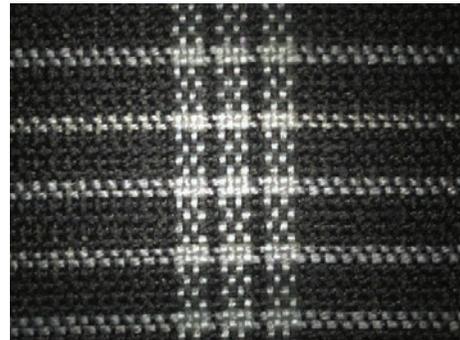


図17 No.3-38 単衣 (格子)

色を入れ、明るい華やかさを加えている。

30歳以後40歳前後の前期中年の特徴は、あえて「渋みを表現する年齢」である。關は「本来中柄は緋、縞、其他小さい總模様のなものに限られる為、柄や色調に拘束されるから、単に反物として見て、色から構図から配色から、一見するなり面白くてたまらないと言う柄は極く稀なのである」と述べ(關、1937、4-5)、このように図16・17は、縞・格子模様であり、色調に渋みを持たせた伝統的縞・格子柄である。

後期中年以後の特徴は、人によって服飾に対する関心を失いがちである。關は、「生地感触に託し、或は生地の光澤、節のさま等に細やかな注意を拂ひ、之に憂鬱にならない渋好みの色を合わ

せる」と述べ（前掲、6）、後期中年全盛期の高雅な姿が完成される。資料No.3-50（図18）は、昭和14年に郁が三越通信販賣で買った袴であるが、「54才ともなればこれと云うガラも無くなる」というコメントから他に選択肢が無く購入したことが見て取れる。この單衣は、灰掛かる紫地PU3の匹田で、一見すると非常に渋い灰色に見えるが、拡大すると紫地であることが分かる。



図18 3-50 袴 20倍拡大図



図19 3-46 結城ちぢみ 20倍拡大図

一方、資料No.3-46（図19）は、48才の時に横須賀のデパートさいかやで購入した郁のお気に入りの裂である。この裂は、「結城ちぢみ」という名がついている。結城ちぢみは、絹織物の一種であり、結城紬の中でも経糸は真綿から紡いだ手紡糸を用い、緯糸に手紡ぎ糸の強撚糸を使用したもので、織上後は、簡単な繕取を行う（近藤、1951、1298）。結城紬の歴史は古く、常陸紬の名から城主結城氏の名に因み1602（慶長7）年に改名後、信州上田の染色技術、柳条の織法を導入して隆盛を極め、大正初期には縮織紬の製織に成功している（上村・辻合・辻村、1978、199）。国の重要無形文化財の指定を受けた最高級品としても知られている。この資料No.3-46（図19）の当時の「結城ちぢみ」は、結城紬の新しい改良製品で消費者に注目されていた可能性もある。この裂は、生地が感触が良く、且つ一見すると黒地に見えるが、様々な強撚糸の絹糸を使った渋味がある。關が述べたように、感触と渋み、そして新しい着物地によって郁は選んだ可能性もある。しかし、この裂に対して孝子の解説文には、「ワカメか昆布を着ていると云ふ感じがしておかしい」と、娘の孝子の辛口の意見が述べられている。これらから、生地選択の優先順位が、「生地の感触」か「デザイン性」なのかが、年齢によって異なっていることが分かる。

## 第2節 天井陸三・佐藤亘宏共著『配色の美—服色美装色彩』より年毎の好み

第1節では關の著書から「年齢毎の色の傾向」を述べた。同様に、天井らは年齢毎の色の好みについて述べている。これらを比較検証し、郁の裂との共通点を明らかにする。

### (1) 『配色の美—服色美装色彩—』とは

『配色の美—服色美装色彩—』は、1947（昭和22）年に、東京女子高等師範学校文部教官の天井陸三と東京配色研究室主宰の佐藤亘宏によって、「服色、装身、美装、美化を求める若い女性一般の人々が一歩進んで、美の修練として配色を学ぶ」為にかかれたものである。これらは、服飾の配色、服飾小物の配色、建築・家具、季節の配色のみならず、家庭における役割や年齢における好みの色と各部門に分けて、具体的な配色例を示している。

天井らは「いうまでもなく老若男女いずれの服装も年齢に感じた色彩に意を用いねばならぬこと

は勿論であるが、殊に若い女性の美装にとって服色の調和は軽視出来ない課題であって、若い人には若い人独特の色彩があり、乏しさのみをかこたず、簡素の中にも工夫して、四季の変化による春の色、夏の色、秋の色、冬の色を考え、よくその時々季節の感情を持った服色にわが身を整えることを心がけていただきたいものである。」と述べている（天井・佐藤、1947、11）。年齢と着物の配色に関しては、図20を参照した。

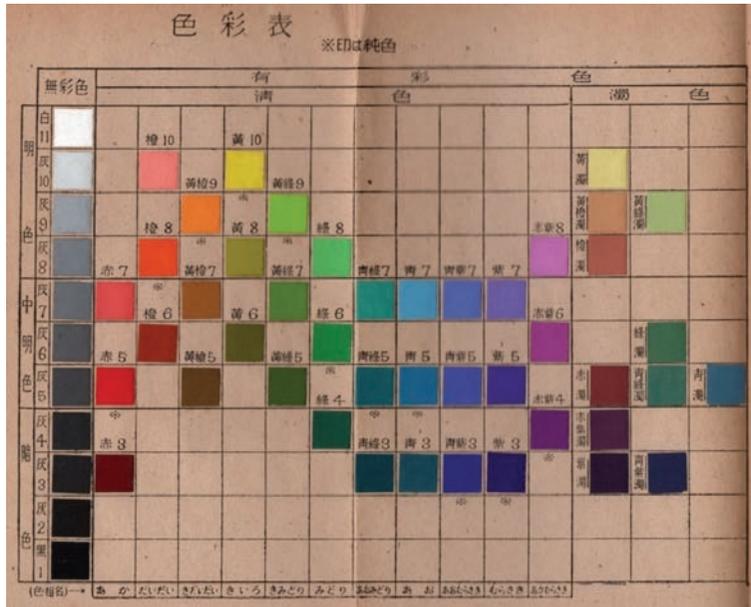


図20 色彩表（天井他、1947、155）※は純色

## (2) 年齢と着物の柄の配色

天井らは、着物の地色のみならず、着物の柄との調和を唱え、年齢別雰囲気の色の一組合せの一例を述べている（前掲、30-31）。表7は、年齢と着物の柄の配色の特徴を一部抜粋し、3つの区分に

表7 着物の柄の配色例（天井・佐藤、1947、30-31）

年齢区分	色		雰囲気
	生地	模様	
若向き	赤	灰9・黄濁	若々しい・派手
	赤紫	黄・黄8	華やか
	赤紫	赤紫8	甘い
中年向き	紫	赤紫8・橙10	明るい
	緑4	黄緑7・黄8	落ち着き
	青3	青7	いきいき
年輩向き	紫濁	橙濁	渋味
	青緑3	青紫7	落ち着き
	青濁	黄緑5・灰9	渋味

分けたものである。年齢区分は「若向き」「中年向き」「年輩向き」の3つの区分に分けられている。尚、3つの区分の年齢は明記されていない。

着物の柄は、大柄なものは若向きに適し、細い縞や、散らし花の小柄のものは中年向きである（前掲、28）。縞模様の場合、明暗が極端な配色は、派手な感じを与え、若向きに適し、暗い色同士は渋味と落ち着きがあり、中年に適し、明るい色同士は配色に明度差がなく、縞効果が薄い為、静かな調子となる（前掲、29）。一方、花模様では、地色が暗く花の色が明るい場合は、目に付く柄となり、地色より花の色が暗い場合は、落ち着いた柄で、同じ色合いの系統の柄も同様に静かな落ち着きを持つが、朱と緑といったように色合いのかけはなれた系統は、派手な感じを与える（前掲、29）。

### （3）年齢による好みの色

年齢による好みの色は、天井らは「好みの色は年齢、性別、趣味、教養、環境等によって千差万別であるが、またそれらの条件によって共通的な好みの傾向を見出すことも出来る。年齢についていえば、児童は赤・黄・黄緑・緑青等の彩度の高い色、刺激的な色や白を好み、年若い女性は明るい色、淡い色を多く好み、老年になるにしたがって濁色系の灰色に近い色彩を好むようになる」とし、男性は無彩色が多いのに対し、女性は赤・黄・青・紫等の有彩色を服色としている（前掲、54）。表8に年齢による好みの色の一例を抽出し、結果と共に表に纏めた。

また、女学生の着物の好みの配色は、紫を中心とし、白との組み合わせは、「上品」、灰8との組み合わせは「しとやか」、赤紫8との組み合わせは「つつましい」雰囲気となる（前掲）。

表8 好みの色と実物調査結果の比較

年齢区分	年齢	好みの色の一例	該当裂No.
幼児	3～6歳位まで	赤・黄・橙・黄緑	3-1、3-2
児童	7～9歳位まで	赤7・黄・黄緑・青緑7	3-3
	10～13歳位まで	黄・赤・橙・青緑・緑・赤紫・白	3-4（藤紫×）
女学生	14～17歳位まで	青7・赤7・赤3・紫7・橙10・白	3-6、(3-8、3-12)
若い人	18歳～20歳位まで	赤7・赤3・緑4・橙10・黄濁・青7	3-13、3-17
	21歳～25歳位まで	青紫7・赤3・青緑3・紫	3-16、3-24
	26歳～35歳位まで	青紫3・赤3・緑4・紫	(3-29)
中年婦人	—	青紫濁・紫・黄緑5・灰7	3-46
老年婦人	—	黒・灰4・紫濁・青濁	3-47、3-48、3-49

### （4）調査結果との比較

年齢による好みの色と実物調査の結果との比較は表8の通りである。実物調査の色名は、先に述

べた JCC40の色記号を用いる。

郁の裂と表8を比較すると、幼児期の場合、資料 No.3-1 (図5) と No.3-2 (図6) は、地色が赤系統である。また資料 No.3-2 の地色以外の模様は、赤 RE1 や黄色 YE1 や黄緑 YG1 が使われている。また、表7の着物の柄の配色例と比較すると資料 No.3-2 は、赤生地に模様が灰・黄濁の「若々しい・派手」な雰囲気であることが分かる。

児童期 (7~9歳) では、資料 No.3-3 (図7) が赤7や青緑7に近い色の経縞柄の構成となっている。また、児童期 (10~13歳位) では、地色や模様に該当する裂は無かった。資料 No.3-4 は、元は藤紫であるため、表8の赤紫とは若干異なる。

女学生期 (14~17歳位) は、「第4節 明治期の流行色の詳細と裂との比較」で述べる資料 No.3-6 の袴が赤3に該当し、青7・赤7・紫7・橙10の裂は無く、灰や黒の無彩色が主であった。ただし、資料 No.3-12の郁が譲り受けた「帝室技藝員の熊谷直彦先生の画塾の馬杉青琴氏が景品で貰ったもの」の裂は、地色が白系の CG1 であり、模様の色では、経糸に PK3、BL3、CG1、YE1 が用いられ、YE1 以外は「好みの色」の青7・赤7・白に該当すると思われる。

年齢区分の若い人 (18~20歳位) では、資料 No.3-13の女高師時代の雨合羽が RE5 で赤3に該当するが、他は該当しなかった。資料 No.3-14は、地色の色調が4 = にぶい BL4 であり、明度のやや高い若い人の好みの青7とは異なった。この年齢においては、児童迄に好まれた橙や黄色が復活している点が興味深い。資料 No.3-17の地色は、若干異なるが黄緑系の YG4 であり、図20の色彩表にある黄濁の明度が低くなればより近い色となるであろう。若い人 (21~25歳位) では、資料 No.3-24の郁22才の時の榎尾袖の綿入れが、赤系の RE5 であり、「年齢による好みの色」の赤3に該当する。また、この裂は、「表7の着物の柄の配色例」にある若向きの赤紫地と模様色の黄が一致する。この雰囲気は「華やか」である。また、資料 No.3-16は、郁20才の袷であったが、解説文によれば「元は紫地であった」と記述があり、「年齢による好みの色」の紫に該当するものと思われる。若い人 (26~35歳位) の場合、資料 No.3-29のメンセルの単衣の地色は、黄色系の YE3 で異なるが、縞に用いられる経糸に該当する色があった。色糸は、5色用いられている内の緑系の GN3 と青系の BL5 が、「年齢による好みの色」の緑4 と青紫3 に該当する。その他の裂は、灰や黒の無彩色で該当色がなかった。

年齢区分の中年婦人では、資料 No.3-46の結城ちぢみの単衣が、地色が緑系の GN5 であり、表8の「年齢による好みの色」の中年婦人の黄緑5より若い人の好みの緑4に該当する。この裂の緯糸に用いられている色糸は、オレンジ系の OR2、青系の BL3、紫系の PU1、PU3、灰色系の NE4 で、このうち表8の「年齢による好みの色」の紫が該当し、NE4 は灰7より灰6に近い色である。

老年婦人では、表8の「年齢による好みの色」は黒や中年婦人より明度の低い灰4、紫濁・青濁であるが、該当する資料は、No.3-47のフレッシュウールの夏羽織の黒の NE5 であり、No.3-49の紋付袷羽織の黒の NE5 である。また、資料 No.3-48のコートは地色が紫系の PU4 で図20の紫濁に近い色であった。

### 第3節 その他の年齢に関する文献

幸田文 (1904年〈明治37年〉-1990年〈平成2年〉) は、1904 (明治37) 年の日露戦争中に生まれた東京下町の主人公 (以下ルツ子と述べる) が、着物を通して成長する姿を、長編小説『きもの』で描いている。特に幼少期に注目した。

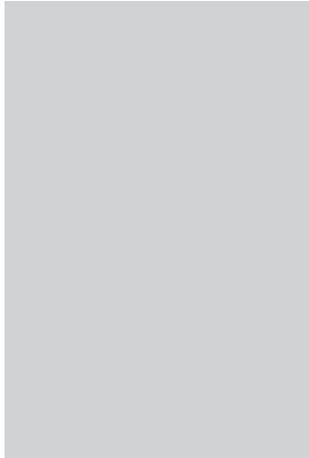


図21 幸田文 (54歳)  
(幸田、2009、240)

まず、幼少期の毛織物メリンスとセルの話がある。ルツ子は、流行の軽く、しなやかで、模様も色彩も美しいメリンス友禪が着心地面で合わず、季節外れの濃紫の地色の紋羽二重の羽織を着用する(幸田、1965、14)。母は、「少し我慢して、なれるようにしないと、一生メリンスが着られないことになり、楽しみが少なくなる」と諭したことから(前掲、15)、当時メリンスを着用することが一種ステータスであったことが分かる。また、ルツ子の母は、流行りはじめのセルを、めずらしく家族分新調する。ちょうど『孝子の衣服標本』にある郁の裂 No.3-3 (図7、8、9) のようだ。幸田は、「5月の日にさっとセルを着るのは、大層気持ちよさそうに見え、またおしゃれな贅沢とされていた」と述べている(前掲、34)。母がルツ子の為に選んだセルは、うすい草色の地に、濃い緑で十の字緋である(前掲、34)。ちょうど「表8 好みの色と実物調査結果の比較」にある児童10~13歳に該当する。図7とは色も

模様も異なるが、爽やかな薄青の縞が引かれている点では、ルツ子の母と郁の母のセルのイメージは同様ではないだろうか。

近所の呉服屋に着物を新調する為、親子で出掛けたルツ子は、店の人が勧める赤い大きな柄が多い子供用のひと山や、「ほってりした菊の花柄」や「流れにおしどり」には興味がなく、紫矢緋のようなくっきりしたものを求めたが、母は、まだ早いと諭している(前掲、44)。ちょうど『孝子の衣服標本』にある図6のような着物は好みではなく、図13のような矢緋が好みであった。また、ルツ子は、羽二重の白茶の地に、濃紫と草色と代赭の格子縞を選ぶと、親族に「おませね、赤くないものを好くなんて」と言われている(前掲、50)。これらの呉服屋や親類の発言からは、「児童が赤を選択する」のが慣習であったことを示す。

女学校時代、友達の着物は、花の赤く織り出されたもの、紫に白の明るい緋などが多く(前掲、69)、ルツ子も地味ながらも主張出来る紺地に白の市松(所々に赤の配色)の木綿緋を祖母に新調してもらった(前掲、71)。郁の資料 No.3-9 は、16歳(御茶ノ水4年生)の時に松屋呉服店で買った米琉であるが、これは濃灰地に白の花菱風緋文で所々にカーキ色の配色が施されている。同年、購入した資料 No.3-10は黒地に茶色と白の格子柄の羽織、資料 No.3-8の地色は、灰色に赤を配色した曾祖母の手織の縞柄である。これらは、地味な地色に主張ある柄の着物である。

このようにルツ子の着物を通した成長を見ると、幼少期は、年齢に沿った着物を着せようとする周囲と、年上の姉の影響を受け年齢より上の地色を好んで着ようとする主人公の葛藤が見て取れ、色の選択においては、社会的影響が少なからず存在すると考えられる。

#### 第4節 年齢毎の色彩の傾向のまとめ

第1節『現代女性服飾讀本』・第2節『配色の美—服色美装色彩』の年齢別の色彩調査の結果、第1節で述べた「少女時代」の通り、郁の裂は、赤系統のREや白系統のCG1が用いられ、色の若々しさが表現されている。年齢による色の選択が分かる図7・8・9では、同じ地色であっても、縞模様の配色が異なり、郁の裂は子供らしさが際立っている。一方、「結婚前」では、地色は地味であっても、明快・派手の気分をかき消さない矢緋や花菱緋、太い縞や格子柄等、模様の工夫や配色の工夫がなされている。「若夫人時代」は、色調が落ち着いたものが多く、地色は、無彩色が多い。

同系色で濃淡を対照に現した資料 No.3-23 (図14) や、赤紫を地色とし経・緯糸共に YE1 の黄色を入れ、明るい華やかさを出した資料 No.3-24 (図15) があつた。特に資料 No.3-24 (図15) は、「表7 着物の柄の配色例」で示した若向きの赤紫を生地とし、模様には黄色を配する華やかさに一致する。

一方、中年以後に関しては、「表7 着物の柄の配色例」に該当するものは見当たらない。服飾に対する関心が張りを失う年齢であるが、意外にも郁の裂は、無彩色だけでなく、有彩色緑系 GN4・青系 BL5・紫系 PU3・PU4 が含まれており、着物に対する関心が高かつた。「表8の好みの色と実物調査結果」の比較によると、中年婦人は、青紫濁や紫・黄緑5・灰7を好み、老年婦人は、黒・灰4の無彩色のみならず、紫濁・青濁が好まれている。「結城ちぢみ」は、地色が緑系の GN4 で、緯糸には橙系 OR2・青系 BL3・紫系 PU1・PU3・灰系 NE4 と5色用いられ、これらの好みにも一致する。結城ちぢみは、生地の感触が良い高級品でもあるが、孝子が「デザイン性」に異を唱えているように年齢により価値観は異なっていることが明らかとなっている。

このように、『現代女性服飾讀本』と『配色の美—服色美装色彩』を郁の裂と比較すると、年齢別の特徴と凡そ一致している。しかし、第3節で述べたように、年齢と好みは、必ずしも一致するとは限らない。次に流行色との関係性を確認することとする。

### 第3章 時代毎の流行色

#### 第1節 流行色の資料について

流行色の調査には、「新聞記事」「雑誌記事」を用いた。高橋は、「新聞流行記事の特色であり利点であるのは、まず、第一にその広域かつ多様な取材力である」と述べている(高橋、2005、77)。しかしながら、市場調査法が確立していなかつたこの時代は、流行予測の取材が百貨店等の販売政策と密接に関わることも多く、予測が変動することも事実である(前掲、84)。したがって、流行色の資料として新聞・雑誌記事は、一長一短あるが、年毎の流行色の情報量を加味し、主たる調査対象とした。また、データの収集にあたり、国立民族学博物館「近代日本の身装電子年表」を用い、新聞・雑誌記事から地色の拾い出しを行った。本研究では、期間を明治期に絞り、『小林孝子の衣服標本』の郁の若夫人時代迄の「新聞記事」と「雑誌記事」の調査に当たつた。調査対象の新聞・雑誌名は表9の通りである。また、郁の裂の年と照らし合わせながら調査した結果は、表10に纏めた。また、紙面上、全てを掲載することが出来ない為、各年代の代表的な記事を抜粋した。

表9 調査対象の新聞雑誌名

調査対象	名称
新聞	『東京日日新聞』、『朝日新聞』、『読売新聞』、
	『都新聞』、『報知新聞』、『国民新聞』、『時事新報』
雑誌	『女学雑誌』、『風俗画報』、『家庭雑誌』、
	『都の花』、『新小説』、『婦人画報』、『婦人世界』

#### 第2節 明治時代の流行に対する人々の捉え方

流行色について「新聞記事」「雑誌記事」の調査を行う前に、「明治時代の流行」に対し、人々はどう捉えていたのか、この時代の流行色は、生活に根付いたのか調査を行った。

明治から大正期にかけて活躍した教育者下田歌子は、『婦人常識の養成』で、流行を追う事を「婦

人が寄ると觸ると話題に上るもの多くは、化粧の衣服か髪飾りの品評と言ってよく、衣服の地質色合いの流行に気を配っている人が多いが、流行とは一時的なものである。商人のために商品を流行させるが、それに煽られ、身分も忘れて、流行に走るのは愚かしい限りである」と批判的に述べている（下田、1910、280-281）。「変化する」流行を追うことについて批判的な考えがある一方で、売る側も苦勞したようである。

「流行会」という組織の中心的メンバーであった三井呉服店（現在の三越）の日比翁助専務は、当時の人々の衣服を大切に作る習慣から色の流行を予測することは難しいことを、1903（明治36）年3月6日国民新聞の3面の「服装の意匠」で、以下のように述べている。

日本には未だ流行の源泉と云ふものがありませんから本當の流行と云ふ事は解りません只私共などでモウ此の模様にも飽いたらうから今度之にして見たら何様だらうなど、大體の狙ひをつけて意匠を立てるスルとそれが其の年の流行になると云つたやうなものです

（中略）いずれも四年五年の後まで着やうと云う考ですから勢ひ流行に先んずるといふ事は出来なく何時でも其の後を追って居らなければなりません（中略）、何様しても本當の流行生粋の服装と云ふものを見る事が出来ません

また、1909（明治42）年1月5日の日日新聞の7面「新流行色は何」でも、「毎年新調して始終流行といふ事は、事実上困難な訳ですから、少なくとも二年や三年は辛抱して居るのです。昨年流行ものが今年になって、全く廢れてしまうという事は断じてありません。」と、述べている（日日新聞、1909/1/5（7））。

したがって、着物の持ちが良いことが第一の人々は、数年着物を着用することから、明治の流行色は、同じ色が数年先まで続き、流行を追わない人々も存在することが分かる。

### 第3節 明治期の流行色の概要

明治時代、西洋化が促進された一方で多くの女性は着物姿であった。文部編修官であった平出は、1902（明治35）年に『東京風俗志』を執筆し、『都の華』の第一号を引用しながら、当時の服装の模様や色について図22のように年齢別に纏めた。

戦前の好尚		戦後の好尚	
令嬢	{ 草色、紅うけ鼠、藤鼠、鳩羽鼠、 薄利休、薄小豆等 薄利休、薄小豆等	令嬢	{ 薄小豆、藤鼠、裏葉柳、 薄村納戸、金茶等
夫人	{ 千歳茶、濃小豆、媚茶、壁鼠、 利休鼠、貴族鼠等	夫人	{ 濃小豆、銀鼠、利休鼠、煤竹、 媚茶、黒等

図22 日清戦争前後の好尚の変遷（平出、2000、40）

衣服の流行は、「日清戦争前後で異なり、戦前には綺麗艶濃を尚びしもの、戦後に至りて雄麗壮重なるを好むに至れり。故に模様、縞柄は繊巧ならんよりは粗大なるを喜び、色地は清淡ならんよ

りは濃厚なるを尚び、黒色最も行はれ、紺色これに次ぐ」と、平出は述べている（平出、2000、39）。

日露戦争後の戦勝により、日本のナショナリズムは高揚され、衣服の色彩は派手となり、模様にも潤達な気風が現れた（河鱈、1972、148）。また、1904（明治37）年デパートメントストアが始まったことにより、服飾の流行色、デザインを査定するなど流行の基調をなすようになっていった（江馬、1976、483-484）。次に図22の変遷と比較し、当時の新聞・雑誌記事の流行色の調査を行った。

#### 第4節 明治期の流行色の詳細と裂との比較

国立民族学博物館「近代日本の身装電子年表」を用い、新聞・雑誌記事から地色の拾い出しを行った結果を次頁の表10に纏めた。表に纏めるに伴って、帯や襦袢等の下着類や夏物、洋服の記事は今回の調査から除外し、年齢の名称はその時々の記事によって子供・令嬢・小娘・年増・婦人（夫人）等、その時々異なるが、記事のまま名称を掲載した。また、年齢毎に流行色が異なる場合は、年齢名称別に分けて表に纏めた。以下『衣服標本』の中の郁の裂と一部比較しながら、当時の色の変化と裂との関わりを述べる。

##### （1）日清戦争前（資料番号3-1、3-2、3-3）

1886（明治19）年、主に派手の受持ちの小娘向けは、紅生壁色、柳鼠、紅掛鼠、20歳前後～30歳迄は、御召鼠、藍鼠、藍摺鼠、30歳以上の年増の婦人は、地味な藍鉄、茶鼠、相皮色が東京で流行した（時事、1886/10/18（3））。その他は、深川鼠、柳鼠、美女鼠等があり（時事、1886/10/6（2））、年増婦人を除き、明度が高い赤み黄み緑み青みの色であった。1886（明治19）年頃の郁の唐縮緬の資料No.3-1（図5）とNo.3-2（図6）は、地色がRE1とRE5で、流行色には該当しない。これらは、衣服標本の中でも古く、「その頃トウチリメンは中々貴重なものだった」と解説文にある。トウチリメンは、薄地梳毛織物の一種で、メリンスとも言い、フランス、イギリスでは梳毛糸で作り、モスリンと呼ばれ、軽く柔らかな手触りが好まれ、色無地、捺染、友禅染等、着尺、襦袢、帯、裏地、夜具裏地等に用いられる（上村・辻合・辻村、1978、194）。輸入時は綺麗な柄で人気があり、欧州の織元へ柄の注文をしていたが、1877（明治10）年代には国内でモスリン友禅という名で生産するようになる。1894・1895（明治27、28）年には、舶来モスリンの輸入が終了し、1900年代には輸出が始まるようになる（大丸・高橋、2016、225）。郁の裂は、1886（明治19）年であるから、仮に国内産だとすれば、生産年直後で流行の品であった可能性もある。

1892（明治25）年は、鴉色や肉色（肌色）、利休色、藤色（国民、1892、4/3（2））、小豆、銀鼠、柳葉、白茶等で（東京流行月報、1892/11）、明度・彩度の高い赤み紫み黄み青みの色であることが分かる。したがって、第3節で平出が述べた通り、日清戦争前の色は清淡であったことが分かる。色の清淡については、「第5節 化学染料による新しい色の誕生」でも述べることにする。資料No.3-3（図7）は、郁が療養地で着る為、日本橋の白木屋で家族分購入（母の裂と父の裂もある）したセルの裂である。セルは西洋反物として輸入された毛織物の一種であり、Sergeと呼ばれるもので、日本ではちょうど明治24年・25年頃から女物の和服の単衣に利用することが流行り出したようである（北村、1988、42）。

セル地の流行に関しては、「男女共にフラネル及セルにて地色淡泊（アッサリ）とし柄は微塵縞又は小縞のたぐい流行なり」とある（国民、1892/4/28（3））。また、図23の記事より流行色は、半襟及び帯側に至る迄藤色、肌色、利休色、トキ色の色合が流行したことが分かる（国民、1892/4/3（2））。資料No.3-3（図7）は、流行の「肌色」と思われる。

表10 新聞記事・雑誌記事による着物の流行色（明治期）①（箕輪、2022、117-118）

発行年	明治	記事タイトル	新聞社・日付・頁	流行色
1886	19	東京の流行（衣服）	時事1886/10/6(2)	藍鼠、藍消鼠、吉原鼠、深川鼠、美女鼠、柳鼠、紅鼠
		東京の流行（衣服の続き）	時事1886/10/8(3)	20歳前後～30歳迄：お石鼠、藍鼠、藍櫻鼠 小娘（派出の受持）：紅掛鼠、柳鼠、紅生壁等 30歳以上年増の婦人（地味）：藍狭、茶鼠、相皮色
		東京の流行（衣服の続き）	時事1886/10/11(2)	上物：当世鼠に当世茶（糸入）、相皮・銀鼠（糸糸除） 常物：茶鼠、相嘉和（相皮）
1892	25	流行染色	国民1892/4/3(2)	藤色、肌色、利休色、トキ色
		流行の冬着	都1892/10/23(3)	30歳位一鼠、12.3歳一藤色
		冬着具服物相場	東京流行月報1892/11月	縞（淡色）一小豆、利休、銀鼠、柳葉、白茶、 子供一紫地（矢かすり）
1896	29	流行の裕着	読売1896/3/7(3)	令嬢向：紫、古代紫、お納戸、紺、藤色
		流行物案内	報知1896/3/13(1)	年増：お納戸、鐵、鼠、薄鼠、紫紺、鉄利休、黒、紺
		東京の流行衣服（冬）	風俗画報1896/9/10(No.122)	貴婦人向：利久、千才、狭、黒等 令嬢向：大豆鼠、朱紺、花色、鳩羽鼠、藤色、ひわ色
		流行の裕着（予報）1	国民1896/9/11(5)	紫根、花色、お納戸、紫、壁ねづみ、利久
1897	30	新年流行開書	国民1897/12/25(4)	紫、紺地、藤色、納戸、顔染 黒、茶
1898	31	夏物流行案内（一）	国民1898/4/13	明治23～7年：若き婦人福助色又は新駒色 草色を好むが、 一昨年以来：利休淡小豆、藤鼠等に移る
		衣服の流行	読売1898/9/20(4)	桜鼠、梅鼠、紺、紫、小豆色
1899	32	流行の裕はなし	報知1899/10/4(3)	薄鼠、利久鼠、相鼠 ※鼠流行
1900	33	婦人をして袴を用いせしめる事（和装）	国民1900/3/30(6)	海老茶（紫は13,4歳）
		流行の装（男女平常着）（和装・秋）	報知1900/9/27(3)	紺、鼠
		〈流行門〉海老茶袴	風俗画報1900/11/25(No.221)	海老茶
		女の春着	朝日1900/12/4(5)	令嬢向：牡丹色、栗小豆、桜鼠 若き婦人：桜鼠 年増：褐色
		流行門 迎新の服装	風俗画報1900/12/25(No.223)	男女とも、すべてくすみたる色合の稍濃き方
1901	34	新年の晴衣装（上）	時事1901/12/6(6)	16,7歳の令嬢向：董色、小豆色、髪斗目色、藤色、牡丹色
				20～25・6歳の奥様向：黒、御納戸、栗梅、藍鉄色、 但しは濃粹鼠
				妙齡向縞物：紫紺色、小豆色、紅掛色
				年増向：藍鼠、素鼠、鐵納戸、黒茶
新流行の冬物（つつぎ）	読売1901/10/1(4)	董色、薄小豆色、藤色、桜鼠		
社頭の紅葉（七五三の祝衣）	朝日1901/11/19(5)	女兒（七五三）：牡丹、紫根などより稍うすいもの		

明治35年～38年は次頁へ掲載

表10 新聞記事・雑誌記事による着物の流行色（明治期）②（同）

発行年	明治	記事タイトル	新聞社・日付・頁	流行色
1902	35	花見小袖（和装・春）	朝日1902/3/6	20歳～27・8歳：紺地又は錆紫紺地
		流行の花見衣	日日1902/3/15	妙齡の令嬢：堇花色、薄紫褐色、薄牡丹、對斗目色、藤色、櫻鼠等 年増向：藍鼠、鐵色、檜皮、茶色、栗皮色、素鼠等
		流行二枚袷（上）	読売1902/4/29	16歳～20歳前後令嬢：柳鼠、薄葡萄、藍鼠、瑠璃董、ゆかりの色
		流行二枚袷（中）	読売1902/4/30(5)	30歳前後年増：鉄納戸、藍鉄、栗皮色等
		流行の衣装	風俗画報1902/10/10	淡泊好み：地質は黒
				羽織：黒或は濃き花色、醒葡萄色
		最近の流行13 冬衣	読売1902/10/13	妙齡用：薄葡萄、錆お納戸等 夫人用：素鼠、茶鼠
最近の流行14 冬衣	読売1902/10/15(4)	粹人向：藍ほきものか茶色のもの 令嬢用（12・3歳位）：小豆、紅掛鼠、紅藤、褪葡萄等		
1903	36	花見小袖（和装・春）	朝日1903/3/26（5）	17・8歳ばかりの乙女子：素鼠色 22・3歳ばかりの女性：小豆色地
		オリーブ色流行	時事1903/12/16(6)	（服飾界の全般）オリーブ色
		婦人春着のさまざま（二）	時事1903/12/16(6)	20歳前後の奥様向：栗梅 幼女：藍鉄色
				令嬢：紫紺地 町家の娘達：薄錆鐵色地 16・7歳の令嬢：紫紺
1905	38	今年の花見衣(2)	日日1905/2/15(5)	女物：お納戸、藍鼠、葡萄色、意気好み：素鼠の色濃き
		今年の花見衣(3)	日日1905/2/18(5)	17・8歳より21,2歳の年若の婦人：薄葡萄、濃小豆 13・4歳の令嬢方：小豆、栗梅、踏考茶、鶉色
		流行の衣服	日日1905/3/30(5)	【袴地】普通：紫紺（カシミヤ） 上等物：海老茶（博多平か仙台平） 貴婦人（羽織）：濃小豆。 年増（羽織）：藍鼠
				夫人向上等 22・3歳：納戸地 26・7歳：栗梅地 30歳：濃栗梅 37・8歳：藍鼠 令嬢向上等 16・7歳：勝色地、錆納戸地 14・5歳：オリーブ地
		衣更	日日1905/4/22(5)	細君向 24・5歳：栗梅又は葡萄地 30歳前後：革或は薄オリーブ、34・5歳：栗革茶 娘向普通 17・8歳：濃勝色 14・5歳：薄葡萄地
		衣更（つづき）	日日1905/4/23(5)	
		婦人向袷仕度	国民1905/9/26(4)	30歳前後：専齋茶か柳茶、消炭、素鼠 22・3歳～25歳：お石納戸か薄ぶどう、左もなくは濃櫻鼠
		秋冬の衣類（上）	日日1905/9/30(7)	昨年より色彩の薄く暖乎したるもの嗜好多い。 薄小豆、薄葡萄、空色、桔梗色、淡紅色 ※紫紺は稍々廃れ気味なり
		秋冬の衣類（下）	日日1905/10/1(7)	女兒：葡萄、藤、空色

明治39年～42年は次頁へ掲載

表10 新聞記事・雑誌記事による着物の流行色（明治期）③（同）

発行年	明治	記事タイトル	新聞社・日付・頁	流行色
1906	39	衣更へ（上）	日日1906/9/29(7)	17・8歳の令嬢向（晴着）：錆納戸、菫、小豆
				17・8歳の令嬢向（折々着）：濃小豆、花葡萄、薄納戸等
				25・6歳の夫人向（晴着）：濃小豆、利久鼠、薄葡萄
				25・6歳の夫人向（折々着）：濃葡萄、利久鼠、小豆茶
		衣更へ（下）	日日1906/10/3(7)	12・3歳の令嬢向（晴着）：御召納戸、古代紫、鳩羽色
		12・3歳の令嬢向（折々着）：お納戸、小豆、花葡萄		
		冬着としての紺類	国民1906/10/29(3)	女物：黒茶、紫紺、穉色もぼつぼつ
		日露戦争後の流行の色合い	朝日1906/12/7(6)	褐色即ち勝つ色と称する藍青色、空色鼠色
1907	40	新秋の新装	読売1907/9/23(3)	<b>お納戸、鼠生壁等の藍がかりたるもの</b>
		実用と経済流行冬着の考案（三）	朝日1907/10/2(6)	令嬢17歳：桔梗納戸地
		実用と経済流行冬着の考案（四）白木屋案	朝日1907/10/5(6)	婦人27・8歳：消し納戸
		実用と経済流行冬着の考案（五）松坂屋案	朝日1907/10/6(6)	婦人30歳後：錆鐵地 夫人（23・4歳）雀竹茶地
		実用と経済流行冬着の考案（五）下村呉服案	朝日1907/10/8(6)	紳商夫人（26・7歳）：消炭色
1908	41	流行の裏面	読売新聞1908/2/25(3)	鼠地は依然たり：ケシネヅ、ブドーネヅ
		女の袴（上）	朝日1908/3/4(6)	袴：海老茶が最多、紫紺、藤紫、小豆色、オリーブ、黒
		今秋の流（一）	都1908/9/4(5)	茶、鼠、お納戸、鉄納戸等を少し薄目にしたもの
				令嬢向き（17・8歳）：桔梗、納戸か花田色
				奥様向（24・5歳）：濃鼠か錆納戸
		流行界の流行（上）	朝日1908/9/10(6)	藍、濃お納戸が大分薄くなり藍気を少し残して鼠を勝たせた色。派手の色としては藍を少し残して藤の勝つたもの。概して薄色になって来た
流行の冬着	日日1908/11/29(7)	昨年頃までは地色は藍。今年は鼠色		
1909	42	着物の色と模様（上）	日日1909/1/5(7)	昨年：就中錆お納戸、桔梗などの色合が最も廣く歡迎。三越呉服店：鼠に変わりつつある。若向には藤の色合。白木屋呉服店：錆納戸、桔梗流行。花柳界が鼠に傾き寂鼠とか藍鉄色が復活。若向には、藤鼠・紅藤・鳩羽藤。
		婦人服の色は素鼠と藤	日日1909/3/10(4)	年増向：素鼠 若向き藤色がかった色
		衣服装飾	風俗画報1909/3/5	東京：紫や紺青の矢紺が流行。（女学生の服装と云えば大抵此紺）。
		目についた最近の流行	婦人倶楽部1909/3	女学生：紫紺地と茶地。袴の色：エビ・紫紺・紺。新流行の色：紺桔梗
		今は何が流行るか（一）	朝日1909/9/13(5)	御納戸色から軽化した色：藍と鼠 妙齡向：多少紫を含んだ藍。 30歳以上の夫人：素鼠 流行の傾向：薄いクリーム、薄オレンジ、薄緑など。
		今は何が流行るか（二）	朝日1909/9/14(5)	鼠地に薄気を含んだもの

明治42年の続き～45年は次頁へ掲載

表10 新聞記事・雑誌記事による着物の流行色（明治期）④（同）

発行年	明治	記事タイトル	新聞社・日付・頁	流行色
1909 続き	42 続き	流行の新衣	新小説1909/9	若き向：藤色、質素の向：鼠色 之に伴ひて薄オレンジ、クリームに傾き （薄色の中に色気の洗みたがるが流行）
		流行の冬衣（上）	日日1909/10/19(4)	藤色系統と素鼠 年若の婦人：藤色系統 （歳に依って色に濃淡がかる） 小さいお嬢さん方：華美な紫が喜ばれる。 30歳前後の年増向：素鼠の如き 半襟から帯地に至るまで薄いオレンジ、薄柳茶、 クリームの如きものが次第に流行
		流行の冬衣（中）	日日1909/10/20(6)	外国から色々な様式が輸入されて模様の材料に使うようになり派 出になって来た。 西洋風になって椅子によりかかるようになると裾だけでは物足ら ず上の方が寂しいから是非模様を高く上げて夜会服にも通する様 な模様を工夫せねばなるまい（三越、白木屋、松屋調）
		流行の冬衣（下）	日日1909/10/21(6)	若い婦人（羽織）：藤色又は鼠色（衣服より多少濃い色）
1912	45	本年の流行予想	報知1912/1/2(4)	薄色に写生風の模様を染出せるもの
		梅見風俗（中）	時事1912/01/27(10)	地味向き：藍鼠、葡萄鼠、濃鼠、花色杯に近い 派手向き：紫鼠、藤鼠、藍納戸の様な色合い
		花見衣裳（上）	日日1912/2/1(5)	羽織：藤色や鼠地に稍々藍気を帯びて錆びたもの、黒はポツポツ
		新流行界の予想	読売1912/2/2(1)	藤色系統が中心。 老けた方：鼠色に藤を加味した御召鼠、みやこ鼠、 若い人：紫のかつたもの
		花見ころも	都1912/3/25(5)	藍に赤味や鼠を加味したものをいい色とする。 25・8歳：都ねずみ蓬菜ねずみ。 17・8歳：藍紫を濃くしたり薄くしたりしたもの。
		最近の流行	1912/9/6(5)	御大葬のため、今秋：黒を中心として洗んだ、地味な、 渋い色。派手な色を遠慮。
		春着はどんなのに？ （上）	日日1912/11/20(8)	春の流行： （若向）：藤色も藍色がかつた濃い目の覚めるようなもの 少し年増の意気向：鼠色に茶色の洗んだ渋いもの
		春衣裳をどう遊ばす？ （一）	大毎1912/11/23(11)	令嬢向きに限らず 紫木位の派手づくめで顔纏紫（昔の古代紫）、錦上紫（昔の 紫紺）が流行 紫色と遠ざかれば地味となり近寄れば派手 （丁度5,6年前に立返った）
		春衣裳をどう遊ばす？ （四）	大毎1912/11/30(9)	紫紺が流行色の中心で、濃茶色が復活。※紫紺と濃茶が五分五分
		春衣裳をどう遊ばす？ （四）	大毎1912/12/2(9)	子供用：赤鷲、水色、白 大人用：鐵、鼠、銀鼠、蕉茶、黒等

※近代日本の身装電子年表、<https://htq.minpaku.ac.jp/databases/mcd/nenpyou/index.html>、（最終確認2022/ 6 /27）

流行染色 一時は海老茶、福助鼠、青色、小豆色等の持ちきりありしが、舊服以來是れ等は太に腐れたり半襟及び帯側に至る迄藍色、肌色、利休色、トキ色等の色が大流行半襟にて娘連は紺縮地へ金糸を縫ひて用うるも新造、年増に至りては紋カベチヨ紋縮緬、一染藍色合は前の流行並縮緬は極めて濃濁の積ひをさす又借類に至つては少娘はヒハ、トキ色、帯金色夜の黒縮子はすたりなり腹合ものは薄色地何れも更紗形流行なり娘達の衣類には總て友染某地裾廻しは花染絹を用ふる者なくヒハ、藤、素鼠等の縮緬某地友染に轉り湖色の袴を附けしは最も今日の流行にて自ら高尙に見ゆるなり男袴は一染緋並系縮裏地は此頃薄花色數十年前に戻りたり又單物を着するに儀式紋付等の下へは冬着の如き巾廣き薄洋袴を掛けるが、觀客屋、縮み、縮物等の下へは襟幅狭き麻の汗取りを用ひしが昨夏頃より縮みは勿論浴衣の下に好くなり婦人長羽織の流行は呉服商店中の米海と唱へる城白米澤織の琉球袖、寶劍の足早く一疋三四位ひなり之につれて織出したるは昔けんちらどて置形飛白一圓廿五錢位是等が今の流行品なり

図23 国民新聞 1892 (明治25) 年4月3日の2面「流行染色」  
 (https://htq.minpaku.ac.jp/databases/mcd/henpyou/index.html) (最終確認 2022/ 6 /27)

また同年、駿河町越後屋等が絹セル織を売り出しており (日日、1892/ 5 /5 (5))、セル独自の風合いと染色方法によって色が薄くなっていた可能性もある。

## (2) 日清戦争後 (資料番号 3-4 ~ 3-10、3-12、3-13)

日清戦争後の1896 (明治29) 年は、第3節の平出の通り、色合いは強く濃くなっている。令嬢向は、紫、古代紫、御納戸、紺、藤色の青み紫みの色が多く占める (読売、1896/ 3 /7 (3))。一方、年増の女性は、御納戸、鐵、鼠、薄鼠、紫紺、鉄利休、黒、紺等の暗くにぶい青み紫みの色が多くを占める (報知、1896/ 3 /13 (1))。資料 No. 3-4 (図24) は、染直しの為、以前の色ではないが、解説文によると「元は藤紫であった」ことが分かっている。

1891 (明治31) 年は、櫻鼠、梅鼠、紺、紫、小豆色と赤み紫み青みの色である (読売、1898、9/20 (4))。資料 No. 3-5 (図25) は、カシミアの海老茶の代用品の曾祖母の手織の袴である。自家製の為か海老茶より暗めの色で、郁も「色が冴えない」と嘆いた様子が解説文に記されている。

1900 (明治33) 年は、女生徒の海老茶色の袴が大流行 (図26) となり、同年の風俗画報「流行門」11月25日 (No.221) では、流行の為、呉服商に一大恐慌を来たし、舶来カシミアの供給が必要に応じきれず品切れの様子が書かれている (花涙生、1900、18)。資料 No. 3-5 (図25) の解説文では、風俗画報の記事の2年前1891 (明治31) 年に既にカシミアの海老茶色が売り切れ、それぞれが代用品として海老茶色に染めている事実を示し、「既に2年前よりカシミアの海老茶色は品薄であったこと」が資料から読み取れる。その他の流行色は、令嬢は牡丹、栗小豆、婦人共に桜鼠の赤み・紫みの明るい色で、年増は暗い黄赤の褐色である (朝日、1900/12/ 4 (5))。その他平常着に紺や鼠がある (報知、1900/ 9 /27 (3))。

1901 (明治34) 年は、令嬢の場合、堇色、小豆色、藤色、牡丹、奥様向に、黒、御納戸、栗梅、藍鉄色等、年増向に藍鼠、素鼠、焦茶、鐵納戸の濃いくすんだ色が流行する (時事、1901/12/ 6 (6))。資料 No. 3-8 と No. 3-9 は、灰がかり素鼠に近い色である。

1902 (明治35) 年は、令嬢の場合、小豆色、堇色、薄紫根色、薄牡丹、藤色、櫻鼠等、年増向に鐵色、藍鼠、檜皮色、茶色、栗皮茶、素鼠、その他に蒲萄、黒等 (日日、1902/ 3 /15)、令嬢の紫みの明るい色と年増の濃い青み・赤黄みの色に分かれ流行する。資料 No. 3-10 (図27) は、今川

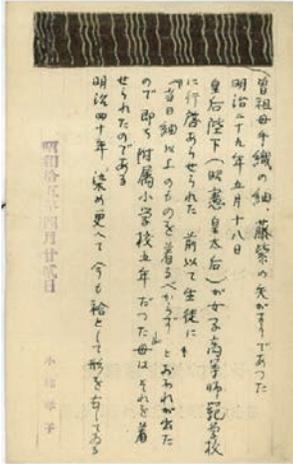


図24 No. 3-4 曾祖母手織

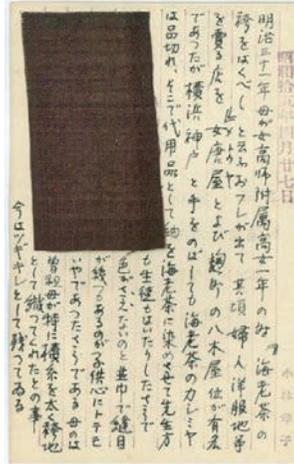


図25 No. 3-5 高女一年袴

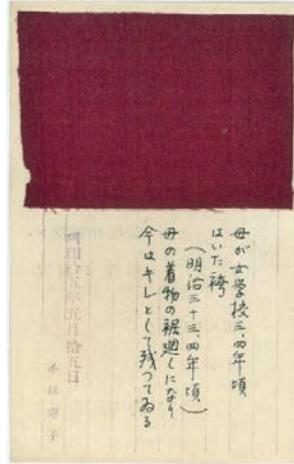


図26 No. 3-6 高女三年袴



図27 No. 3-10 羽織



図28 No. 3-12 ドテラ



図29 No. 3-13 雨合羽

●新流行のオリーブ色

此夏はうしほ染の勢力全盛を風靡するばかりなりしが此冬はオリーブ色の勢力服飾界の全般に及び上は博多友誼会より下は常留紙入類に至るまで其の流行を見ざるはなく呉服店陳列車の過半を占むるは凡て此色なり元と爲茶より脱化せるものにして數年前一部分の流行を見たる事あり其後一向すたれ氣味となりしが去年の冬關西に於て復び其勢力を頼り今年にまで侵入するに至りたり譯して橄欖色と云ひ又白と云ひ或は音を其のまゝ文字に現はして織部色と云ふ三井にては別に路考茶なる名を附しつゝあり▲此色の最も多く應用せられざるは博多及纏珍なり殊に博多の九寸は凡て此色のために懸倒せらるゝの有様を呈し意匠新色色巧妙なるも少なからず先頃より白木屋に陳列されし石鏡玉模様の知さオリーブの地色に金茶にて玉を描き紙の中に熊茶、藍鼠等の色を用いてアムモゴリの西洋婦人が石鏡玉を吹き居る圖を現はし吹きたる石鏡玉は大小數をなして其の周圍に飛揚せるものなるが意匠の大膽なる事從來に例を見ざる所製造者は桐生の周東藤太郎氏なりと云ふ▲纏珍にては今川橋の松屋に陳列された

図30 新流行のオリーブ色 (国民新聞1903 (明治36) 年12/15 (4))

(<https://htq.minpaku.ac.jp/databases/mcd/nenpyou/index.html>) (最終確認2022/6/27)

橋の松屋で購入した羽織であるが、格子模様の色が、檜皮色や栗皮茶に近いものがある。資料 No.3-11は、普段羽織の裏であるから除外した。裏地に使用したと記述があるが、郁の独自の好みであろうか。非常にあざやかである。資料 No.3-12 (図28) の地色はCG1の白であるが、栗皮茶の緯糸を使用している。

1903 (明治36) 年の冬から服飾界全般にオリーブ色が流行した (図30)。緑は希望の色であり、多くの草木の葉の中に見出すことの出来る色で、落ち着いた穏やかな中に、若々しい生氣のある色、上品にして清々しい感じを与え、希望、歓喜、生命等の象徴の色である (泉、1922、62)。色名にカタカナが登場するのも新聞ではこの時が初である。その他は、幼女の藍鉄色、16・7歳の令嬢の紫紺、20歳前後の奥様の栗梅が流行し (時事、1903/12/16 (6))、資料 No.3-13 (図29) は暗い灰赤 JCC40のRE5であり、流行色に該当すると思われる。

### (3) 日露戦争後 (資料番号 3-14、3-16～3-21、3-23～3-28)

1905 (明治38) 年は、前年より色彩の薄くはっきりしたものの嗜好が多くなる (日日、1905/9/30 (7))。13・4歳の令嬢は、鴉色、小豆色、栗梅、路考茶の黄み赤みの色、歳若の婦人は、薄葡萄、濃小豆の赤み紫みの色、女物は御納戸、藍鼠、葡萄色の青み紫みの色、意気好みで濃素鼠が花見衣の時に流行する (日日、1905/2/16 (5))。また、衣更の頃に、娘向は、濃勝色、薄葡萄の紫みの色、細君向けは、栗梅か葡萄地の赤み紫みの色、30歳前後は、オリーブ色又は栗皮茶の緑み黄赤みの色である (日日、1905/4/22-23 (5))。また、秋冬には、先に述べた明度・彩度の高い空色、蒲萄、桔梗色、淡紅色が流行し、紫紺は廃れ気味となっている (日日、1905/9/30 (7))。資料 No.3-14 (図13) は、地色がJCC40の紫系のPU3であり、流行色の葡萄に近い。また、資料 No.3-17 (図31) の染直し部分の裂も路考茶に近い。資料 No.3-18 (図32) の地色は、BR5で流行色の栗皮茶に近く、縞割りの経糸は、紫紺や小豆色、柳茶に近い色を用い、流行色に合っている。



図31 No.3-17 捺染前後仕事着

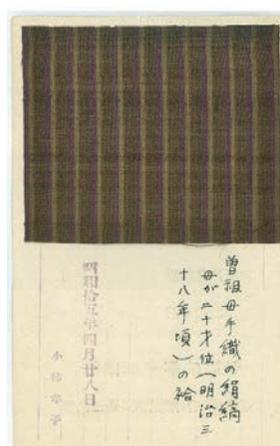


図32 No.3-18 曾祖母手織の袖

度重なる戦争の影響も大きく、日本のナショナリズムの高揚によって、象徴的な復古趣味である江戸時代の粋な色彩が注目される。また、後に平和を象徴するような色味が好まれるようになった。1906 (明治39) 年の12月7日6面の朝日新聞には、以下のように赤の流行と青の流行が書かれてい

る。どちらも戦争の影響が色濃く現れているものである。

戦後の日本は物価が概して高くなっているにも拘わらず、一般の購買力がなかなか強く商品は多忙である。昨年まで流行せしものは小豆、葡萄、紫等いずれも赤を基調とせるもの最も多く賞美せられしが、これは全く我が国民が丹心赤誠、一に報国に専らなりし所より自ら赤なる色の尊まれし故なるべし。本年の春より明年にかけては、褐色即ち勝つ色と称する藍青色が主となり、之より出でたる空色鼠色など、謂わば戦後の平和を意味する色の大いに流行すべき傾向を生じたるは、何と不思議の現象ならずや

翌年の流行色は、藍色に限られ、お納戸、鼠生壁等の平和色に変化している（読売、1907/9/23(3)）。資料 No. 3-21（図33）は、郁のお気に入りであった単衣である。阿波シボの裂は、1907（明治40）年に横須賀のさいかや呉服店で購入したものである。阿波シボは、徳島県で出来る緞織で「海部はな」が明治2年に考案し、色の太さの差異による張力で細かな凹凸が出来る。色は、藍色の濃淡である。阿波シボに関しては、翌々年の1909（明治42）年には化学染料とインド藍の利用拡大により阿波の藍の産額は3割減少し（中外商業新報、1910/3/19(2)）、この裂は、化学染料の普及前の貴重な裂である。

1907(明治40)年の流行色は、御納戸、鼠生壁等の藍がかかるものが流行し（読売、1907/9/23(3)）、他は、23・4歳の婦人に雀竹茶が流行した（朝日、1907/10/6(6)）。前年の裂の資料 No. 3-19（図34）は、曾祖母の手織であり、1906（明治39）年に女高師の教生として附属高女へ出る為に作った教生羽織である。この裂の解説文には、「色も当時の流行(?)裏は、白それも其時代のシャレた事であったらしい」とあり、色名は書かれていない。色は雀茶(≒雀竹茶)であろうか。この羽織の製作年は、前年の1906（明治39）年であるから、既にこの年には雀茶が流行していた可能性もある。



図33 No. 3-21 単衣



図34 No. 3-19 曾祖母の手織羽織

資料 No. 3-20の羽織は、黒地で流行色とは異なる。資料 No. 3-23（次頁図35）の地色は、NE 3 であり、桜鼠に近い色に見える。資料 No. 3-24（図36）は、赤み・黄みの暗い灰赤となっており、藍がかかる流行色とは異なるが、江戸中期ごろの褐色系の流行色である「雀茶」に近い色である。

1908（明治41）年は、袴を中心とする流行の小豆色、海老茶、紫紺、藤紫、オリーブ、黒があり（朝日、1908/3/4（5））、依然、葡萄鼠、消鼠等の鼠色が流行の中心である（読売、1908/2/25（3））。令嬢向は、桔梗色、御納戸、縹、奥様向は、濃鼠か鐵御納戸である（都、1908/9/4（5））。資料 No. 3-25（図37）は、NE4で濃鼠に近い。「名称はその頃新お召とよんださうである」と解説文の通り、当時の流行であったに違いない。絹織物の種類は多く、流行も様々だが、近代後半期に最も好まれたのが、御召である（大丸・高橋、2016、212）。緯糸に御召緯という独特の強撚糸を使って織り上げたのち糊を落とすと撚りがもどり、細かい凹凸が生じる華やかさのある縮緬で、最上品と評価されるようになったのは1900（明治33）年頃である（前掲、218）。新御召は、経糸が絹、緯糸が木綿の瓦斯糸であるが、資料 No. 3-25（図37）は絹100%である。



図35 No. 3-23 新婚時の単衣

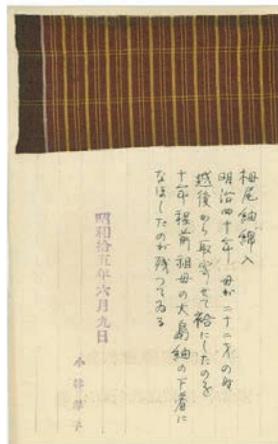


図36 No. 3-24 梅尾細綿入



図37 No. 3-25 単衣新御召

1909（明治42）年の流行色は、御納戸色から転化した藍と鼠が流行し、妙齡向は多少紫を含んだ藍であり、30歳以上の夫人は素鼠、そして外国からの影響からか薄クリーム、薄オレンジ、薄緑等の薄色が目立つようになってきた（朝日、1909/9/13（5））。資料 No. 3-27（図38）は、BL4で暗い青紫で紺に近い色である。

#### （4）諒闇期（資料番号 3-29～3-31）

1912（明治45）年は、薄色系統に傾いていたものが、御大葬のため、今秋以降は黒が大半を占めていたが、後に黒に近い紫紺が流行の中心となり、その後、濃茶色が久しぶりに流行となった（大阪毎日、1912/11/23（11））。紫紺と濃茶は、五分五分である（前掲）。濃茶色の流行理由は、上品流行に飽きた人々は、気軽で粋である色を求めたからである。

資料 No. 3-29（図39）は、横須賀の曾比屋で「メンセルが出来た時いい柄だと云って郁の母が気に入って買って来た」ものである為、当時の流行であったと考えられる。柳田によると当時は木綿に追随する観があり、メンという語を頭につけた織物が出現したそうだ（柳田、1993、41）。資料 No. 3-29（図39）の地色は、YE3で異なるが、経の縞糸にNE3・NE4と鼠が使われている。資料 No. 3-30（図40）は、郁の学校着で、この当時の教師は綿服を着る内規であった。茶色と黒・鼠色の格子柄となっている。



格段に高めた庶民衣料が流行市場を左右する新たな状況が、明治20年代の前半期に出現する。流行品や上級品の地色が、それまでの濃紺・焦茶・鼠地などの濃色系から、それ以外の色物とくに都市市場向けの薄色基調にシフトしたからである。鳩羽根・藤・今紫・利休・葡萄鼠・大和柿・銀鼠にくわえ、薄紅・白茶・薄柿色・薄鼠・薄利休鼠・新駒色（草色）・薄紫・薄藤色・薄桔梗などの淡色が新たに流行する」と色の変化に関して述べられている（田村、2004、20-21）。このように図41では、田村の示す色のモスリンが売られていたことが示されている。

また、明治10年代まで伊勢崎と十日町は、太織や麻縮に特化した地方産地であったが、両産地は積極的にアザリン製法を取り入れ、ファッション性を高めた夏物と女物の新製品を開発し都市市場で評価されていった（前掲、21）。伊勢崎の銘仙では、縞糸が多色化され、地色の基調が明治10年代の紺地・茶色系から紺地・鼠地系へと移行し、同20年代には紺・鼠地以外の色物が主流となり、多色鮮明な緋模様を積極的に導入し流行性を発揮するようになり、多彩な配合色が創造されていった（前掲、23）。表11は、1889（明治22）年の伊勢崎産地の使用染料を『伊勢崎織物同業組合史』から田村が抜粋し纏めた表を元にし、在来染色法が行われていた色と西洋式染色法により誕生した色を色彩の系統別に纏めたものである。正藍や鉄漿、矢車、五倍子等が中心であった在来染色法から、アリザリンやセルリン等を用いた織物講習所の西洋式の染色法を用いることにより表11のように赤・橙・茶・黄緑・緑・紫等の色の選択が増えたことが分かる。

表11 色系系統別の伊勢崎産地の使用染料（田村、2004、24）

色系統	在来染色法（西洋染色法あり）	21色	西洋式染色法のみ	28色
PK	—		桃色、肉色	
RE	赤色、		消赤、海老茶、小豆色	
OR	—		柿色	
BR	媚茶色、生壁茶、金茶、焦茶		赤茶、栗梅、利休茶、利休錆、白茶、黄茶、栗皮、蔦色、樺色	
YE	浅黄色、鶯茶、黄色		時色	
YG	萌黄色		鶯色、蜜柑茶、柳茶	
GN	—		松葉鼠、青茶	
BG	御石茶			
BL	紺色、浅黄色、花色、御納戸色、鉄無地色		琉球鼠、白消、藍皮、瑠璃色	
PU	紫色、葡萄鼠		藤紫、藤鼠、鳩羽色	
OG,NE	藍鼠色、銀鼠色、黒色、素鼠			

## 第6節 まとめ

1886（明治19）年は、深川鼠、柳鼠、藍鼠、茶鼠、藍鉄のような江戸時代の色を継承した色彩であったが、資料 No. 3-1 や No. 3-2 のように舶来毛織物が国内に流通し、国内産の織物の技術革新によって、多くの色が産出され、色の選択肢が増えたと考えられる。また、新しい舶来毛織物は、庶民にとって憧れであったことが、資料 No. 3-3 の裂の解説文に静養の轉地先へ「得意で着ていった」ことから明らかである。また、セルやネルの流行した年は、他よりも清淡色であった。1900（明治33）年には、女生徒の海老茶色の袴が大流行となり、舶来物カシミアの供給が間に合わない状態となり、郁は曾祖母に手織の袴を製作してもらうが、「色は冴えない」様子であり、色の再現は難しかったことが分かる。

また、明治の戦況時の流行色は、庶民の深層心理が大きく現れる。日清戦争前後では、清淡色から色合は濃く暗くにぶい重厚色へと変化し、1903（明治36）年には、希望、歓喜、生命等の象徴色である緑色のオリーブ色が登場する。度重なる戦争の影響によってナショナリズムの高まりが、復古趣味となり、江戸の粹な色彩が注目される。後に、平和を象徴する青みの色が流行する。赤味をおびたものから青みの色へと極端な変化である。希望の象徴であるオリーブ色は、再流行しない。諒闇期においては、御大葬により黒を中心とした沈んだ地味な紫紺が流行の中心になる一方、気の詰まる色合から気軽な色が好まれるようになり濃茶色が復活するようになる。

## 結 論

『小林孝子の衣服標本』の明治期の郁の裂で色数が最も多いのは、無彩色であった。「表10 新聞記事・雑誌記事による着物の流行色」の調査結果から、無彩色の登場回数は多く、鼠系の色名は、1886（明治19）年以降、1898・99（明治31・32）年以外登場している。また、1896・1901・02（明治29・34・35）年と年増女性だけ流行した年もあった。また、有彩色の青系統は、1892・98・99（明治25・31・32）年以外、全てに登場し、第3章第5節で田村が述べた通り、凡そ鼠・青系統が明治期の中心であったことは間違いなさであろう。茶系統は、1900（明治33）～1902（明治35）年は、年増の女性の間で流行し、30歳位までの婦人は、1905（明治38）年～1909（明治42）年に流行している。年齢が限定的であるのが特徴であり、継続的というよりは社会情勢が不安定な時に「江戸回帰」となり、流行する傾向にあった。また、平出氏の『東京風俗志』で「黒地最も行われ、紺色これに次ぐ」と述べられた黒に関しては、新聞・雑誌記事には、1901・02（明治34・35）年と諒闇期の1912（明治45）年に流行した記事が登場しただけであった。平出氏と異なる結果である。一方で、郁の裂は、NE5の黒が38裂中11裂と最も多く、流行とは関係なく好まれる色であると考えられる。江戸時代の奢侈禁止令による色の制限は、「四十八茶百鼠」を生み出して明治時代に継承されているが、流行色の調査の結果、鼠・茶・青系統は、全てが継続的ではなく、一部断続的であることが明らかであった。

これら鼠・茶・青系統と郁の裂との関連性をみると、鼠系統の場合、年増や若夫人等、特定の年齢女性に流行した年に、郁の裂の年齢と流行が一致するものもあれば、年増の流行時に若くして購入している裂もある。流行年齢が異なる場合、地色が鼠系統で地味向きであっても、模様配慮がなされている。「表5 年齢別の色の特徴」に示したように、1901（明治34）～1906（明治39）年迄の「結婚前16～20歳前後」の裂は、縞柄が大きく、柄が派手向きであり、1907（明治40）～1912（明治45）年は、縞柄に同色系で濃淡をつけ、柄に上品さ落着きの中にある若々しさが感じられる模様となっている。一方、青系統は、1896（明治29）年、1905（明治38）年に該当する裂はない。「表8 好みの色と実物調査結果の比較」に見られるように青が出現するのは、女学生からである。一方、1907（明治40）年～1909（明治42）年迄の「平和を象徴する」藍系の流行は、裂が存在し、表5の特徴とも、一致している。茶系統は、1898（明治31）年の海老茶の袴が流行した時のものや、資料No.3-19の解説文に「色も当時の流行(?)」とある1905（明治38）年に流行した栗梅色の裂も存在する。また、資料No.3-18は、茶系統を地色とし、紫・黄緑・黄・赤系統の派手な縞糸を用い、「明快、派手の気分をかき消さない」調和の取れた縞柄の裂である。以後の茶系統の裂は、なかった。このように郁の裂は、3系統の色に関し、流行に沿った年代に存在し、年齢に沿った模様や縞糸の工夫が行われている。

他方、これらと同様に流行していたのが、紫系統である。1892（明治25）年に登場し、1906（明

治39)年まで子供や若い女性を中心として流行する。1905(明治38)年の日日新聞9月30日の7面に「紫紺は少々廃れ気味なり」と述べられた通り、1907(明治40)年には姿を消すが、再び1909(明治42)年から若い女性を中心に流行となる。郁の裂で特徴的なのは、紫地の2裂はどちらも、染直しが行われている点である。日清戦争後の最も全世代に流行した1896(明治29)年、曾祖母の手織の紬の藤紫の矢絰があるが、1907(明治40)年に染め替えをしている。また、1905(明治38)年の桔梗色や葡萄色が流行時、郁の裂は紫地の袷であったが、後に羽織にした際に、ネズの目引きを行っている。このように紫地は明るい印象を与える為、年相応の色に染め直した可能性が高い。一方、赤系統は、色の若々しさが求められる少女時代にあり、流行は、1900(明治33)年から1906(明治39)年に集中している。これは先に述べた袴の流行と、度重なる戦争の影響によるナショナリズムの高揚が大きい。同様に郁の裂は、一つ身の裂以外は、1900(明治33)・1903(明治36)・1907(明治40)年と流行の影響があると考えられる。

利休色や柳葉色等の黄緑系は、1886(明治19)～1896(明治29)年に集中し、輸入毛織物の影響が大きいと考えられる。また、オリーブ色が1903(明治36)年に登場すると1906(明治39)年まで黄緑系は流行している。1905(明治38)年の裂は、地色が灰色からカーキ色へ染直しを行っている。解説文によると、郁は「やゝ得意で仕事着にした」ことから、流行に沿ったものであると考える。

本研究の「色彩に対する女性の意識と流行色」において、郁は、茶・紺・鼠系統のみならず、紫・赤・緑系統等の流行色を積極的に取り入れ、試していたのではないだろうか。また、色彩に対する意識に対しても、年齢に沿い社会組織から逸脱しない色を選択していたと考えられ、郁の家庭では、曾祖母からの手織製品も数多く存在するが、百貨店購入の履歴があることから、衣服を調達出来る経済力があつたともいえる。泉俊秀は、『流行商品変遷の研究』の「良く似合う流行」の中で、「私は似合ふ流行と云うものは、絶対的のものでは無い、似合はぬと思つた流行でも、多数が需要して流行となれば、それが似合うやうになるものである」と述べている(泉、1922、15)。生活様式の変化や購買環境の変化によって、年齢毎の流行色や年齢意識も変化していることと思う。今後は、様々な要因を交え、祖母・孝子等親子三代の色の変化や模様の分析を行い、総合的に流行を捉えることが今後の課題である。

#### 付記

本共同研究にお誘い頂き、ご指導を賜った、家政学部被服学科の森理恵先生に深く感謝致します。また、本論文の作成にあたり、また多数の資料を提供いただきました日本女子大学成瀬記念会館と(一財)ニッセンケン品質評価センター様に深く感謝の意を表します。最後に本研究の遂行にあたり多数のご助言を頂きました研究メンバーの先生方に、感謝の意を表します。

尚、本論文は、『小林孝子衣服標本資料集』の「衣服の色彩に対する流行色—明治期の郁の裂を対象として—」から更に調査を進め、大幅に加筆修正したものである。

#### 参考文献

- 飯島礼子「江戸・明治時代の粋な彩り—きもの地色について」、長崎巖『Kimono Beauty』、東京美術、2013年、154-156頁
- 泉俊秀『流行商品変遷の研究』文雅堂、1922年
- 一般社団法人日本流行色協会(JAFCA)、<http://www.jafca.org/>、(最終確認2022/6/27)
- 上村六郎・辻合喜代太郎・辻村次郎『日本染織辞典』東京堂出版、1978年
- 江馬務『江馬務著作集 第三巻』中央公論社、1976年

- 大橋又太郎編『日用百科全書第六編 衣服と流行』博文館、1895年  
花涙生「流行門」、『風俗画報』221号、東陽堂、1900年、18頁  
北村哲郎『日本服飾小辞典』源流社、1988年  
幸田文『きもの』新潮社、1993年  
幸田文『きもの帖』平凡社、2009年  
小林孝子「考現学より見たる一家庭」日本女子大学家政学科卒業論文、1938年  
城一夫『日本の色彩百科』青幻舎、2019年  
下田歌子『婦人常識の養成』実業之日本社、1910年  
関美枝子『現代女性服飾読本』関書院、1937年  
繊維辞典刊行会 高橋止文『繊維辞典』財団法人商工会館館出版部、1951年  
大丸弘・高橋晴子『日本人のすがたと暮らし』三元社、2016年  
高橋晴子『近代日本の身装文化』三元社、2005年  
田村均「在来織物業の技術革新と化学染料—伝統色から流行色へ—」、『社会経済史学』第69巻6号、2004年、645-670頁  
長崎盛輝『日本の伝統色』京都書院、1996年  
平出鎌鏗二郎『東京風俗志（下）』ちくま学芸文庫、2000（明治35年創刊の復刻版）  
森理恵「小林孝子の衣服標本—1870年代～1930年代の中流家庭の衣生活—」、『成瀬記念館』、日本女子大学、2018年、60-67頁  
箕輪恵枝「衣服の色彩に対する意識と流行色～明治期の郁の裂を対象として～」、『小林孝子衣服標本資料集』、日本女子大学、2022年、114-119頁

新聞記事 以下のデータベースより検索

国立民族学博物館、近代日本の身装電子年表、<https://htq.minpaku.ac.jp/databases/mcd/nenpyou/index.html>、（最終確認2022/6/27）

## VI スポーティという語が表した女性の洋服 —1930年代後半の雑誌『スタイル』を中心に—

田邊 しずか  
TANABE Shizuka

### 1. はじめに

1930年代は、日中戦争から1940年代の太平洋戦争へも向かう戦争の時代でありながら、モダニズムやアメリカニズムが隆盛し、消費も拡大していた時代であった。そのような時代の中、日本女子大学校家政学部の卒業生である小林孝子<sup>1)</sup>は卒業論文『考現学より見たる一家庭』<sup>2)</sup>において、家の中にあつた多くの物品の一切をスケッチや写真とともに記した<sup>3)</sup>。小林家の衣生活に関しては、家族全員の衣類を記した「被服しらべ」<sup>4)</sup>や、小林家所蔵の本のタイトルを記した「図書目録」といった卒業論文の関連資料と位置付けられている資料の中でも伺い知ることができる。加えて、孝子は卒業論文完成後、家庭にあつた端切れをハガキ大の用紙に貼り、端切れに関する情報を記した214点にも及ぶ衣服標本を製作した<sup>5)</sup>。衣服標本に記された情報から、和服や洋服の仕立て直しなど、物を大切に長く使っていくという工夫が多く見られる。しかし同時に、洋服に焦点を当てて見ると、当時洋装をしていた女性は少ない中、孝子は女子大在学中から卒業後にかけて非常に多くの洋服を所持していたことも分かる。1937（昭和12）年に今和次郎の指導のもと各地の婦人之友社友の会会員によって女性の服装に関する調査が行われ、銀座での調査に関しては、洋装の女性は女性全体に対して24%であったが、調査対象に含まれていた女学生の大半は制服であるとする、孝子のように制服以外で洋装をする女性の割合は女性全体の15%であった<sup>6)</sup>。

筆者は拙稿「1930年代の日本女子大生の洋服」において、衣服標本の端切れの色柄と情報、加えて孝子の卒業論文に含まれる女子大の明桂寮と卒業後に作った洋服に関する記載事項やスケッチ、「被服しらべ」の記載事項を照らし合わせて、5点の孝子の洋服についてその具体像を明らかにした。5点の洋服はそれぞれ、スーツ、スポーティな型、午後の装いというような同時代の洋服の特徴が見られ、また帽子や手袋などの小物と合わせて様々な装いが可能であった。それらの中で孝子が「スポーティな型」と記した洋服2点については、日本の服飾デザイナーの草分け的存在である田中千代による洋装指南<sup>7)</sup>と照らし合わせ、直線的な要素を持つ点で特徴が一致していると述べた<sup>8)</sup>。

スポーツを連想させるファッションイメージであるスポーティーに関する研究としては、洋服が普及した現代において歴史的な経緯を踏まえた1970年代のファッションに関する考察<sup>9)</sup>や、そのイメージを客観的に判断するための調査が行われてきた<sup>10)</sup>。服の歴史的な変遷を捉える時、10年ごとに区切られた年代の区分はしばしば使用されるが、1930年代のスポーティー（スポーティ）のイメージ、また同時代の洋裁や洋装指南書において度々見られるスポーティな型の服である「スポーツ・ドレス」についても、どのようなものであるのかは、多くは語られて来なかった。

本稿では主な資料として1936（昭和11）年6月に創刊し、洋服に関する記事を多く掲載していた雑誌『スタイル』を用いる<sup>11)</sup>。同誌は孝子が記した図書目録のなかで小林家が所持していたことを確認できる。孝子が女子大を卒業したのは同年の3月であり、女子大在学中から卒業後にかけて多

くの洋服を所持しつつも更に新しく仕立てていることから、装いにおける取り合わせや服を仕立てる際に孝子が『スタイル』を情報源の一つとしていたと考えられる。1930年代後半にスポーティという語を女性の洋服に対して使用したとき、その洋服の特徴はどのようであったのか、加えてスポーティな服はどのように装われたか、そしてどのような場面で着用されたのか、これらについて明らかにしたい。

尚、現在では「スポーティー」という表記もあるが、本稿では孝子が記した「スポーティ」という表記に統一する。同時代の日本語表記については、旧字体の漢字は新字体に改め、仮名表記は原文のままとしている。

## 2. 雑誌『スタイル』とその読者

『スタイル』は1936（昭和11）年6月に創刊した。小説家の宇野千代によって編集発行された月刊の雑誌である<sup>12)</sup>。その編集方針は「洋服の作り方や着用の仕方を伝えることを目的とした当時の洋装・洋裁雑誌とは異なる『お洒落雑誌のようなもの』を目指してスタートした」という<sup>13)</sup>。1930年代の誌面の内容としては、国内外の女優のグラビア、令嬢を映したスナップ、女性の洋装、和装、男性服、美容に関する読み物、読者からの質問と回答欄、ほか読み物として小説、映画やレビューの話題を掲載しており、ファッションを中心とした趣味に関する記事で構成されている。同誌は実用的というよりは鑑賞するためのお洒落雑誌として編集されていたことに関して言えば、同時代の婦人雑誌で見られるようなパターンが付いた洋裁指南はほとんど見られないことが挙げられる<sup>14)</sup>。

『スタイル』の読者については、一般の人々だけでなく専門家も想定していたようである。たとえば、読者からの質問欄である「QetR」のなかで、「スタイル正月号の『新しいファスナー』といふのはどこに売つてあるのでせう。お値段もお教へ下さい（Q子）」という質問があった。これは同年の1月号に掲載されたファスナーを手に入れた一般の読者による質問であると思われる。同誌の寄稿者である館眞はこのファスナーについて「あれはまだこちらにはありません〔中略〕あの紹介は、ああ言うファスナーをこちらでも作つて欲しいと思つて書いたもので、ほんとは専門家に注目して欲しいのです」というように、日本で売っていないがその記事を見た専門家に作ってほしいという回答をしている<sup>15)</sup>。このような質問からは、寄稿者が専門家に向けて書いた記事であっても、一般の読者はその方針に関係なく、誌面で紹介されたファッションを自身の装いに取り入れようと試みていることが窺えよう。

『スタイル』は孝子が記した小林家の図書目録に記載があり、所持していたことが分かるものの、同誌を月号入手していたか、どの号を所持していたか、加えて孝子自身の所有物であったかも明らかでない。しかしながら、同誌の内容や質問欄を見ると、孝子のような若い女性にとっては洋服を仕立てる時やその着こなしについて参考にできる雑誌であったことは言えよう。

## 3. 孝子が記した「スポーティな型」の洋服

スポーティという語が表した洋服について『スタイル』を用いた検討をする前に、ここで孝子が衣服標本で「スポーティな型」と記した孝子の洋服の2点について述べる<sup>16)</sup>。

まずは、緑と赤の細かい格子模様の布でできたオーバーコートである<sup>17)</sup>。元は1932（昭和7）年の冬に横浜の野澤屋で製作されたオーバーコートであったが、女子大三年の冬に別のオーバーを作ったためベルト無しの七分コート<sup>18)</sup>に仕立て直している。卒業論文中の孝子のスケッチでは袖の形態は明らかでないが、「テラーカラーにベルト付きのスポーティな型」であった。

一方は、黒、赤、黄、白が組み合わされた格子柄の布でできたワンピースである<sup>19)</sup>。女子大卒業後の1936(昭和11)年の夏に銀座いさみやで製作されたワンピースであり、卒業論文中のスケッチによれば白いシャツカラーの付いた半袖のワンピースであることが分かる。衣服標本の情報によれば、「カラーは白ピケ 白丸ボタンかざりのスポーティな型」で、素材はギンガムであり、洗濯に耐える丈夫さは、夏の活動的な衣服に適していたであろう。

#### 4. 『スタイル』においてスポーティという語が表した女性の洋服

1920年代のモダンガールの装いに見られる直線的なシルエットや短いスカートの活動性に優れたボーイッシュな装いに対し、1930年代の女性の洋服はウエストを自然な位置で絞り、スカートは長くなったものの、シルエット自体は直線的で細く、肩幅は広がっている<sup>20)</sup>。そのような中でスポーティとはどのような洋服を指して使われた語であったのだろうか。『スタイル』1936(昭和11)年6月号から1939(昭和14)年12月号までを参照し、スポーティという語を抽出した結果が表1である<sup>21, 22)</sup>。絵や写真が付けられていた場合はその特徴についても記した。抽出の結果から、スポーティな洋服の特徴、装いの指南、着用場面に分けて述べる。

##### 4-1. スポーティな洋服の特徴

洋服に関わるスポーティという語を抽出した結果、装いの全体像や服全体を指してスポーティであるとする説明が最も多く見られた。たとえば1938(昭和13)年5月号において「スマートなタン色のホームスパンのスーツです。アンダー・ジャケットは前でブラウンのスウエードでテーラードに仕立ててある。とてもスポーティないでたち<sup>23)</sup>」という説明は、アメリカの女優であったヴァージニア・グレイ(Virginia Grey)をモデルとした写真に付けられていた(図1)。1939(昭和14)年10月号のように写真ではなく絵が付けられたものもあった。また、次に多く見られたのは服の



ディテールを直接指してスポーティであるとしたものである。たとえば、1937(昭和12)年6月号18頁においてジャケットの「カフスとベルトのステッチがスポーティ<sup>24)</sup>」というように、服の一部に配されたステッチを直接スポーティとする説明であった。

図1のようにモデルのポーズや、写真や絵の不鮮明さによってその特徴を見ることができないものもあった。説明文や写真もしくは絵から、その特徴を見られたものとしては、テーラードや格子柄などの直線的な形態、ステッチほか大きさや色の対比などで強調の効果が見られるもの、生地素材自体がスポーティとされていたものが挙げられる。

まず直線的な形態であるが、特にテーラーカラーやシャツカラーのような「かたい印象」のカラーは、田中千代の『新洋装読本』においてプリーツとともに「見るからにさつぱりとしたつまりスポーティーな型」とされ、添えられた服の絵の衿も

図1 ヴァージニア・グレイの写真と説明文  
『スタイル』1938年5月号、19頁(部分) 国立国会図書館所蔵

表1 1936 (昭和11) 年6月から1939 (昭和14) 年12月までの『スタイル』における洋服に関わるスポーティの語の抽出結果

分類	号	頁	記事タイトル	内容
装いの全体	1938年5月	19頁	季節の街角	(写真有) 「とてもスポーティないでたち」 ・タン色のホームスパンのスーツ ・テラードに仕立ててあるスエードのアンダージャケット
	1938年6月	22頁	マーシャ・ハント	(写真有) センセーションをおこしそうな「スポーティなこの夏のフアツション」 ・ネイビーブルーと白のコンビネーション ・胸からスカートの裾にかけて飾りのステッチ
	1939年10月	62頁	ヴォークスタヂオ	(絵有) 街のお散歩にも旅行などにも好ましい「スポーティなスタイル」 ・チェックのジャケットにスエードのプレーンなスカート ・足の高いステンカラー
	1936年10月	48頁	スワガー・コート	(絵有) スポーティなデザインのスワガー・コート ・「通学や、スポーツ、オフィスへと、気軽に着られる」 ・袖山にギャザー有り、大きな格子柄
	1937年4月	54頁	Blouses d'après midi et du soir	(写真有) スポーティなブラウス ・前面にダブルのプラストロン ・テラールカラーで五分袖
	1938年4月	22頁	乙女に吹く風	(写真有) スポーティなスーツ、春先用 ・ラベルの大きなテラールカラーのジャケット ・ジャケットよりも濃い色の細いベルトが配されている ・スカートはジャケットと別の布
	1939年2月	22頁	ミス・ギンザのそぞろあるき	(写真有) スポーティなジャケット ・黒白の縞柄、「衿から裾、それにポケットに黒い特異な縁取りの飾」
	1939年4月	28頁	青地文子さま	(写真有) スポーティなワンピース ・「散歩にも週末にもどこへでも着て行けそう」 ・生地はマリンのジャージと同じマリンの薄いピンクの格子 ・共生地(格子)のベルト
	1939年10月	18頁	秋のアフタヌーン	(写真有) スポーティなスカート ・「スポーティなダブルステッチのスカートが若々しい」
	1939年11月	22頁	秋のテラード三態	(写真有) スポーティな短いコート ・布地はヘリンボン
1939年11月	77頁	パタン・ページ	(絵有) スポーティなシャツ・スタイルのプチローブ、秋冬物 ・上まで閉めたシャツカラー、飾りステッチ	
小物(と)	1936年8月	6頁	アクセサリ	(写真有) スポーティなハンドバッグの四種、夏用 ・「リネンの着物にいいでせう」 ・「一重仕立てで旅行用に軽快」
	1938年6月	24頁	そよ風	(写真有) スポーティなセ일러ハット ・素材は軽いストロー、グログランリボンでクラウンを広く包む
	1938年11月	24頁	美しいひとの秋の帽子	(写真有) スポーティな秋の帽子 ・緑と鼠色がミックスしたファーフェルトのクロシェ帽 ・クラウンにはダーク・グリーン幅のバンド
	1939年4月	24頁	マドモアゼルの春の帽子	(写真有) 「軽くてスポーティな味わび」のベレー帽 ・大きなボウを飾った紺色のベレー帽 ・素材はグログランであるがボウかベレー帽自体であるのか明らかでない
ディテール	1937年6月	18頁	白い風	(写真有) ジャケットのカフスとベルトのステッチがスポーティ
	1937年10月	23頁	秋高し	(写真有) スエードの細いベルトとテラードブラウスの釦飾りがスポーティ ・細いベルトはジャケットの上で締められはっきりと色が分かれている ・釦飾りを写真で見ることができない
	1938年2月	20頁	ジャンティなそぞろあるき	(写真有) がっちりとしたステッチのあしらわれた大きな衿と大きなポケットがとてもスポーティ、衿は少し丸みを帯びたテラールカラーのように見える
	1938年4月	31頁	春の二つの散歩服	(絵有) テラールカラーの衿がスポーティで若々しい、街の散歩服
	1938年5月	70頁	QetR	セーラー服をこしらえたいが平凡ではないものがよいという相談に対する回答。薄い毛織物かジャージの布がスポーティ
	1938年11月	19頁	秋醋	コートに配された「スクエアカットが新しいスポーティな大きなバツポケット」
	1939年2月	18頁	冬空美しいスポーツ・ウエア	次の新鮮なフアツションは、スポーティなスエードから、クラシックなビロードへ移り変わる
	1939年2月	43頁	洋装専門部 その袖をお選びになりますか?	(絵有) 「スポーティな感じに変わってくる」短い袖 ・ミツバチの巣のような刺繍を施す
全体かディテールを指しているか明らかでない	1938年3月	27頁	プチ・ローブ	(絵有) ディテールであれば裁断面の縁取り、ステッチの飾りがスポーティ 飾りステッチが肩からスカートの中ごろまで見られる
	1938年4月	30頁	春の二つの散歩服	(絵有) 郊外の散歩服、ディテールであれば、胸の下から腰まで、背後では首の下から胴まで、同じやうに釦で留めてあることがスポーティ
装い指南	1936年12月	30頁	QetR	19歳の女性が帽子にヴェールを付けたいが、マダム好みではないか? という相談。ヴェールはスポーティなものに付けるのは「断じていけません」
	1938年3月	67頁	帽子の被り方	「スポーティな洋服の時にヴェールのついた帽子を被つたりはしないで下さい」
	1939年1月	41頁	外套の着こなし方	「スポーティなスーツにファーの付いた優しい形の外装を着たりしてはおかしい」
	1939年2月	36頁	マフラの巻き方	「マフラなスポーティな外套にしめるべき」「マフラはスポーティな装いのときのアクセサリ」、スポーティな種類に属するものは反対色で組み合わせるのが魅力的。
服装の変化	1936年6月	10頁	随筆	欧米のファッション界における話題。タイユール(紳士服仕立ての女性服)が流行ってきたが、タイユールというのはそれまではスポーティな服であったが、朝、昼、夜の服にタイユールが見られる。
	1938年2月	70-71頁	QetR	「平凡なボツプで丸顔です。何か新しいベレ帽の被り方はありませんでせうか?」という相談に対する回答。ベレーはそれまでスポーティなもの以外には用いなかったものだが、今は型と素材に依ってはアフタヌーンにもイブニングにもなる。

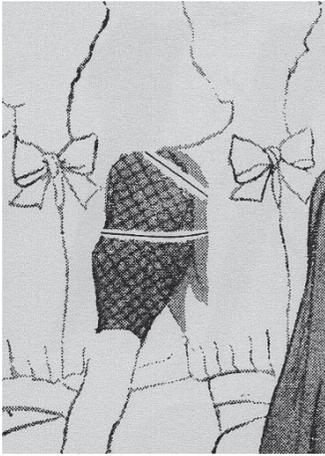


図2 刺繍が施された短い袖  
『スタイル』1939年2月号、43頁（部分）  
国立国会図書館所蔵



図3 スポーティな夏のファッション  
『スタイル』1938年6月号、22頁（部分）  
国立国会図書館所蔵

テラーカラーであった。また、格子柄や縦縞といった直線的な形態の柄についてもスポーティと関わっていた。1939（昭和14）年2月号で紹介された「蜜蜂の巣のような」<sup>25)</sup>刺繍も、絵によれば細かい格子のように見える（図2）。格子柄については当時流行の柄として『スタイル』内でも度々紹介されている。1937（昭和12）年7月号の記事「30秒・考現学（モデルノロジオ）」では銀座五丁目で行われた女性の服についての調査の結果が掲載されており、「ドレスも紺系統が1/3を占め、流行のプリントなどは二〇パーセントで、格子もまたほんの僅である」<sup>26)</sup>というように、街頭では僅かであったが、孝子の洋服のように実際に格子柄の服を着ている女性もいたようである。

次に、強調の効果がえられるものについて述べる。服の線を強調するようなステッチが施されたものについては抽出した中で6点あった。また、帽子については3点あったが、それぞれの帽子に配された幅広のリボンや大きなボウは目立って見えたであろう。加えて、色合いの対比によって強調しているものも見られた。たとえば、1938（昭和13）年6月号のスポーティな装い（図3）については、胸のあたりからスカートの裾までまっすぐに飾りのステッチが施され、色合いはネイビーブルーと白で明暗の差が大きい配色となっていた。配色に関しては、1939（昭和14）年2月号に「すべてスポーティな種類に属する品は、その色調の取合せ方は、同系色で合わせるより、寧ろ反対色の組方が、却てより生々（いきいき）と魅力的なものなのではないでせうか」<sup>27)</sup>という指南があり、大きく差を持った色の組み合わせが勧められていた。

そして、生地素材自体がスポーティとされていたものはジャージーとスエードであった。編地であるジャージーの生地は伸縮性のある活動性に優れた素材であり、1916年にガブリエル・シャネル（Gabrielle Chanel）がウエストをしめつけないジャージーのドレスを発表し、女性の日常着として使用される素材となっていた。スエードは革の裏側を毛羽立たせ、控えめな光沢が特徴であるが、この素材のどのような点がスポーティであるのか説明文には見られなかった。しかしこの事については、1936（昭和11）年12月号の質問欄に寄せられた質問に、「革の花飾りはソアレにはいけ

ませんか」というものがある。この質問に対し服飾デザイナーの山脇敏子は「革の花飾りはスポーツ風のものにはマッチします」と回答しており、スポーティという語ではないものの、スポーツ風な装いに革の素材が使用される場合があったことが分かる<sup>28)</sup>。ほかにも、1936(昭和11)年8月号に掲載されたスポーティなハンドバッグにも縁取りなど一部ではあるが革の素材が使用されていた。

#### 4-2. スポーティな装いの指南

服のディテールや小物などでスポーティな装いの調和を図る取り合わせについて、その指南の中で見られたのは、スポーティな服や小物をアフタヌーン向きのもので取り合わせてはいけない、というものである。たとえば、1936(昭和11)年12月号や1938(昭和13)年3月号で、スポーティな装いのときにはヴェールはいけないとしている。ヴェールは帽子に付けられていたものであるが、孝子の被服しらべや卒業論文には見られず、読者の質問を見ると「マダム好み」であるという印象もあった。しかしながらアフタヌーン用の帽子では、「お嬢さんがお掛けになってもおかしくはありません」ともしている。ほかにも、1939(昭和14)年1月号にはスポーティなスーツにファーのついた優しい形的外套を合わせるのをおかしいとし、また1939(昭和14)年2月号ではマフラーはスポーティな外套や装いのときに使うべきで、ドレッシーなコートやアストラカン<sup>29)</sup>の外套のときは絶対禁物であるとしている。

また、色の取り合わせの指南については1939(昭和14)年2月号の内容について前項で述べたが、スポーティな品であるマフラーに関しては「グレイの外套だから鼠系統のマフラではないかと探しあるくのは至極安全なことながら、なんだか知恵がない」とした上で、「マフラだけは、キユウと衿元で引締めて、明るい単色とか、派手なタータン・チェック等で一つ異なつた調子」が印象的であると説明している。

#### 4-3. 着用場面

スポーティな服の着用場面を述べる前に、表では「服装の変化」と分類したスポーティに関する同時代の服の変化について述べる。まず、テーラードやベレー帽といった、それまでスポーティとされていたものがアフタヌーンやイヴニングにもみられるようになってきたという意見がある。1936(昭和11)年6月号には「タイユール<sup>30)</sup>が大変に流行つてきた。タイユールと云へば今まではスポーティな着物だつたのに *tailleur du matin* *tailleur d'après-midi* *tailleur du soir* と朝から晩までタイユールである」<sup>31)</sup>としている。これはヨーロッパの流行について書かれた記事の一部であるが、同誌ではほかにも、1937(昭和12)年4月号のアフタヌーンやイヴニングのためのブラウスについての記事の中でスポーティという語が使用され、1939(昭和14)年10月号ではアフタヌーンの装いのスカートに対してスポーティという語が使われていた。また、ベレー帽については、1938(昭和13)年2月号でベレー帽はそれまでスポーティなもの以外には用いなかったが「型と素材に依つて、アフタヌーンにもイヴニングにもなります」<sup>32)</sup>と説明されていた。

以上のように、スポーティな装いを構成していた一部の要素は次第にアフタヌーンやイヴニングに取り入れられるようになっていったという変化は起こっていたが、基本的にスポーティな型の服はアフタヌーンやイヴニングとは区別されるものであった。

1940(昭和15)年6月号に掲載された内容ではあるが、同誌に寄稿していた作家の阿部艶子はワンピースの着こなし方について「ワンピースと云つても、スポーティな着物もあり、他所行き(ア

フタヌーン)の絹の着物もありイヴニングだつてあるわけなので、一口にその着こなし方といふことも出来ません」<sup>33)</sup>と語っている。

最後に、スポーティな服はどのような場面で着用されたのかを見ていきたい。『スタイル』においてスポーティに関する説明の中で見られた着用場面は、散歩、旅行、スポーツ観戦、週末、通学、通勤であり、これらは同時代のスポーツ・ドレスの用途と同様であった。田中千代は『新洋装読本』における「スポーツドレス」の項で、「これはスポーティな型の服と評した方がよいと思ふ」とした上で、さらに着用場面については「散歩、スポーツ、競技の見物、旅行、買物、事務、平常に用ひて特にどんな時に用ひると云う規則はない」<sup>34)</sup>という。しかしながら、アフタヌーン以上の服を着用すべき場面を除く必要があることは『スタイル』において警告されていた。読者からの質問欄では「日本のお芝居は午後三時頃から始まりますが、ソアレで出かけては変でせうか」という質問に対して「チットモ変ではございますまいスポーツドレスなんぞであんなところへまでノシてる方がありますが、あれこそ変でせう」とし、午後三時頃から始まる芝居の観劇には、セミ・イヴニングかアフタヌーンを着用するように勧める回答をしていた<sup>35)</sup>。

## 5. おわりに

若い女性が手持ちの服で装いを決める際や服を仕立てる際に参考となるような雑誌であった『スタイル』から、洋服に関わるスポーティの語を抽出した結果、スポーティな洋服の特徴として、テラードや格子柄などの直線的な形態、ステッチほか大きさや色の対比などで強調の効果が見られるもの、生地素材自体がスポーティとされていたものが挙げられた。小林孝子の「スポーティな型」の洋服と照らし合わせれば、オーバーコートのテラードカラーやワンピースのシャツカラーといった直線的な衿、いずれも格子柄であること、色鮮やかなチェックのワンピースに配された白丸ボタンや白ピケの衿のはっきりとした色の対比にその特徴を見ることができよう。

また、同誌ではスポーティな服や小物をアフタヌーン向きのもので取り合わせてはいけないという指南の記事や質問回答も見られ、『スタイル』の寄稿者が、読者の洋装をより洗練させたい考えを持っていたことも窺える。

そして着用場面については、同時代のスポーツ・ドレスと呼ばれる服と同様であり、アフタヌーン以上の服の用途とは区別が必要なものの、通勤や通学をはじめ、散歩、旅行、スポーツ観戦、週末など様々な用途で使用できる洋服であった。

本研究で明らかにしたスポーティな洋服の特徴については、それらがなぜスポーティであるのか、その歴史的な経緯や同時代の社会における要因を述べるには至らなかった。『スタイル』以外にも同時代の洋服に関する刊行物を資料として用いて、以上を明らかにすることを今後の課題としたい。

## 注

- 1) 1936(昭和11)年3月卒業。
- 2) 日本女子大学成瀬記念館所蔵。
- 3) 孝子は卒業後に加筆し、卒業論文は1938(昭和13)年4月に完成した。
- 4) 服に加えて下着、帽子など小物も含む。表紙に記された日付は昭和13年4月28日。
- 5) 日本女子大学成瀬記念館所蔵「小林孝子衣服標本」(製作期間は1940(昭和15)年4月20日から10月25日)。
- 6) 女学生の割合の38.7%を除いた結果である。拙稿「1930年代の日本女子大生の洋服—孝子の洋服所持の実態と装いの具体像—」『小林孝子衣服標本資料集』、2022年2月28日、120頁。
- 7) 田中千代『新洋装読本』(南光社、1936年)、141-142頁。

- 8) 拙稿、前掲論文、121頁。
- 9) 谷口順子「現代ファッションにおけるスポーティブ・ルックについて」、『杉野女子大学紀要』(14)、1977年、1-21頁。
- 10) 今木加代子「服飾デザインに於ける「ドレッシーとスポーティー」に関する考察」『帝塚山短期大学紀要』11、1974年3月、30-37頁。今木加代子「服飾デザインにおける「ドレッシーとスポーティー」に関する考察 II」『帝塚山短期大学紀要・自然科学編』13、1976年3月、48-60頁。今木加代子「服飾デザインにおける「ドレッシーとスポーティー」に関する考察 III：素材とアクセサリーズについて」『帝塚山短期大学紀要・自然科学編』14、1977年3月、17-31頁。
- 11) 国立民族学博物館図書室と国立国会図書館において、宇野千代(編)『復刻版 スタイル』(臨川書店、2003年)を閲覧した。
- 12) 1941(昭和16)年10月から、『女性生活』と改題され、その後1944(昭和19)年1月まで刊行されたが、戦況の悪化とともに廃刊となった。戦後再び『スタイル』の誌名で復刊されている(復刻版『スタイル』第1回配本の外装内側「復刻にあたって」より)。1959(昭和34)年5月号をもって廃刊する(松尾、2021)。
- 13) 松尾量子「宇野千代編集の雑誌『スタイル』に関する一考察初期の誌面の変化を中心に」『山口県立大学学術情報』第14号、2021年3月31日、102頁。
- 14) 本研究の対象としている1936(昭和11)年6月の創刊号から1939(昭和14)年12月号までの『スタイル』においてパターンを掲載した洋裁指南は1936(昭和11)年10月号48頁におけるスポーツ・ウエアとワガー・コートのみ確認できた。
- 15) 『スタイル』1938(昭和13)年3月号(スタイル社、1938年3月)、70頁。ファスナーの紹介は1938(昭和13)年1月号34頁。
- 16) 本章は拙稿(前掲論文)の「5-2. スポーティーな服の型」に加筆、修正をしたものである。
- 17) 資料番号2-21『小林孝子衣服標本資料集』、2022年2月28日、21頁。
- 18) 「七分」は身頃の丈の長さを示していると思われる。
- 19) 資料番号2-32『小林孝子衣服標本資料集』、2022年2月28日、25頁。
- 20) 中山千代『日本婦人洋装史』(吉川弘文館、1987年)、411頁。
- 21) 衣服に関する記事の中であってもスポーティが衣服に直接関わらないものは表から省いている。たとえば、「[略] 最も新しい乗馬のなりに身を固めて、そして古風な馬車を操るといふことは、スポーティな魅力とともに、何か調和を破る面白さがあるのではないだろうか」(阿部艶子「随筆 流行断片」『スタイル』昭和11年6月号、10頁)。
- 22) 1936(昭和11)年10月号48頁は文章と絵を照らし合わせると絵の特徴と一致しないため絵からの情報は記していない。1937(昭和12)年6月号18頁は「カウス」と記載があったが、カフスの誤りであると考えられる。
- 23) 『スタイル』1938(昭和13)年5月号(スタイル社、1938年5月)、19頁。
- 24) 『スタイル』1937(昭和12)年6月号(スタイル社、1937年6月)、18頁。
- 25) 『スタイル』1939(昭和14)年2月号(スタイル社、1939年2月)、43頁。
- 26) 『スタイル』1937(昭和12)年7月号(スタイル社、1937年7月)、31頁。
- 27) 『スタイル』1939(昭和14)年2月号(スタイル社、1939年2月)、36頁。
- 28) 『スタイル』1936(昭和11)年12月号(スタイル社、1936年12月)、30頁。
- 29) アストラカンとは黒色で縮れている光沢に富んだカラクール種の子羊の毛皮のこと。
- 30) タイユールとは紳士服仕立ての女性服を指す。
- 31) 『スタイル』1936(昭和11)年6月号(スタイル社、1936年6月)、10頁。
- 32) 『スタイル』1938(昭和13)年2月号(スタイル社、1938年2月)、71頁。
- 33) 『スタイル』1940(昭和15)年6月号(スタイル社、1940年6月)、12頁。
- 34) 田中千代、前掲書、141-142頁。
- 35) 『スタイル』1936(昭和11)年12月号(スタイル社、1946年12月)、30頁。

## Ⅶ 1930年代の婦人服における日米比較 —小林孝子衣服標本とシアーズ・ローバック 通信販売カタログの検討から—<sup>1)</sup>

内村 理奈  
UCHIMURA Rina

### 1. はじめに

本共同研究において中心に扱っている「小林孝子衣服標本」は、すでに研究代表者の森によって、その資料的価値について明らかにされている<sup>2)</sup>。ゆえに、ここで改めて詳細に語ることはしないが、1930年代に本学にて学生生活を送った一学生の衣生活の詳細が、実際に本人が身につけていた衣服の布片とともに叙述されているというユニークかつ貴重な資料となっている。女中も含めたほかの家族の衣服についても同様に記録されたものであるが、本論では、孝子本人の洋服に焦点を当てることとしたい。本共同研究における筆者の役割は欧米の服飾文化との比較検討であるので、本論においては、同時期のアメリカで大変人気のあったシアーズ・ローバック社の通信販売カタログと、孝子の衣服標本を比較してみたいと思う。

シアーズ・ローバック社の通信販売カタログとは、リチャード・ウォーレン・シアーズ (Richard Warren Sears, 1863-1914) とアルバ・カーティス・ローバック (Alvah Curtis Roebuck, 1864-1948) によって、1893年にアメリカ、イリノイ州シカゴに創設されたシアーズ・ローバック社 (Sears, Roebuck & Co.) による通信販売用の商品カタログのことである。シアーズはミネソタ州のノース・レッドウッド駅において貨客輸送の代理店の仕事をしているうちに、在庫処分目的で卸売り業者から商品を販売するという事業をはじめ、1886年に時計の通信販売店である R.W. シアーズ・ウォッチ・カンパニーを立ち上げた。翌年には、輸送に便利な交通の要衝シカゴのディアボーン街に店舗を構え、時計修理を一任するようになったローバックとともに、シアーズ・ローバック社を立ち上げたのである<sup>3)</sup>。ヨーロッパにおいては、世界最古のデパートであるフランス、パリのボン・マルシェ百貨店が創業当時 (1852年創業) より、すでに通信販売を行っていたことが知られているが、それはやはり鉄道の実業と大きな関係があるものであった<sup>4)</sup>。ヨーロッパよりすこし遅れをとるが、シアーズ・ローバック社による通信販売は、20世紀アメリカを代表するアメリカ最大の小売企業として確固たる地位を築くことになった<sup>5)</sup>。アメリカの大衆消費社会の象徴のようなカタログであり、1896年からは春夏号 (春号)、秋冬号 (秋号) の年2回発行され、常に1000ページ前後もの厚さのある大判の冊子の形態をとり、ありとあらゆる生活用品の総合カタログになっている。発行部数はわかっているところでは、1902年には159万1727部、最盛期の1975年には4000万部にも達したとされる。このカタログを見れば、アメリカの一般家庭における生活文化のすべてを窺い知ることができると言ってよいだろう。1冊のカタログには1万点を優に超える商品が掲載されたが、その30%以上が衣類に関するものとなっている。

本論では、本学被服学科が所蔵している、1936年のカタログ<sup>6)</sup>を取り上げて、孝子の衣服標本と比較検討を試みる。そのことによって、当時の日本の中流家庭の女学生の衣生活が、同時期のアメリカの衣生活とどのような関係があるのかが、わずかな事例ながらも、見えてくることだろう。

## 2. 小林孝子衣服標本における洋服

小林孝子の衣服標本において、孝子本人の洋服の点数は計48点である<sup>7)</sup>。本資料においては、個々の衣服の布片が標本にされているので、それぞれの衣服の全体像がすべて明確にわかるわけではない。ひとつひとつの布片と、そこに付された文章から、おおよその服種をイメージするしかない。ただし、孝子本人による一部の洋服のイラストが別途描かれているので、そこから、若干の想像はできるようになっている。服種の主なものはワンピースやコート（春物、秋冬物）、ジャンパー、スカートなどである。また、衣服標本の文章から読み取れる興味深いこととしては、好みの生地を買い求め、雑誌を参考にして衣服を自ら制作している様子や、本学の衣服実習と思われる授業において制作された衣服などが比較的多いことである。当時の女学生が大学の授業内のみならず、日常の私生活においても、自分で洋服を制作するという家庭裁縫の文化が当たり前のこととして根付いていたことを感じさせる。たとえば、昭和15年6月24日の判が押されている標本（『小林孝子衣服標本資料集』資料写真（以下では『資料』と略記する）2-40）には、「昭和13年の夏、母の留守に近所に来た“ウテナ洋装店”へ女中（16才）をやってお見立てをまかせて買って来てもらって、主婦之友のワンピースを縫った」とある。孝子本人より若いと思われる16才の女中に、生地を見立ててもらって、雑誌『主婦之友』に掲載されていたであろうワンピースの型紙をもとに、自分で誂えたということである。女中に見立てを任せると面白い事実であるが、女学生であった孝子が、『主婦之友』を参考しているところも興味深い。1930年代には若い未婚女性のためのファッション誌は存在しなかったということである。一般に若者文化は1960年代以降に台頭してきたと言われるが、学生の孝子が主婦を対象とした雑誌を参考にして衣服制作をおこなっているのは、それを裏付けるかのようである。

このような当時の女学生の衣生活の実態が垣間見えるが、以下では、個々の標本を選んで、特に生地であるテキスタイルの模様に着目してシアーズ・ローバックのカタログと比較検討していきたい。取り上げる模様は「格子柄」「花柄」「水玉模様」である。

## 3. 格子柄およびスワガーコート

孝子の洋服は、当然のことかもしれないが、洋装用の洋風生地が用いられている。そのなかでも、比較的多く見られるのは、格子柄（チェック柄）であり、14点確認できる。もちろん、格子柄は和装にも見受けられるので、洋服にのみ用いられている柄ではないが、和装と比較したときに、色彩が明るく西洋のタータン・チェックやギンガム・チェックを思わせるデザインになっている。

特に（『資料』2-8）は、典型的なギンガム・チェックと分類される模様と言えらるだろう。（『資料』2-5）（『資料』2-6）も、シアーズ・ローバックのカタログに掲載されている計り売り生地見本を見る限り、アメリカではギンガム・チェックと分類されている模様と相当する。例えば、シアーズ・ローバックのカタログには、図1のようなページがある。そこには、「ベスト・ギンガム」「スタンダード・ギンガム」「ガラ・ギンガム」「リーダー・ギンガム」の4種に分かれた格子柄が掲載され、それぞれ、1ヤード（約90センチメートル強）につき、18セント、15セント、11セント、9セントと価格設定がされている。後に述べるように他の柄の布地に比べると比較的安価であり、おそらく孝子が購入した生地も木綿のものであれば高価なものではなかったと思われる。

さらに、（『資料』2-31）は「孝子洋服地、昭和11年春、銀座いさみやで作ったスワガーコートとスカート」の生地で、まだ肌寒いこともある春先のコートにふさわしいようなウールのチェック柄の布地となっている。上で述べた比較的単純なギンガム・チェックよりは、織物としての工夫が



図1



図2



図3

みられる格子柄である。孝子は、スワガーコートをはじめにも持っているが、これはどのようなコートであったのだろうか。シアーズ・ローバックのカタログを見ると、大ぶりのチェック柄のかなりゆったりとした様子のコートが掲載されているので、同時期のアメリカにも存在し、流行していたコートであることがわかる。スワガー (swagger) とは、「いばって歩く、ふんぞり返って歩く」といった意味を持つ言葉であるが、確かにこの襟を少し立てたゆったりとしたシルエットのコートは、威風堂々とした様子を演出してくれるようにも見える。

チェック柄の布地を背面ではバイアスに仕立てることもあり、その場合、英語では fish tail と説明されているように、魚の豊かな尾びれのようなイメージになるのであろう (図2)。背面をバイアスにしていないデザインもあるが、背部がゆったりとしたこのロング・コートは、全体に大人の女性の優雅さを感じさせるものとなっている。正面から見ると、テラーカラーで襟は閉じているものと (図2)、広く開襟になっているものがある (図3)。

衣服標本の生地は、たしかにチェック柄ではあるが、やや、シアーズ・ローバックのコートよりは、格子の大きさが小さいかもしれない。そして、孝子の洋服イラスト (『資料』 p.86 「孝子洋服一覧」) をあわせてみると、簡略化したイラストであるからなのかもしれないが、シアーズ・ローバックのカタログのスワガーコートほど布にゆとりがとられておらず、膝下丈の長さがあるようにもみえず、アメリカのものと同型とは思われない。孝子の記述によれば、スカートも共布で作っているようなので、日本においては、このコートは、スーツ的な衣服であったのだろうか。アメリカのスワガーコートと日本のスワガーコートは、名称は同じで、チェック柄を用いるものであっても、若干異なる形態をしていたのかもしれない。

#### 4. 花柄

花柄の洋服も4点、標本にされている。先に述べた女中に生地を見立ててもらい、自分で仕立てたワンピースは花柄で、これといっしょにもう1点同様に女中に見立ててもらって自分で眺えたり



図4



図5

ワンピースがあるが、どちらも同様に花柄であった。孝子は、前者をAとし、後者をBとして整理しているが、Bの標本には、「[AもBも]両方とも良い柄で気に入った」と記してあり、孝子にとってこれらの花柄は好みの模様であったようである。

孝子本人の個人的な好みなのか、それとも、花柄自体が当時流行っていたのかどうか、気になるが、シアーズ・ローバックのカタログを見ると、孝子のワンピースと似ているやや抽象化された花柄は比較的良好に見られたようである。本論では、日本における花柄の流行について確認はできていないのだが、少なくとも1930年代のアメリカにおいても、ワンピースの生地と同様の花柄はよく見受けられたといえるだろう。たとえば、図4、図5などにみられるように、木綿や、絹、あるいはペンベルグの花柄の生地が計り売りされていて、それらの柄を見てみると、孝子の標本の花柄と極めて似通った、抽象化されあまり小さすぎない程度の花柄がほとんどである<sup>8)</sup>。つまり、テキスタイルのトレンドとしては、日本の女学生の好みと、アメリカの一般市民の女性が好む花柄には共通点があるといってよいだろう。アメリカの生地が日本に輸入されていたのか、あるいは日本がアメリカのデザインの影響を受けていた可能性も考えられるだろう。

また、シアーズ・ローバックのカタログに掲載されている花柄の生地は、上述のギンガム・チェックの生地と比べると、比較的値段が高かったようだ<sup>9)</sup>。1ヤードにつき、木綿だと28セント程度、絹だと1ドル19セントのものもあり、ペンベルグは79セントとなっている。シアーズ・ローバックのカタログをみると、1ドルも出せばワンピース1着を買うこともできたようであるから、1ヤードで1ドル19セントもする絹の花柄の生地は、なかなか高価なものと思われる。ちなみに、孝子の洋服で、もうひとつ別の花柄の夏用ワンピースの生地は、「生地代、約八尺で九円六十銭也」と記されている（『資料』2-45）。1尺は約30.3センチメートルなので、約240センチ=約2.5ヤードをこの値段で購入したということであろう。公務員の昭和12年の初任給が75円という調査記録もあるので<sup>10)</sup>、9円60銭という生地代は、学生にとってはすこし背伸びをした贅沢な生地だったのではないか。

## 5. 水玉模様

孝子の洋服には水玉模様が3点ある。単色の水玉模様と、複数の色使いの水玉模様である。水玉



図6



図7

の大きさは、一定の大きさの円が一定の間隔で繰り返されたものであり、英語では polka dots という名称で表現される水玉模様である。これもまた、アメリカのトレンドとも一致していると考えられる。というのは、シアーズ・ローバックのカタログでは、水玉模様は、かなり絶賛されているといってもよいような扱いになっているからである。

たとえば、図6においては、丸1ページを使って、水玉模様のワンピースについて取り上げており、その見出しには、「どんな女性でも、水玉模様の洋服を着れば、一番素敵にみえます。ますますきれいで、若々しく、どんなときでも、正真正銘のおしゃれになります！」(筆者訳、以下同様)と強調されている。水玉模様さえ身につければ、どのような時、そしておそらくどのようなシチュエーションにおいても、最高のおしゃれになれるというのだから、当時もっとも女性にもてはやされたテキスタイルの模様であったと言えるのかもしれない。

すでに述べているように、シアーズ・ローバックのカタログでは布地の販売もしているのだが、そのページ(図7)においても、次のように水玉模様の素晴らしさと万能さが強調されている。

水玉模様への大きな突進!みんな夢中になっている!その責任はパリにある!でも、もちろん、誰も嫌だとは思っていない。世界中がこのファッションを好んでいるから。水玉模様は人を実際よりも素敵に見せる魔法のような贈り物だ。特に、紺色に白い水玉模様の場合には!たとえ、あなたがちょっとぽっちゃり型であろうとも、すこし痩せてみえるか、一あるいは完璧に一、水玉模様は、あなたをよりかわいらしく見せる力を持っている。1年中、水玉模様を身につけましょう。6月でも1月でも、4歳の少女でも、70歳の銀髪の女性でも、とても素敵です!ピン・ドット、ピー・ドット、コイン・ドット、あなたが最も好きなサイズの水玉模様を選んでください。布地も、あなたに最適な値段のものを選んでください!すべての布地が、特別価格になっています!

このようにカタログでは水玉模様を絶賛し宣伝しており、カタログの中でここまで称賛している布地は他にはない。素材も、シルクのクレープ地(縮緬)、レイヨン・フレンチ・クレープ、レイヨン・タフタ、ベンベルグの4種が掲載されており、それぞれ、1ヤードにつき、59セント、54セ

ント、37セント、72セントという値段設定がされている。とても安いというわけではないが、これで安くなっているのだから、通常はもうすこし値が張るのであろう。同じ広告の下部には、ここに描かれているブラウスやドレスの型紙がそれぞれ15セントで販売していることも記されている。引用文中にあるように、地色が紺色で、白い水玉模様はもっとも上品だと思われていたようだ。孝子の衣服標本にも、1点そのようなものが存在していて（『資料』2-17）、銀座松屋で購入した生地で、やはりワンピースに仕立てたようである。水玉模様は世界中で人気があり、それは、パリからはじまった流行であるということも、引用文からは窺える。季節も年齢も問わないというのだから、多くの人に愛された模様ということになる。孝子自身も、その影響下にあったということになるのだろう。

## 6. 結論

以上のように、小林孝子の衣服標本は、1930年代に東京で学生生活を送った一学生の衣生活の記録であるが、その標本である布片を、彼女の文章とともに、アメリカの通信販売カタログと比較検討してみると、意外なほどに多くの共通点が見いだされたといつてよいだろう。当時の日本女性の洋服文化がアメリカ（おそらくフランスも）の流行の影響を受けていたことが窺われ興味深い。本論では、3つの柄・模様にと絞って検討したが、そのほかにもまだ詳細な検討の余地があると思われる。また、本論では、アメリカの一般市民に好まれたシアーズ・ローバックのカタログにと絞って、比較検討をおこなったが、たとえば、フランスのボン・マルシェ百貨店の同時期の通信販売カタログとも比較検討を行えば、もうすこし規模を広げて欧米服飾文化との比較のなかで、孝子の資料を位置づけることができるだろう。さらに、『アメリカン・ヴォーグ』のようなパリの最新モードを伝えるハイ・ソサエティ向けの雑誌記事とも比較ができれば、中流家庭の衣生活をより客観的に捉えることも可能となるであろう。また実際に、欧米の布地がどのように日本に入ってきていたか、あるいは日本が欧米を模倣していたのか、そのような布地の流通システムや生産過程についての考察ができなかったことは悔やまれる。本論では、以上のような検討はできなかったが、今後の課題にしていきたいと考えている。本論では、孝子のささやかな日常の衣生活の記録から、同時期の欧米社会のファッション動向との関係をわずかながら考察するにとどまった。

### 注

- 1) 本稿は、2022年2月28日に発行した『小林孝子衣服標本資料集』に掲載した論文の再録である。
- 2) 森理恵「小林孝子の衣服標本—1870年代～1930年代の中流家庭の衣生活—」『成瀬記念館2018』No.33、日本女子大学成瀬記念館、2018年、pp.60-67。
- 3) シアーズ・ローバック社に関する解説は主に次の論文を参考にしている。田村沙織、坪井善昭、伊藤紀之「20世紀アメリカの生活デザイン—シアーズ・ローバックの通信販売カタログを事例として—」『共立女子大学家政学部紀要』第57号、2011年、pp.81-100。
- 4) フィリップ・ペロー『衣服のアルケオロジー—服装からみた19世紀フランス社会の差異構造—』大矢タカヤス訳、文化出版局、1985年、p.112。
- 5) シアーズ・ローバック社は通信販売専門の会社である点が、百貨店から通信販売が始まったフランスとは異なる。
- 6) *Sears Roebuck Golden Jubilee, Index Pages in back of Book, Spring and Summer, 1936, No.172*, Philadelphia, Sears Roebuck and Co.
- 7) 森、前掲論文より。
- 8) 筆者が日頃調査をしている18世紀頃のフランス服飾を参照すると、写実的な花柄のほうが圧倒的に多



## 〔編集後記〕

コロナ禍になりはや3年目となりました。この間、海外との交流が絶たれ、研究計画の変更を余儀なくされたりしつつも、工夫を重ねられて研究を続けて研究成果をまとめられた研究員の皆様の努力に感謝申し上げます。さて、ここに「日本女子大学総合研究所紀要」第25号をお届けいたします。本号は2021年度に研究期間を終了した2件の研究を掲載しております。

研究課題(72)「日本女子大学卒業生小林孝子の衣服標本研究—1930年代の日本女子大生とその家族の衣生活—」は、本学および他大学被服学科の教員と成瀬記念館学芸員、品質評価センターによる共同研究です。これは、日本女子大学校家政学部第二類第33回卒業生小林孝子が「形態美論」の今和次郎指導による卒業論文「考現学より見たる一家庭」およびその後の研究成果「小林孝子衣類標本」が2015年に工学院大学図書館から日本女子大学に返還されたのを契機とし、研究されたものです。住居学科と被服学科の前身である生活芸術学科の時代を彷彿とさせる住居学的視点の卒業論文とその後の被服学的な研究をされた卒業生の軌跡が詳細に窺える貴重な資料で、日本女子大学家政学部の発展過程を示す重要な資料であると考えます。

研究課題(76)「ウィリアムズ症候群のための“支援プログラム”の開発～投影法心理検査を基盤として～」は、研究課題(69)「ウィリアムズ症候群の視空間認知特性の研究」(第23号に掲載)において明らかとなった「図と地の知覚」の知見をもとに家族や関係者を含めた総合的な支援方法を探る、総合研究所の研究(4)日本女子大学を拠点とする学際的な共同研究・調査です。家政学部児童学科教員の専門性の幅広さを生かした本学ならではの研究成果と考えます。

2022年度は大学に対面授業が戻り、西生田統合後のキャンパスの学生生活が戻ってまいりました。完全な復活もあとわずかと期待し、さらなる学園の総合的研究の発展を祈っております。  
飯田文子、橋本のぞみ、大崎園夏

## 日本女子大学総合研究所紀要 第25号

---

2022(令和4年)11月1日 発行

発行人 飯田文子

発行所 日本女子大学総合研究所

〒112-8681 東京都文京区目白台2丁目8番1号

電話 03(5981)3277(直通・FAX)

印刷所 メディア・パック

〒178-0061 東京都練馬区大泉学園町6丁目13番20号

電話 03(5947)9135

---

